
消失した記録～ロストメモリー～

風鏑龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

消失した記録〜ロストメモリー〜

【Nコード】

N2189Y

【作者名】

風鏑龍

【あらすじ】

荒廃した世界・・・魔王を名乗る者が現れ・・・魔物を統べている・・・

過去に一度、魔王と討伐せんと立ち上がる者達が居たが・・・

その者達は大きな戦いの最中に消えて・・・長い時が過ぎた・・・

少年は記憶を失い、河原で倒れているのとあるギルドに保護される・・・

そこで出会った少女・・・同じように記憶を無くして・・・

そして、お互いに懐かしさを感じ合う・・・不思議な出会い・・・少年と少女は記憶を探す為に行動を共にする事にした・・・助けてくれたギルドへ、せめてもの償いとして銃使いとして加入した。

運命は遠い過去に紡がれていた。

しかし途中でその運命は停止していた・・・

少年と少女は出会い・・・停止していた運命がまた動き出す・・・人間は破壊と創造を繰り返し・・・何度も同じ過ちを犯し続ける・・・

少年と少女は・・・どんな運命を紡ぐだろうか・・・人間と同じ・・・破壊の運命を紡ぎ、滅亡を迎えるのだろうか？

それとも・・・

ハンゲームのサークル「自作小説投稿所」と言う所にも投稿しています。

第零話（前書き）

注

第零話となっておりますが、この部分は読まなくても大丈夫です。

と言つかこのロストメモリーが完結後に、

この小説の続きを書くので、その為の奴とでも考えてください。

第零話

選択肢を選ばないと言う選択肢は存在しない。

選択肢を選ばないと言うのは“選択肢を選ばない”と言う選択肢を選んだ事になるのだから…

??? 「はぁーだるいわぁ…」

金髪の女性が机にもたれ掛かり、机の上に置いてある書類を横に追い遣る。

美しい金髪がさらりと流れるかの様にゆれる。

??? 「駄目ですよー、ちゃんと仕事してくださいよー」

そんな金髪の女性を注意する黒髪の頭に天使の輪を浮べ、

布をそのまま纏っているかの様な服を着用した女性。

??? 「だあってえ、世界の管理なんてつまらないんだもん、ねえねえガブちゃん」

猫なで声で金髪の女性がガブちゃん…もとい、ガブリエルに話しかける。

ガブリエル 「はぁ…アティーナー様…仕事してください…」

大きな溜息をつきながらガブリエルはアテーナーが机の墨に追い遣った書類を手取る。

アテーナー 「ええーガブちゃあーん、アテナもしくはアテネって呼んでよぉ」

頬を膨らませて子供の様に駄々をこねるアテネ…見た目は大人の女性なのだが…

ガブリエル 「アテーナー様…この書類を……」

手にとって見た書類を見て、一瞬で表情を引き締め、アテーナーを見るガブリエルだが、

アテーナー 「ふんっ」

頬を膨らませて、そっぽを向いているアテーナーが視界に入った。

ガブリエル 「…アテネ様…」

ここは自分が折れなければ話が進まないと仕方なくアテネと呼ぶ。

アテネ 「なあゝに？」

とたんに満面の笑顔になるアテーナー…もといアテネ。

ガブリエル 「この書類の世界なのですが…」

凄く癪なのだが、こんな子供っぽい事をしているふざけた人でも、

一応はガブリエルの上司に当たる人物である。

出来る事なら今すぐにでもアイテール様に土下座してでも上司をチエンジして貰いたいのだが、

アイテール様じきじきのお願いでアテーナーの下についているのでチエンジして欲しいなどいえるはずがない。

アテネ 「んゝん？何々？うわぁ…世紀末みたいな世界ねえ」

ガブリエルが渡した書類をさつと見ると、アテネは溜息をついた。

アテネ 「この世界がどうしたの？」

ガブリエル 「いえ、その世界の人間の中の、■■■■と言う者なのです」

アテネ 「この子？この子がどうし…ああ、無断に魂が改造されてるじゃない、

誰よこんな事したの、天国と地獄にどやされるじゃないっ！」

ガブリエル 「それが、その魂は人間の手によって改造されたみたいなので…」

アテネ 「人間が魂の改造なんて出来る訳無いじゃない、ふざけてる？」

ガブリエル 「いえ、それが元人間で今現在は強大な魔力をもった魔王になっている様で」

アテネ 「成る程、その魔王が息子の魂を改造して輪廻の機構リインカーネーションから

外れた魂を作り出したのね…」

ガブリエル 「ええ、それに肉体の強化と改造の所為か死ににくいですし…」

「この人間、このままでは輪廻を狂わせてしまうのでは？」
リインカーネーション

アテネ 「ん…この子が死んだら別の世界に転生させて魂の修復を図ってから

天国なり地獄なりに送るのが良いわね、このまま送ったら刎ねられるわ」

ガブリエル 「刎ねられる…ですか？何がです？」

アテネ 「私の首とか私の首とか私の首とかね」

ガブリエル 「それは…笑顔で答える事なのですか？」

アテネ 「大丈夫よ、とりあえずこの世界のこの子の監視頼むわね、

その子が死んだら魂を、輪廻の間に送つといてね」

ガブリエル 「はあ…この■■■■と言う人間、強化されて人外チツクになってるのですが

死ぬなんて事があるのですか？」

アテネ 「大丈夫よ？死ぬと言うより世界に拒絶されると思うわ」

ガブリエル 「それは…未来透視ですか？それとも予想ですか？」

アテネ 「予想よ？その性格だと、多分過去と未来の狭間辺りに落ちて世界に拒絶されるわね」

ガブリエル 「はあ…とりあえずアテネ様の言うとおりに致します」

アテネ 「よろしくねー」

ガブリエルが退室していった後、アテネはニヤニヤとした笑いを浮かべながら呟く。

アテネ 「これで合法的に人間を転生させて遊べるわねえ…ふふっ楽しみだわあ

早く死なないかしら？」

第一話 目覚め（前書き）

荒廃した世界・・・魔王を名乗る者が現れ・・・魔物を統べている・・・

過去に一度、魔王と討伐せんと立ち上がる者達が居たが・・・
その者達は大きな戦いの最中に消えて・・・長い時が過ぎた・・・

少年は記憶を失い、河原で倒れているのとあるギルドに保護される・・・

そこで出会った少女・・・同じように記憶を無くして・・・
そして、お互いに懐かしさを感じ合う・・・不思議な出会い・・・
少年と少女は記憶を探す為に行動を共にする事にした・・・
助けてくれたギルドへ、せめてもの償いとして銃使いとして加入した。

運命は遠い過去に紡がれていた。

しかし途中でその運命は停止していた・・・

少年と少女は出会い・・・停止していた運命がまた動き出す・・・
人間は破壊と創造を繰り返し・・・何度も同じ過ちを犯し続ける・・・

少年と少女は・・・どんな運命を紡ぐだろうか・・・
人間と同じ・・・破壊の運命を紡ぎ、滅亡を迎えるのだろうか？

それとも・・・

第一話 目覚め

うつすらと感覚が戻り、体中に違和感を感じる・・・

動けない・・・体が動かない・・・ここは何処だろうか？

体はまるで鉛の様に重く、拘束されているのでは？と思う程である・・・

川の流れる音がする・・・川原だろうか？

そこまで思い至った・・・しかし、そこで意識は急激に暗闇に沈んで行く・・・

ここは人が行き着いた先・・・遠い遠い未来の物語。

人々が行き着いたのは天国でも桃源郷でも無く。

何もない・・・荒廃した世界・・・

人々は魔力を科学的に生み出し、その魔力から魔法を生み出した・・・

より肉体的に優れた種を・・・人々はDNAを弄り・・・獣人を生み出した・・・

機械こそ至極・・・機械に知能を与え・・・それが裏目に出て・・・
キリングマシン
殺戮機械が完成した・・・

魔法によって突然変異を起こしたウィルスによって魔物が生まれ。そして魔王が現れ・・・世界は腐敗し破滅を迎える。

貴方なら・・・そんな世界で何を求めますか？

うつすらと目を開ける・・・意識がゆっくりと起動を始める・・・ここは何処だろう？

??? 「大丈夫？」

声をかけられ・・・初めて人が居るのに気がつく・・・

声を発した者は白衣を来た女性である・・・ここで意識が完全に起動した・・・

白衣の女性 「大丈夫？」

もう一度聞かれた・・・とりあえず答えようと思いい口を開くが・・・

??? 「大丈夫です・・・」

体中に違和感を感じるが、特に動かなかつたりはしないのでそう答える。

白衣の女性 「ん・・・まあ、特に怪我は無いみたいだし・・・大丈夫よね・・・これは何本？」

女性は何かの紙に色々書いてから、指を一本立てて目の前に立て質問してきた。

???

「一本・・・」

ここで二本と答えても何の特にもならなそうなので、特に捻くれもせず正直に答える。

白衣の女性 「正解・・・じゃ、これは何？」

女性は手に持ったボールペンをこちらに見せてきた。

???

「ボールペン」

これも正直に答える

白衣の女性 「じゃ、使ってみて」

女性はノック式のボールペンを差し出してきた・・・

カチャツカチャツとペン先を出し入れしてみる・・・

白衣の女性 「んゝ・・・大丈夫つと、名前は？」

ここに来て名前を聞くのか・・・普通は最初に聞くのではないのだろうか？

とりあえず自分の名前を答えることにした――

??? 「名前は・・・なま・・・」

言葉に詰まる・・・思い出せない・・・

白衣の女性 「どうしたの？まさかわからないとか」

女性は笑いながら聞いてくる。

??? 「・・・」

こちらが何も答えないと女性は笑うのをやめ、真剣にこちらを見る。
・

白衣の女性 「まさか・・・マジでわからない感じ？」

??? 「・・・はい」

返事をしながらも思考の海に潜り込んでいく・・・

自分は誰だ？

第二話 出会い

自分の名前を思い出せず・・・殆どの事は思い出すことも出来ない・・・記憶喪失・・・

だけれども、一部思い出せる部分があった・・・断片的だが・・・高い所から落ちている時の映像・・・

何故落ちていたのかはわからない。

ただ、思い出せたのは、高い所から落ちている時の浮遊感と・・・水に叩きつけられた時の衝撃・・・

それと、落ちている時にもう一人居た・・・茶髪の活発そうな印象の——少女。

その少女の名も思い出せない・・・しかし・・・なぜかその少女はとても親しい人物だと感じた・・・

何故だかはわからない・・・唯、その少女は自分が水面に叩きつけられる随分前に喪失していた・・・

記憶が断片的なので状況がまったくわからなかったが・・・

これは憶測であるが・・・

多分、自分はその少女と何かをしていた——何かをしようとしてい

たのだろう。

しかし、その途中で高い所から落ち・・・落とされた？・・・そして、

その少女は落下の途中で何かの魔法を使って助かり、

自分は魔法を使う余裕も無く水面に叩きつけられたのだろう・・・

そして、そこは自分が倒れていた河原の上流だったのであろう。

そこから流され、偶然にもあの河原にたどり着いた・・・そう考えるのが普通ではないだろうか？

河原に倒れていた自分を助けてくれたのは「魔術結社^{マジックキャバル}」と言うギルドの隊員であった。

その隊員達はその地域の魔物を討伐する為に組まれたチームであり、

河原に倒れている所を発見した時に、既に力尽きていると思ったらしい。

しかし、実際には息があったらしく、咄嗟にここにつれて来たそう
だ。

ここに来てから2日程は寝続けていたらしい・・・

ここは地下に作られた地下都市である。

出入りは基本的に転移装置か魔法か数箇所存在する出入り口で行う。

目を覚ました場所は地下都市のギルド本部の医療室・・・まあ、いわゆる病院である。

最初に出会った白衣の女性はミラーズと名乗った。

その女性は少年に対して呼び名が必用だと判断し、一時的にだが

「名無し」と言う名で呼ばれる事になった。

ミラーズ 「記憶喪失・・・強い衝撃や精神的ショックを起こした時に起きる病気の一種ね・・・

ただ・・・水面に叩きつけられた時の衝撃は相当な物だと思うのだけれど・・・

体に目立った打撲が無いのは何故かしら？」

名無しの腕や足や背をぺたぺたと触って外傷を確認するが、特に外傷らしい外傷も無い・・・

今はベッドに腰掛、ミラーズを向かい合って座っている。

ミラーズ 「うん・・・所持品からして銃使いなんだろうけど・・・この銃って物凄い旧式なのよ

ね・・・」

ベッドの横の台の上から銃を取り上げる・・・

シンプルな作りのリボルバーである。

不思議な事に普通のリボルバーなら「スイングアウト弾倉振出式」か「トップブレイク中折れ式」、

もしくは「ソリッドフレーム固定式」のどれかの方法でリロードするはずなのだが、

このリボルバーは 回転弾装部分が完全に固定されていて、リロードが出来ない。

理由は魔銃・・・簡単に言えば魔法と銃をあわせた物であるからである。

回転弾装内に魔法を使って弾丸を精製し、それを撃ち出すタイプの銃である。

ミラーズ 「それにこの銃・・・壊れて・・・とまではいかないけど、

相当酷使したのか弾装部分がボロボロね・・・使えない事も無いけど・・・

これ、貴方の物のはずよ？」

行き成りミラーズに銃を投げられたので、心の中では慌ててそれをとろうとするが・・・

・・・その銃はすんなりと名無しの手に収まった・・・

名無し 「あれ？」

その銃を持った時一瞬何かがフラッシュバックした・・・

しかし、そのフラッシュバックが何かは良くわからなかった・・・
一瞬見えた光景は・・・真っ赤な視界の中・・・燃え盛る炎の中に
背に膜の張った翼を広げた・・・

悪魔の様な・・・逆光で顔は見えなかったが、影のみでそんな感じ
に見えた・・・

ミラーズ 「大丈夫？銃を握り締めて・・・何か思い出した？」

考え込んでいる間にミラーズがこちらを覗き込んでいた・・・

名無し 「え・・・ええ、何か見えた気がしました・・・」

自分の手の中の銃を知らず知らずの内に弄んでいた・・・

ミラーズ 「それは名無しの物で正解か・・・使い込まれてる銃
ね、旧式だけど」

自分の手の中に納まっている銃はまるで自分の体の延長であるかの
ようだ・・・

くると手で弄んでいると誰かやってきた。

??? 「おう、目が覚めたか・・・で、どうだ？」

やって来たのは大剣を背中に担いだ青年と自身の身長よりも長い杖
を背に背負った少女であった・・・

名無し 「なっ!？」

現れた少女は、最後に記憶の中で見た少女にそっくりだった。

第三話 断片的

大規模都市・・・元々はそう呼ばれていた所も今ではこう呼ばれる
ラストシティー
「廃都市」と・・・

医療室にやってきた青年はクルシス、少女はスイレンと言っらしい・
・

クルシス 「状態は？起きてるって事は悪くは無いと思うが・
・」

ミラーズ 「えっと・・・まあ、アレねスイレンと同じような
感じ記憶が飛んでる」

先程メモを取っていた何かの紙を確認しつつ説明を始める。

ミラーズ 「まず身体的外傷は存在しない・・・まあ、無傷つ
て事ね

聞いた話だと高い所から川に落ちたみたいだけ
れども・・・
とりあえず、状況はスイレンと同じ感じね」

ミラーズはおでこに手を当てて空・・・まあ、天井だが・・・を見
上げてブツブツと何かを呟き始めた。

スイレン 「こんにちは・・・」

スイレンは見た感じ元気で活発そうなイメージだが、今は表情は暗

い・・・

自分と同じ記憶喪失・・・とりあえずおぼろげな記憶の中にスイセンが居た事を話すか・・・

名無し 「あの・・・」

口を開くと真っ先に反応したのはクルシスであつた。

クルシス 「どうした？何か思い出したか？」

期待の眼差しでこちらを見てくる・・・

名無し 「いえ・・・そういう訳では・・・」

期待に答えられそうに無いのでとりあえず謝罪しておく。

クルシス 「そうか・・・」

あからさまにがっかりしている・・・とりあえず、完全に期待外れという訳でもないと思う・・・

名無し 「とりあえず・・・えつと・・・スイレンさん・・・でしたっけ？・・・」

先程ほんの少し覚えている記憶で確かかどうか
わからないのですが・・・

崖・・・からかどうかは知りませんが、一緒に
落ちていた少女が居て・・・

その少女がスイセンさんに似てるんです・・・

瓜二つで・・・」

スイレ
ン 「・・・っ!!」

ガシッといきなり少女が両肩を掴んできた・・・

スイレ
ン 「私の事知ってるの!? 私は誰!？」

ガツクンガツクンと揺さ振られて、少しびっくりして途切れ途切れに言葉を紡ぐ・・・

名無し 「おぼろげ、なので、よく、わから・・・」

ミラーズ 「スイレ、落ち着きなさい」

少々強引にミラーズがスイレンを引き剥がす・・・

クルシス 「大丈夫か?・・・とりあえずその話を良く聞かせてくれ」

名無し 「えと・・・その少女と一緒に落っ下していで・・・」

でも、水面に叩きつけられた時にはその少女は居なくて・・・」

おぼろげな記憶を手繰り寄せて必死になり説明をするが、

どうしてもおぼろげで詳しくは説明できない・・・

名無し 「それで・・・」

ミラーズ 「もう良いわよ・・・とりあえずスイセンと名無しが記憶喪失前に知り合いだった

らしいってのがわかっただけで十分ね・・・

名無しとスイセンはこれから一緒に

行動しなさい、もしかしたら記憶が回復する

かもしれないからね」

スイレン 「はい・・・わかりました・・・」

名無し 「えと・・・はい・・・」

とりあえずスイセンと言う少女と行動を共にすると言うことになった・・・

ミラーズ 「じゃ、名無しの案内はスイセンとクルシスに任せるわ」

ミラーズはそういうと部屋を出て行った・・・

クルシス 「んあー・・・ああ、ここの施設について説明・・・

・の前にここがどういうところか

わかるか？記憶喪失でそういう事まで忘れて

るってのは笑えないからな」

・ クルシスは名無しとスイレンの二人に話しかけてきているらしい・・・

スイレン 「すいません・・・わかりません・・・」

名無し 「俺も・・・わかりません・・・」

記憶の中を探るが・・・記憶の中に「マジックキャバル魔術結社」と「地下都市」と言う単語は出てこなかった・・・

クルシス 「あー・・・説明・・・まあ、ここで座って話すより、実際に設備を回りながら説明

した方が効率がいいな・・・よし、名無しは歩けるな？」

名無し 「はい」

クルシス 「じゃ、しっかり着いてこいよ」

名無しはスイレンと共に「マジックキャバル魔術結社」のギルドのある、

小型地下都市——「シャドウマジックシティ影潜魔法都市」と言うらしい——を案内してもらう事になった。

第四話 小型地下都市

小型地下都市 シャドウマジックシティ 「影潜魔法都市」・・・收容可能人数は5～6万人。

生活に必要な設備が整えられている地下都市である。

現在の人口は236人・・・名無しを含めると237人だそうだ。

マジックキャバル 「魔術結社」ギルドの合計人数は132人である、

内、付近の魔物を討伐したり、廃都市の調査をしている戦闘部隊が68人、

残りの64人は都市内部に存在する大型コンピューターから

まだ何とか生きている人工衛星を使って他の都市のギルドと連携をとる為に通信を担当したり、

ギルドの物資を振り分けたり等の雑用を引き受けている援護部隊である。

都市に居る人の内、36人が獣人である。

獣人の半数はギルドの戦闘部隊に所属している。

ギルドに属さないで街で暮している人々は市民と呼ばれている。

クルシスの説明を一つ一つまとめていく・・・

都市の内部——と言っても基本的な設備のみ——を回って、説明してくれていた。

そして、現在位置は都市内部のギルド本部にあるギルド員の憩いの場のカフェである。

そこで、クルシスは基本的な都市の状態の説明をしていた・・・

クルシス 「そういえば自己紹介してねえな・・・」

俺はクルシスだ、見ての通り戦闘部隊所属の大剣使いだ」

右手を差し出されたのでとりあえずこちらの右手を差し出して、握手を交わす。

名無し 「俺は・・・」

自分も自己紹介をしようとして口を開くが・・・何も思い出せないのでどんな

自己紹介したら良いのかわからずに口を瞑ってしまう・・・スイレンも少し困っているようだ・・・

クルシス 「ああ・・・すまん、記憶喪失なんだよな・・・わりい」

つい口が滑ってしまったらしい・・・

クルシス 「ところで、名無しはこれからどうするんだ？

今の雰囲気を変えようとクルシスが話題を変えてきたのでそれに乗ることにする。

名無し 「わかりません・・・」

新しい話題に食いついたのはいいが、なんて答えていいのかかわからない。

クルシス 「あーまあ、そうだよな、記憶喪失でこれからどうするかなんてさ

まあ、スイレんみたいにギルドに入るのかもしれないぞ？」

名無し 「ギルド・・・？」

ギルドに入る・・・確かにそれはいいかも知れない・・・

記憶喪失で・・・薄っすらと残る記憶にはスイレんと良く似た少女が居て・・・

スイレんも記憶喪失で・・・ギルドに入っているらしい・・・

だったら自分もギルドに入るのが良いのではないのだろうか？

クルシス 「無理にとは言わないな、ここの都市の内部は安全だからな

でもな、お前は武器を持っていたらどう？旧式のリボルバー・・・

確か名称はF o g - 1 0 だったか？」

クルシスの言う通りで、名無しはリボルバーを持っている。

正確には自分の物かわからないが、握ってみた感じは

まるで自分の腕の延長の様な感じで、しっかりと狙って撃てば百発百中するのでは？

と言うぐらいに自然な感じな握り具合であった。

そのリボルバーをバッグから取り出す。

名無しはクルシスに渡されたこの街での衣服に着替えていて、

その時に一緒になって渡されたバッグの中に自分の所持品・・・

持っていたのは旧式魔銃F o g - 1 0 だけであるが・・・

そのリボルバーを取り出す・・・

スイレン 「その銃・・・」

と、スイレンが横から銃を取って観察し始める・・・

名無し 「えっと・・・」

その様子を眺める・・・特に乱暴に扱ったりせずに、丁寧に扱っているので問題はないと思った。

クルシス

「んゝ．．．とりあえず、射的場に行くか．．．

」

椅子から立ち上がるとクルシスが建物の奥を指差して言った。

クルシス

「あつちに射的場があるからよ、そこで銃を使

ってみろよ

使えばその．．．なんだ、記憶が戻るかも

しれないからよ」

クルシスはクルシスなりに気を利かせてくれているようだ．．．

クルシスの気遣いを無駄にする訳にはいかないし、

この銃を一度使ってみたかったので射的場に行く事にした。

スイレン

「．．．．．」

スイレンは銃を返した後も無言であった。

第五話 射撃場

Fog-10とは、安定した魔導銃のベストセラーを作り出した会社が開発した、

変り種の魔導銃である。正式名称「Fog-10 前装式回転式拳銃」

シングルアクションで形状はコルト・シングル・アクション・アーミーと良く似ている。

装弾数は六発、使用最高魔法レベル20、生産数は不明。

特徴は使用者の拳銃使用能力と魔法使用能力に大きく左右される性能である、

そのため取り扱いが難しく、価格も他の魔導銃に比べると高い。

これまで初心者が簡単に扱うことの出来る安定性と信頼性、その上安値と言う安定した魔導銃を作り出していた会社が、何故このような魔導銃を作り出したかは不明であるが、

「とある物好きの特別注文品であつたのでは？」等と噂されている。

その関係か「魔導銃取り扱いの上級者を名乗るにはこの銃を使いこなせなければいけない」

と言われていた銃である。

現在では魔銃と言うが、魔法を利用する銃の事を開発当初は魔導銃と言った。

Fog-10を携帯するためのガンベルトを装備して、そこにFog-10を収納し、

射撃場の距離15〜35mに設定された100m四方の射撃場の中心に立つ。

射的場でやった時は30発中18発命中と、全く当たらなかったが、

クルシスが「実際の戦場ならもつと良い成績が出るんじゃないか？俺も実際戦場の方が強いからな」

と言ってくれて、ここの射撃場につれてこられたのである。

ここの射撃場は、射撃者を中心にして全方向に的が現れる&

風景を立体映像として映し出して、実際の戦場の様な感じにすることが出来るのである。

その何もない100m四方の部屋の中心部の射撃者が立つ場所に名無しは立っていた・・・

クルシス 「おう、準備は良いなー、命中精度と的中精度、それと

射撃速度も測るからなー、落ち着いていけよ

I

見た感じお前ならできるからなー」

射撃場に設置されたスピーカーから響くクルシスの声・・・

クルシス 「んじゃー、アナウンスの後に開始だからー頑張れよ」

ブツンツとスピーカーの切り替わる音・・・

アナウンス 「これより立体射撃場での射撃訓練を行います。」

無機質な女性の声が響き渡る――

アナウンス 「訓練レベル1、訓練場所は森です。射撃レベルが高ければ高い程訓練レベルが

上昇します。落ち着いて射撃しましょう。開

始します」

ブウンツと辺りの何もない真っ白の部屋の風景が変わり、木々の生い茂る薄暗い森に変わった・・・

その瞬間に体がガチガチになってしまい自分の意思では動かせない・・・

これは訓練の一部であり、立体映像であり、自分は絶対に安全であると言っ事を

頭では理解していても、心が竦んでしまう・・・

ガサリツと近くの木々の揺れる音・・・心の中の自分はビクツと震え上がる・・・しかし、体は違った・・・

音のした方向が情報として頭の中に滑り込んでくる・・・

その方向を向く・・・銃をガンベルトから引き抜いて魔力を操り、弾丸を弾倉の中に精製する・・・そして、撃鉄を引き起こし、射撃体勢に入る・・・

ガサガサツ・・・バアンツ…ドサリツ・・・

何か黒い影が飛び出してきたが、それが何かを確認する前に引き金を引く・・・

しかし、頭の中にはその敵の情報がすぐさま浮かび上がっていた・・・

そして、何処が急所なのか・・・どうすれば一撃で仕留められるのか・・・

そんな情報が浮かび上がった直後に体が勝手に動いていた・・・

発砲音・・・茂みの向こうで、何かが倒れる音・・・

アナウンス 「必中しました。」

敵に命中させた場合が「命中」、急所に命中させた場合が「的中」、一撃で仕留めた場合が「必中」。

アナウンス 「訓練レベルを上昇させます、レベルは3です」

アナウンスが終る・・・と、ガサリガサリと草木が揺れる音が複数
の方向から・・・

敵の居場所がまるで手に取る様に頭の中に浮かび、対処法も浮かぶ・
・

何も慌てることも無く空いている手の親指と小指で掌を扇ぐように
コッキングし連続射撃を行う

体勢をとる・・・この動作をファニングと言う。

ガサツ・・・バアンツ・・・ドサリツ・・・ガサツ・・・バアンツ・
・ドサリツ・・・ガサツ・・・バアンツ・・・ドサリツ・・・

飛び出してきた・・・敵を瞬間で排除する。

敵の急所と敵がどの様に飛び出してくるか、何処を狙えば良いか・
・全てが頭の中に浮かび、

自分が何かを考える前に体が勝手に動いて、敵を排除していた・・・

名無し 「え・・・これが・・・俺？」

戸惑う間も無く、次のレベルの訓練が始まる。

第六話 正確無比

バンッバンッバンッ・・・

連続での発砲音・・・画面に映る名無しは戦場慣れした動きをしている・・・

まるで獲物を狙う猛禽類の様に見られただけで切断させそうな目をしている・・・

クルシス 「すげえ・・・記録更新しそうだぞ・・・」

現在の訓練レベルは最高レベルの20である・・・

訓練レベル15あれば十分な実力と言われる。自分は訓練レベル18が限界であった・・・

大剣使いと銃師では感覚が違つかもしれないが・・・

それでもこのレベルに到達して殆どの的を必中させるのは凄い・・・

ここは射撃場の制御室である。入り口以外の方向に機械がびっしりと並んでいて、

複数のディスプレイに射撃場内部での訓練の様子がリアルタイムで表示されている。

スィレンは後ろでディスプレイの一つをジッと見つめている・・・

クルシス 「そろそろ訓練終了だな・・・そろそろ魔力切れになるかもだからな」

パネルを操作して訓練終了の合図を送ろうとする・・・

アナウンス 「訓練は終了です。訓練は終了です。元のフィールドに戻します。」

射撃戦績はランクEXです。命中率100%、的中率97.38%、必中率90.27%、
平均反応速度2.8秒、最速1.11秒です。」

アナウンスが終了し、訓練が終った・・・

クルシス 「ふう・・・すげえな、ここのギルドの誰よりも強いじゃねえか・・・」

ここのギルドでの銃師の最高記録は命中率100%、的中率34.73%、必中率13.02%である。

それを圧倒的に上回る戦績である・・・

クルシス 「この戦績なら・・・」

今の戦績と立ち回りを見れば相当な実力の持ち主なのはわかった・・・

そして、これだけの實力なら、データバンクに記録が残っているかもしれない・・・

名無しは射撃場の中心部分に立ちすくしている・・・

クルシス 「ああー・・・しゃーねえ、行くか」

名無しを迎えに行く為に射撃場に向かう・・・

スイレん 「えと・・・はい」

その後をスイレんが追ってくる。

射撃場の中心で魔銃を握り締めて呆然と立ち竦む・・・

自分がこんなに強かったなんて・・・

それ以前にどの敵に対しても瞬間的な対処法が思いつき、それを実行していた・・・

一瞬何かの悪い夢か何かでは無いかと疑うが・・・

それは紛れも無く現実であり・・・右手に握った銃の重みが現実だと知らしめてきた・・・

クルシス 「おーい、大丈夫かー？」

肩を叩かれ、ビクツとした後に、ようやくすぐ近くまで

クルシスとスイレんがやってきていた事に気がついた。

クルシス 「何か思い出したか？」

こちらを氣遣う様に声をかけてくる・・・

名無し 「いえ・・・スイマセン」

思い出した事は何も無い・・・わかった事ならある・・・

多分・・・自分は戦闘を経験した事がある・・・

意識としては怯んでいても、体としては怯む所か何だが慣れ親しんだ場所に居る様であつた・・・

自分が誰なのか・・・そこがとても氣になる・・・

クルシス 「何故謝る？まあ、良いけどな、それよりお前凄いな

クに問い合わせれば
あの戦績だ、相当な実力者だぜ？データバン

お前が何処の誰だかわかるかもしれない」

名無し 「本当ですか！」

自分の事が判るかもしれない・・・それを聞いて沈んでいた気持ちが浮き上がる・・・

クルシス 「スイレンと名無しが知り合いだったなら、名無しに関して何かわかれば

スイレンに関して何かわかるかもしれないぞ。」

氣を利かしてスイレンにも声をかけるが肝心のスイレンは上の空で

ある・・・

スイレ
「・・・・・・・・」

クルシ
「スイレ？スイレ、どうした？」

スイレ
「え？ああ、何にも無いです」

一瞬だけ名無しの顔を見た後にすぐに何事も無かったかの様に振舞う・・・

クルシ
「そうか・・・無理はするなよ、じゃデータバンクを調べに行こうぜ」

名無
「はい」

スイレ
「わかったわ」

握り締めていたFog-10をガンベルトにしまおうとする・・・

手が硬直しており、引き剥がすのに少しだけ苦勞した。

そして記録を管理する為の 大型コンピューターの管理室に向かう。

第七話 記録管理室

大型コンピューターの管理室は関係者以外立ち入り禁止らしい・・・

関係者と言うのはデータの管理を受け持つ支援関係の仕事についているギルド員の中の

資格を持った者だけらしい・・・

その為、データバンクへの接続は直接は出来ず、管理者に頼んでバンクにアクセスしてもらい、

必要なデータを引き出してきて閲覧するだけらしい・・・

そして、その受付カウンターでクルシスと管理者の女性が揉めている・・・

クルシス 「この戦績だぞ！無いなんて事があるわけねえぞ！」

ドンツとカウンターを両手で叩き、相手に唾を欠きかける勢いで怒鳴りつける。

女性 「無い物は無いです。」

相手の方は全く相手にせずに落ち着いた対応をしている・・・

クルシス 「この實力だぞ？今時個人で生き残るのは不可能だ、だ

からどこかのギルドに加入してる

はずだ、だからデータバンクのどこかに残ってるはずだ！」

クルシスは引き下がるつもりは無いらしい・・・

女性 「・・・はあ・・・貴方はいつも強引ですね、そんなんじゃないモテませんよ？」

クルシス 「うぐっ・・・」

痛いところを突かれたのかクルシスは黙り込む・・・

スイレン 「すいません、本当に無いですか？本の小さな事でも良いんです、何か合ったら・・・」

スイレンが必死になって頼み込む。と、女性が少し困った顔をした後に溜息をついて口を開いた。

女性 「無い事はないのよね・・・」

クルシス 「あるじゃねえか！」

クルシスが先程のお返しとばかりに女性を丸め込もうとするが・・・

女性 「人の話は最後まで聞きなさい、だからいつまで経っても訓練所教官止まりなのよ」

クルシス 「うぐっ・・・」

また痛いところを突かれて黙り込んでしまった。

女性 「それでね、その情報っていうのが、本当にくだらない
と言つかありえない記録だから・・・
それに、そうとう
古い物なのよ」

スイレン 「その情報をください！」

スイレンはそれでも情報を欲した・・・

女性 「だったら、端末を貸してくれる？」

スイレン 「はい」

スイレンは自分のポーチの中から小型の通信端末の様な物を取り出して女性に渡した。

女性 「概要に関しては今説明するわね」

そう言う女性がその情報——記録に関して説明を始めた。

まず射撃場の名無しの得点と煮たような記録に関して、これは五十年前のこの都市に

ギルドが開設された直後辺りの記録。

得点は「命中率100%、的中率98・97%、必中率98・23%」であった。

そしてその記録を出したのが・・・リュウと言つ名の少年であつたらしい。

そのリュウに関しての個人情報記録は残っていない。

ただ、記録の中の日記の部分にその名が登場していたらしい。

・記録重要度D 記録番号D1-83

日付：失暦 二二一七年 十一月 二八日 記録者：決戦唯一の生き残り

運命を決するはずの戦闘は終つた。

俺一人を残して他のメンバーは全滅してしまった・・・

この都市は自律防衛システムによって消滅する事は無いだろう・・・

しかし・・・この世界を蝕む根源を絶つ事は出来なくなつてしまつた・・・

私の役目は仲間達が今すぐ帰つてきてても良い様にこの都市で帰りを待ち続けるだけである。

そして、リュウとルイの帰りを私は待つ必要がある。

リュウは約束をした「俺は必ず帰る」と・・・

だから、私はこの都市で仲間の——そしてリュウとルイの帰りを待つ——

これが記録の全てであるらしい・・・

この都市は五十三年前に大々的に起きた魔王と名乗る者の討伐作戦の重要拠点であつた・・・

その作戦は決行された・・・

元々、この都市の近く・・・と言っても相当遠いが、

そこに魔王を名乗る者が住まう場所があった・・・

まるでRPGゲームに登場する魔王城そのまんまの城が構えていた・・・

そこに、ここの都市に集まった精鋭達が突撃していったのである。

人数は合計で200人弱・・・武装は完璧。これで魔王を討伐できれば、

この荒廃の時代が終ると信じて突撃していった・・・

しかし、その部隊は一人を残して全滅・・・

その生き残りの一人が記した日記らしい・・・

その日記に「リュウ」と言う名無しと同じ戦績を出した少年が居たらしい・・・

しかし、五十三年も前の話なので、名無しとは無関係である・・・

しかし、とても気になった・・・そして、情報管理の女性に話を聞くと、

この日記を記した人はまだ生きていると言う・・・

毎日、今は使われていないはずの第一ゲートで、仲間の帰りを待っているらしい・・・

クルシスがその人物の所まで案内してくれるそうだ・・・

第八話 過去の記録

クルシスの案内でやってきたのはゲート管理システムが破壊され、ゲートとしては二十年前から使われては居ない第一ゲート・・・

使用されているゲートなら、レーザーウォール光線防壁でゲートを閉じているが、

今はもう使われていない為、強化合金による隔壁が降りている。

その隔壁の前の所に杖について佇む老人が居る・・・老人は隔壁を見ていた。

そんな老人にクルシスが声をかけた。

クルシス 「おう、爺さん今日は帰ってきそうか？」

老人 「ふむ・・・いつか帰ってくるわい・・・何か用か？」

老人はこちらを見ずに、隔壁を見ながら答えた・・・

クルシス 「過去の射撃場での最高記録に関して少しな・・・

」

老人 「最高記録？リュウの記録がどうした？」

どうやら老人はこちらを見る気が無いらしい・・・

クルシス 「いやぁ・・・それと同じ記録を出す奴が居るんだが・・・」

老人 「何!？」

その時になってやっと老人はクルシスたちの方を見た・・・

クルシス 「そいつが記憶喪失らしくてな、まさかとは思うが・・・

って、話聞いてるか？」

老人 「リュウ・・・ルイ・・・」

その老人はクルシスの話なんか聞いていなかった・・・

名無しとスイレンの方を見て驚いた顔をしていた。

クルシス 「んあ？」

名無し 「えっと・・・」

スイレン 「・・・・・・・・・・？」

老人 「リュウにルイじゃないか、やっと帰ってきたのか・・・」

老人は名無しとスイレンを懐かしそうに眺めながらそんな事を言っていた・・・

名無し 「俺を知ってるんですか？」

老人 「知ってるも何も一緒に魔王討伐に参加した仲じやぞ・・・」

スイレ 「魔王討伐作戦は五十三年前でしょう？」

クルシス 「その前に爺はいつこいつらと出会ったんだよ」

老人 「五十三年前、魔王討伐作戦決行の二日前じゃ」

クルシス 「・・・そのときに会ったリュウとルイって奴にこいつら二人がそっくりだと？」

老人 「そっくりも何も同一人物じゃろ？」

クルシス 「こいつらは記憶喪失なんだよ・・・と言うか、こいつらが五十三年前のリュウとルイって奴と同一人物ってのはありえねえだろ？」

スイレ 「はあ・・・」

スイレ 「んが思いつきり溜息をついた・・・」

自分と関係のない話っぱいので落胆したのである。

老人 「うむ・・・とりあえずリュウに渡したい物があるのじゃ」

老人はそう言うと言ったバッグから何かそこそこ大きい物を取り出し差し出してきた・・・

名無し 「魔導銃・・・」

クルシス 「魔銃だな・・・見た事の無い形式だが・・・どこの設計だ？」

老人が取り出したのは簡素なつくりの魔導銃であった。

片手で取り扱う風には見えない感じの銃である。

銃身が長く、遠距離からの狙撃を行うのに適している形状をしている・・・

よく見ると光学標準器スコープが付属している。

老人 「おぬし・・・リュウが戦場に忘れていった銃じゃ」

名無し 「戦場？」

老人 「魔王城じゃ」

スイレ 「そこに行けば何かわかるかも・・・」

クルシス 「んあ・・・クエストで旧魔王城の簡単な奴あったかなあ・・・無かったら探索で・・・」

老人からその魔導銃を受け取って、それを背中に背負った。

名無し 「ありがとうございます」

老人 「おれなぞいらぬわ、それよりクルシスよ、嫌な予感がするわい・・・」

行くなら注意するのじゃぞ」

クルシス

「ああ、わかったぜ、じゃあな」

老人

「ふむ・・・わしは少し寝るかのう・・・」

老人とはそこで別れた。

その後、クエストカウンターで手続きを済ませ、

クルシス、名無し、スイレン、ミラーズの4人で旧魔王城の探索に向かった。

第九話 旧魔王城

古き時代の中世の城を思わせるつくりの大きなレンガで出来た建築物・・・

今は使われる事も無く、大きな戦闘があつたのかとどこどこに色々な痕がある・・・

その城は高い山の上に建っていた・・・

城の入り口側はなだらかな斜面が続いているが、

反対側は切り立った崖であつた・・・

崖の下の方には、川が流れていた。

その旧魔王城は王座があるべき所は何か大きな爆発でもあつたのか、

崩れ去っていた・・・王座の後ろの壁は消し飛ばされていて、

その王墓のすぐ後ろのの穴からは切り立った崖が確認できた・・・

戦場であつた事を思わせるような爆発痕等が数箇所残っていたが、

五十年もの時を経て、殆どの物は腐敗なり劣化なりして確認できなかった・・・

その城の入り口の大広間を見たときに一瞬だけフラッシュバックが

見えた・・・

——燃え盛る炎の中・・・押し寄せる魔物の群れ・・・そこに切り込む肩を並べた仲間達・・・

後ろから戦車が続き・・・戦車の砲口から電撃光線スタンレイが発射され・・・

敵陣の中央部分の大多数の魔物が消し飛ぶ・・・

横に居た二十代後半の青年がこちらに何かを叫ぶ・・・

そして、自分は敵陣に出来た穴から奥に進む・・・その後を少女がついて来る——

そんなフラッシュバックだった・・・その光景の中で見覚えのある物が目の前に佇んでいた・・・

砲口を天に向け・・・地面に車体がめり込んだ戦車である・・・

旧魔王城に来るのに受けたクエストは「哨戒」であつた・・・

近頃、ここの辺りで中型～大型の魔物の目撃情報が多数寄せられた為、

旧魔王城の辺りを哨戒して、中型の魔物が居るのであれば討伐。

大型の魔物が確認されたのであれば正式な依頼として数十人でチー

ムを組んで討伐すると言う、

前調査為にやってきたのである。

クエスト人数は最高6名だった。

予定通りに名無し、スイレン、クルシス、ミラーズの4人で調査に向かった。

旧魔王城につくまでは特に魔物と出会う事も無く、問題は何も起きなかった。

旧魔王城についても特に小型の魔物とも出会う事も無かった為、

記憶の手がかりになりそうな物を手分けして探しているのである。

そこで、名無しは入り口の大地に頓挫する軽戦車を見つけたのである……

名無し 「……スタン……レイ……」

スイレン 「どうしたの？」

その戦車に手を当てて考え事をしていたら、スイレンに声をかけられた……

名無し 「いや……何か思い出せるかと思ったんだが……一瞬だけ何か見えた気がしたが……」

良くわからなかった……」

スイレ 「……そう……」

スイレンはそう言うとミラーズが居る方へと行った……

クルシス 「うむ……これは軽戦車だな……型番は知らんが……」

と、今度はクルシスが名無しの元にやってきた。

クルシス 「何か思い出せそうか？」

名無し 「ここには来た事があると思うんですが……なんだか、こう……靄がかかっている感じで……」

クルシス 「ここに来た事がある？……倒れてた河原は確か崖下の川の下流だよな？」

名無し 「そうなんですか？」

クルシス 「ああ……お前は記憶喪失だったな……確かお前が倒れてた河原の上流がここに

当たったと思ったが……何か関係あるのか？」

名無し 「さあ……わからないですね」

クルシス 「そうか……」

そう言うとクルシスは沈黙し何かを思案し始めた……

名無しは名無しで自分の考えをまとめてみる事にした……

多分だが、自分はここに来た・・・あの老人が会ったと言うのは自分だ・・・

そして、ここで大きな戦いがあつた・・・その戦いに自分と・・・スイレンも加わつたのだろう。

そして、その戦いの最中・・・自分は・・・魔法に巻き込まれ時を越えた・・・のではないだろうか？

時空転移や時間転移の魔法は未だ開発されていないのでわからないが、

何らかの転移魔法の失敗によつて自分は五十三年の時を越えたのは？というのが

現段階での名無しの考えだ。

とはいえ、転移魔法の失敗によつて時を越えると言うのは考えにくい・・・

転移魔法が失敗したのであれば、次元の裂け目の中を永遠と漂っているはずである・・・

考えて・・・考えて・・・思索を続けるが、特に思い出す事も無く・・・

奥に進んで王座についても、特に何も思い出せなかった・・・

落胆しながら王座のある大きな部屋に入る・・・

クルシス

「ん・・・何か音がしなかったか？」

クルシスが何かに気がついたように辺りを見回す・・・

第十話 接敵

クルシスの一言で皆がそれぞれの獲物を掴み警戒態勢に入る、

クルシスは大剣を、名無しはリボルバーを、スイレンは長杖を、

ミラーズは短剣をそれぞれ手に取り構える。

前衛はクルシス、ミラーズの二名、後衛が名無しとスイレンである。

クルシス 「誰か居るな」

ミラーズ 「だね、その王座の後ろ、誰？」

王座のある大きな部屋、王座の後ろの壁はごとりと消失している。

その王座の入り口から死角になっている場所から誰かが現れる・・・

??? 「あはは・・・見つかったねえ・・・流石

この時代最強の剣士さんだなあ」

現れたのは女の子であった・・・ワンピースを着たさらさらの黒髪の10歳程の女の子・・・

・ まるでかくれんぼをしていて見つかったみたいな雰囲気であるが・・・

こんな所に一人で居る女の子・・・あからさまに怪しい・・・

いくらここの辺りの魔物が討伐されて減っているとはいえ、

女の子一人で居るのは危険極まりない・・・イコールここに居るこの女の子は人間ではない・・・

魔物の中には完全に人間に擬態する物も居る・・・

大概、地下都市の外に居る武装していない人間は魔物の擬態である。

クルシス 「誰だお前・・・」

女の子 「ふう〜ん・・・偉そうな剣士さんだなあ・・・まあ、いいけどねえ・・・

貴方に用は無いのーだから黙っててくれるかなー？」

その女の子は笑みを浮かべながら話しかけてくるが、目が笑っていない・・・

質問に対して答えない・・・対外の場合は住まう都市名と自分の名所属ギルドを言うのが普通・・・らしい

だが、女の子はその質問を無視している・・・

女の子 「私はお兄ちゃんを迎えに来ただけだからねえ〜」

その女の子と眼が合う・・・

名無し 「兄・・・？誰だお前・・・」

クルシス 「お前の知り合いか？」

クルシスが名無しに聞いてくるが、生憎と記憶喪失中なので覚えて
いる訳が無い。

女の子 「あるえ？ああ〜そうか〜今回のお兄ちゃんはまだ
私の事知らないよね〜」

自己紹介から〜？面倒くさいなあ〜もう三十回
目だよー？」

一人で何かを納得したように両手を打ち合わせてから、ニコニコ笑
顔で語りかけてくる・・・

女の子 「私はあー・・・あー」

と、女の子が右手を右側に突き出す・・・その右手が肘の辺りまで
次元の裂け目に飲まれている・・・

女の子 「やつぱ自己紹介やめー、今回のお兄ちゃんが私の
言う事聞いてくれなかったら

結局消しちゃうんだしー、言う事を聞いてくれ
るお兄ちゃんに自己紹介した方が

楽だよなー？何でこんな簡単な事に気が付かっ
たんだろー？」

その女の子が右手を次元の裂け目から引き抜く——その手には機関銃が——

咄嗟にリボルバーを女の子に向け——

——ガギッ——ガンッガラランッ・・・

手に持っていたはずのリボルバーは後ろの床に落ちる・・・

女の子 「流石お兄ちゃんだなあゝ油断できないよゝ」

そう良いながら女の子はいつの間にか左手に持っていた拳銃で

名無しのリボルバーを打ち抜いたのであった・・・

女の子 「さあーて、話し合いの時間だよー？はい、武器を床に置いてねー

変な動きをしたら次は頭を消し飛ばしちゃうからねー？」

片手で扱える風には見えない重厚な機関銃を片手で操りこちらに向け・・・

まるで見た目相応の幼さを残した楽しげな声で忠告をしてきた・・・

ミラーズ 「話し合い？武器を突きつけて話し合いだなんてねえ・・・それは脅迫って言うのよ？」

ミラーズが短剣をゆっくりと地面におきながら女の子をにらみつけ

る・・・

スイレンは足元に長杖を置く・・・クルシスが大剣を床に置く・・・

女の子 「はぁーい、良い子良い子ーじゃー、お兄ちゃんは一緒に帰ってくれるー？」

次元の裂け目・・・数多くの道具等を持ち歩きたい時等に道具を保管しておくための魔法・・・

次元倉庫は人間のみが使う事が出来るようになってい魔法だ・・・
ディメンションゲート

イコール魔物ではない・・・だが、人間でもないだろう・・・じゃあ何なのだろう？

名無し 「帰る？何処に？」

この場は落ち着いて相手から情報を聞き出すのが先決だ・・・

相手を刺激しないように質問をしてみる・・・

クルシスとミラーズは名無しの意図を悟ってくれたようで、黙っている・・・

スイレ 「名無しを知っているの！ねえ、教えて、私の事は知らない？」

スイレンは焦っているのか怒鳴りつけるように相手に質問をする・・・

・

女の子

「はぁー・・・質問は受け付けないんだけどー？」

明らかに不機嫌になっている、これは不味い。

第十一話 不意打ち

貴重な情報を求めて、スイレンは相手の様子を伺う事もせずにかける。

スイレン 「お願いっ、私について知ってる事を教えて！」

向けられた銃口を意識しながらも横に居るスイレンを落ち着かせるために声をかけようとするが、

その前に女の子がスイレンの足元に向かって威嚇射撃を行っていた、

スイレン 「・・・っ!!」

女の子 「黙れって言ってるのわからないかな？次は頭いくよ？」

その不機嫌な声色から次は無いと言っるのが感じ取れる・・・

スイレンは余りの出来事に驚いて硬直してしまった。

女の子 「んー・・・帰るって言ったらお母様の所に決まってるじゃん？」

先程の不機嫌な声色が完全に消えていた・・・まるで別人である。

今のは名無しの質問への回答だろう・・・お母様？

名無し 「お母様？母さん？俺の母さん！？」

女の子 「あれ？反応がおかしいなあー……今回のお兄ちゃんは何か変だよー？」

女の子は不思議そうにこちらを見る。

女の子 「あー、記憶喪失のばたあーんかあーこのばたあーんが一番面倒くさいなあー」

名無し 「パターン？何の話だ？」

女の子は左手に持っていた拳銃を弄びながらこちらを見て溜息をついた。

女の子 「じゃー説明するねえー」

まるで昔話を語るような調子で、淡々と語っていく内容は意味のわからないものだった。

貴方は大罪を犯しました。それはとても重い罪でした。産みの親である母親を裏切る大罪でした。

お母様は大いにお怒りになりました。それと同時にお母様は大切に育てた子供に裏切られ、

心に大きな傷を負ってしまいました。そして貴方は家を飛び出していきました。

お母様は貴方がいつまで経っても戻ってこないの、心配になって
兄弟に貴方を探させました。

私は貴方を探している兄弟の内の一人です。

淡々と語る女の子は語り終えた後にこちらを見る。

女の子 「判って貰えましたか？」

その瞳はまるでガラス玉のように無機質でこちらを威圧してきてい
た。

名無し 「俺が犯した大罪とは？」

女の子 「それは、貴方が人間を愛してしまった事です。」

名無し 「人間を愛する？」

女の子 「そう、人間を愛してしまった、そして人間を庇お
うとしたのです」

名無し 「意味がわからないぞ！」

女の子の口から発せられる言葉はまるで機械から発せられる無機質
な音のようだった。

女の子 「私の説明で理解していただけないのですね？」

すると女の子の瞳の色が変わった・・・無機質なガラス玉の瞳から

女の子らしい生き生きした瞳になる

女の子 「もう今回は最初から諦めちゃおう、どうせ次の世界に行けばお兄ちゃんなんて

居る訳だしさあー、よし、そうと決まったらこのお兄ちゃんの排除かなあー」

いきなり女の子は早口でそう言うと可愛い笑顔を浮かべ——こちらを見る——

女の子 「これで何度目かな？お兄ちゃんを排除するのは」

そう言うと機関銃の引き金を引かんと——ガツキーンツ——

ミラーズ 「何か知らないけど、貴方を捕獲するわね」

女の子 「……………」

ミラーズがバックから別の短剣を取り出し、高速で投げつけ、銃口を逸らした。

その隙にクルシスが大剣を拾って女の子に接近を試みる。

名無しもその隙にリボルバーを回収、スイレンが長杖を掴み、魔法の詠唱に入る。

ミラーズは最初に床に置いた短剣を回収し投擲した短剣を回収に向かう。

その間に女の子が機関銃をクルシスに向けて発砲。

クルシスが大剣を盾のように使い機関銃の攻撃を防ぐ。

その間にリボルバーに装填されていた弾丸の種類を高速で変える。

スタンバレット
電撃弾のレベルである。相手を痺れさせる程度の威力の弾丸。殺傷能力は無い。

その弾丸に装填しなおした時にはミラーズが投擲した短剣を回収し、両手に短剣を持って

女の子に攻撃を仕掛けていた。と、視界の端っこにクルシスがいた。ドゴツと言っ音・・・

横に立っていたはずのスイレンの姿が消えていて、

女の子に切りかかっていたはずのミラーズも消えていた・・・

背後の壁に何かがぶつかる音が響いた・・・

スイレンが居た場所には詠唱中の魔方陣だけが不自然にその場に魔法の痕跡を残していた・・・

女の子 「貴方達じゃ私に勝てないよ？」

先程の反撃が一転、ましてもし追いつめられてしまった、

女の子は余裕そうな顔でこちらを見ている、

先程の一手、ミラーズの攻撃は完全に不意打ちのはずだったのに、

完璧に対処してきた。

クルシスを^{エアショット}空気砲で吹き飛ばし、ミラーズを蹴り飛ばしてスイレンにぶち当てた。

普通の人間が出来る事ではない・・・

第十二話 辛勝

奇襲を全て回避され、銃口を向けられる。

こちらが何らかの行動を起こす前に確実にその銃が火を噴いて

自分の体を粉々に消し飛ばすのが情報として具体的数値と共に頭の中に表示された。

女の子 「お兄ちゃん程の性能を持っていればわかるよね？勝てないのは」

無邪気な笑顔と人間なんぞ一瞬で肉塊に変えてしまふ凶悪な銃口を向けられ

硬直してしまう・・・クルシスもミラーズもスイレんも誰も援護に入れない・・・

頭の中にはありとあらゆるパターンの抵抗方法が示され・・・

その内の最も被害の少ない抵抗方法を体が勝手にとる・・・

瞬間で背負っていた長銃を取り、自分の足元に向ける、その行動を見逃さずに女の子は引き金を引く。

ギューイイインッ・・・まるでチェーンソーの様な銃声・・・その銃声に混じって甲高い銃声・・・

長銃から射出された弾丸は空気砲のレベル4、人間の体を簡単に吹

き飛ばす程の

魔法的風を引き起こす弾丸である。

その効果が瞬間で発動し、自分の体が風によって吹き飛ばされた・

一瞬前まで名無しが立っていた場所に数十発の弾丸がめり込む。

背後の壁に上手く両足で着地して、衝撃を完璧に消して、地面に音も無く着地する。

長銃に装填された弾丸を変化させる。

エアショット ディーブマジック
空気砲のLv4から吸魔弾に変化、

女の子が銃口を——立ち上がるうとしていたクルシスに向けた——

この動きは完璧に計算できていた、ディーブマジック吸魔弾をクルシスの前の地面に向かつて撃ち出す、魔法を無力化する防壁がクルシスを囲むように作り出される。

そこに女の子の放った弾丸が何発も当たるが、

吸魔力場によって魔力を吸収され、弾丸は虚空へと消えていく、

女の子は舌打ちをすると、今度はミラーズとスイレンの方向に銃口を向ける——

その動きも計算の中に完璧に入っている、リボルバーを引き抜いて、長銃を片手でミラーズとスイレンの居る方向に向け、リボルバーを、女の子の持つ機関銃へ向け、両方の引き金を同時に引く。

女の子 「っ!？」

長銃に装填されていたのは勿論、ディープマジック吸魔弾であり、魔弾を消滅させる。

リボルバーに装填されていたのはスタンバレット電撃弾のLv1、相手を痺れさせる程度の

効力しか持たない弾丸、その弾丸は見事に機関銃にヒット。

女の子自体を狙っていた場合、確実に回避されていたのだろう。

そこで、明らかに鋼鉄製の機関銃を狙って、感電させたのである。

女の子がビクンツと一瞬だけ体が反応した後に、その場にドサリツと倒れこむ、

その拍子に機関銃がガラランツと音を立てて転がった。

女の子 「あはは・・・今回のお兄ちゃんには負けちゃったか・・・まあ、良いけどね・・・

忘れたら駄目だよ“私達は貴方を消す”それがお母様の望みであるからね」

女の子がそう言うと、辺りの風向きが変わる。

女の子 「最後に一言。過去を変えると未来が変わる。未来を変えても過去は変わらないけどね」

最後に目を開けていられないほどの強風が吹き荒れる――

目を開けた時にはその女の子と機関銃はきえていた。

クルシス 「うう……なんだったんだ……」

クルシスが大剣を杖のように使ってこちらに歩いてくる。

スイレン 「いたたた……」

ミラーズ 「あの子は新種の魔物かしら？とりあえずギルドに報告しておかなきゃね」

スイレンとミラーズも少し遅れてやってくる。

クルシス 「人間の言葉を話せる、理解できるという辺りから最上位の魔物ではないか？

最上位ともなれば魔法や魔銃を使えてもなんら不思議は無い、

まあ、こんな所で話し合うよりは都市に戻ろうぜ。

「

ミラーズ 「賛成ね、名無しにも話を聞きたいし」

ミラーズとクルシス、スイレンの三名が名無しを見る。

名無し 「えっと？」

ミラーズ 「あれよ、あの戦闘慣れした戦い方、というか完璧に先読みしてたとは思えない

戦い方よ、アレはどう考えても一般市民じゃないって事はわかるわ、

その上、あの女の子が言うには“人間を愛した罪”とやらに關してもね

色々判らない事まみれなのよ、そこら辺に關して何か思い出した事、

どんな些細な事でも良いから都市についたら話なさい。」

名無し 「はい」

と、その時にドォーンツと何かが崩れる音。

ミラーズ 「え？」

スイレン 「あそこ、城の裏手」

スイレンが指差す先には城の裏手の崖の下に広がる広大な森があった。

そこの一角に砂煙が立ち上がっている所がある。

第十三話 単独行動

砂煙が立ち上がる場所を確認するが、やはり人間の肉眼での確認は不可能である。

クルシスが手を筒の様にして、その筒を覗き込むようにして、

砂煙が立ち上がる場所を見る。

手に魔力が宿っているので、多分遠見の魔法を使っている。

遠距離を確認するのに使われる初歩的魔法である。

クルシス 「良く見えんぞ、何か大きな魔物が居るな」

ミラーズ 「魔物？」

必死で砂煙の上がる場所を見るが、

必死に目を凝らしても、確認できるのは砂煙が上がっているだけである。

と、体が勝手に動き、魔力を目に集め始める。そして、口が勝手に言葉をつむぐ。

名無し 「スラッシュスパイダー魔物名称、切裂蜘蛛

状況、フルークフリーデ15〜16歳程の蝙蝠獣人の少年と10〜
11歳程の蝙蝠獣人の少女が

スラッシュスパイダーに襲われている。少年の武

装は短剣

少女の武装は――

クルシス 「おい、お前・・・」

と、その台詞を半ば強引にクルシスが止める・・・

その場に居る全員が名無しに注目している。

名無し 「あれ・・・？」

しかし、名無し自身も今の自分の行動にびっくりしていた。

今は、視野距離を魔力で強化して、あの戦場を確認し、

戦場の状況把握と情報伝達を高速で行ったのである・・・

名無し 「少年と少女の救出、魔物の討伐をする

脚力強化、直線距離1500メートル

到着までの時間55秒、突撃する。」

いきなりだ・・・まるで自分の体が勝手に動いている感覚・・・

足に魔力を溜める。脚力の強化が完了、リボルバーを手に持ち、

王座の後ろに空いた大穴に向かって走り出す・・・

クルシス 「おい！何してる！」

ミラーズ 「ちょっ！待ちなさい！」

スイレ
ン 「っ！」

クルシス、ミラーズ、スイレ
ンの三名は、名無しの急な行動にびっ
くりしていた、

その声を振り払うように、大穴から外に飛び出す――

――飛び出した先は足場の無い崖――

体は重力にしたがって落ちていく・・・浮遊感・・・

後ろからクルシスとミラーズが何かを叫んでいるのが聞こえたが、
体は言う事を聞かない・・・

体が勝手に動く・・・地面がどんどん近づいてくる・・・

右手に握っているリボルバーに装填された弾丸を変化・・・

瞬間で空気砲Lv4に変化・・・
エアショット

地面にぶつかる・・・いや、地面ではない、大きな川である・・・

そこにぶつかる寸前に右手に握ったリボルバーを地面に向け、発砲。

エアショットの効力で空気が破裂する・・・そこに、自分の体が
落ちる・・・

そのエア―ショットの効力で、着地の衝撃は完全に消滅する。

音もなく地面に着地し、そして瞬間で砂煙の立ち上がる森の一角へを走り出す・・・

森の中を疾走して、55秒足らずで目的地に到着。

目的地は森の一角の土煙が上がっている場所、

木々がなぎ倒され、また振動が起き、そして土煙が上がる。

その先に少年と少女の姿がある。

少女の手を掴み必死で走って逃げている。

その後を体長20メートル程の大蜘蛛が追いかけている。

大蜘蛛が一步を踏み出すたびに地面が振動し、木々がなぎ倒される。

大蜘蛛の歩みはあまり速いわけでもない、しかし人間の足で必死に走っても

一歩一歩の長さの違いによって差は広まるどころか逆に縮まってしまふ。

フルークフリーデ
蝙蝠獣人特有の翼を使って逃げれば良いものを、必死に走って逃げているせいで

もうすぐ追いつかれそうだが、手に持つリボルバーの弾薬を変化させる。

ファイアバレット
火炎弾のLv5に、威力は最高値、鉄をも溶かす灼熱の爆炎を放つ弾丸。

背負っている長銃の弾丸をフルメタルジャケット完全被覆鋼弾にする。

大蜘蛛は少年と少女に気を取られ、こちらに気がついた様子はない。

銃口を大蜘蛛の頭に向け、引き金を引く。勿論急所を狙い、

動く大蜘蛛の動きも完璧に予測した上での射撃なので外れる訳がない。

その発砲音が辺りに響き渡る前に弾丸は蜘蛛の頭に吸い込まれ、

爆炎を上げる・・・爆発の衝撃が少年と少女をこけさせる。

急いで少年と少女のもとに近付こうとする――

と、そこで頭を炎上させている大蜘蛛の背中がミシリと音を立てて裂け始めた・・・

名無し 「目標は雌個体であると判明、固体状態から子を宿した物と判明」

口から、その敵の情報を漏らしつつも、倒れて気絶している少年と少女のもとに向かう。

名無し 「大丈夫か？」

少年 「う・・・うう・・・」

少年の方はうつすらと呻き声を上げるが、どうやら立ち上がれそうにない様だ・・・

少女は少し離れた場所に倒れている。

第十四話 切裂蜘蛛ヘスラッシュスパイダー

少女の方の容態を見る為に近づく――

と、その少女がいきなり立ち上がり、こちらに突っ込んできた、

咄嗟にリボルバーを引き抜き、引き金を引く――

銃弾は少女に当たらず、少女は全体重を乗せ、名無しにタックルをしかけてきた。

名無し 「うぐっ」

少女に押し倒され、上に跨られる。

と、気がつけば少女は名無しが背負っていたはずの長銃を名無しに向けていた。

少女 「動かないで」

名無し 「まで、俺は――

咄嗟に弁解をしようと口を開くが、銃口を首に押し当てられ、黙るしかない。

少女はゆっくりと名無しに銃口を向けながら少年に近付いていく。

少女 「大丈夫ですか」

こちらを油断無く睨み付けながら、少年に声をかける。

少年 「うう・・・ああ、大丈夫だ」

少年もゆっくりと立ち上がる、この状態ではできる事はない様なので

その二人を観察してみる事にした、

少年の方はくすんだ銀髪の野性味のある感じの名無しと同年かちょっと上の少年である。

とそこで気がつく、少年の蝙蝠獣人特有の翼膜の張られた翼はボロボロになっていた。
フルークフーデ

先程の爆炎に焼かれた訳でも、先ほどの衝撃で破れた訳でもない、

どうやら、もともと使えるような状態ではないらしい。

少女の方も少年と同じくくすんだ銀髪をしているが、整っている顔立ちから

美少女と呼んでも差し支えない10〜11歳程の少女である。

少年はこちらをにらみつけ、傍らに落ちている名無しのリボルバーを見つけ、それを回収した。

少年 「何だお前、俺達に何のようだ」

少年は左手に短剣を持ち、右手でリボルバーを向けてきた。

名無し 「質問は別に良いが、出来れば銃を返してくれ」

とりあえず、刺激しない様に銃の返却を求めている。

少年 「質問に答えてくれ」

少年はこちらを睨み付けてくるが、敵意を向けられてはいないようだ。

名無し 「魔物から助けた、これでは駄目か？」

少年と少女は一瞬唖然とした表情をした後に疑うような視線をこちらに向けてきた。

少年 「本当か？」

名無し 「本当だ、それよりも早く銃を返してくれ」

流石に時間がやばくなってきたので、少年を急かす。

少年は悩んでいる様だ、時間がやばい、少々手荒な真似をしないと命に関わる。

一瞬でその場で立ち上がり、瞬間で少年に近付いて、その手から銃を奪い取る。

少年 「なっ!？」

少女 「っ!」

少年も少女も突如の出来事に反応できなかったらしい。

奪い取ったりボルバーの中の弾丸を確認する。

装填されているのは先程の火炎弾のLv5であった。
ファイアバレット

咄嗟に銃口を向け発砲する

と少女がこちらに銃口を向けなおし、引き金を引こうとする――

その銃身を掴み、銃口の先を別の方向に向ける。

名無し 「撃てっ！」

強引に銃口の向きを変えたせいで、銃を掴んでいた少女の体も強引に向きを変えられる。

バアンツと大きな銃声・・・こちらに近付いていた黒い影がビクリツと震えた後に

ゆっくりと地面に倒れる。

少女 「なっ・・・」

少年 「何・・・」

名無しの放った弾丸はちゃんと目標に命中し、爆炎を上げ、敵の大多数を吹き飛ばしていた。

そこで少年と少女は初めて自分達がどういう状況にあるのかを悟った様だ。

名無しと少年と少女の三名は自分達を中心に半径10メートル程の防壁シールドウォールと言う魔法によって守られている空間の中に居るという事。

そして、その防壁シールドウォールの向こう側には数多くの子蜘蛛が居た。

防壁に攻撃を仕掛けていた一部の子蜘蛛が爆炎に撒かれていた。

そして、先程少女が撃ったのはシールドを突破して接近していた子蜘蛛であつた。

名無し 「状況が判ったなら協力頼む、後2分しか防壁がもたない

その長銃は貸す、少しでも敵を倒してくれ」

有無を言わさぬ態度で少年と少女に指示を出す。

先程の銃の持ち方から、少年は完全な素人、少女はそこそ可使えるという程度であろつ。

二人とも、短剣を所持しているが、短剣の持ち方から、

短剣の取り扱い方は少年は魔物と戦える程度、少女は人並みというぐらいである。

ここは、少年に少女の護衛を、少女に銃による援護射撃をさせて、

自分が最前線に出て敵を引き付けつつ敵を一部排除後、

この地域から撤退し、スイレン達と合流する・・・と、計算を終了させる。

名無し 「お前は短剣でこいつの援護、お前は護衛されつつその長銃で援護射撃をしろ」

少女 「了解」

少年 「わ・・・判った」

この状況で名無しの言う事を聞く以外に良い案が思いつかないのか、

戸惑いつつも返事を返してくる。

敵の数を数えつつ、溜息一つ。

第十五話 重症、死亡

バアンツバアンツとリボルバーの銃声、その銃声のすぐ後に着弾後の火炎弾が

小規模爆発を起こす音と、蜘蛛の足を刻む短剣の音と、

パアンツパアンツと定期的に聞こえる 援護射撃の音。

敵は確実に頭数を減らしている。

蜘蛛は本能に従っているのか、少女を真っ先に狙おうとするのだが、

それを少年が短剣を使って切り刻んだりして少女を守っている。

少女は少年が討ち漏らした蜘蛛を片っ端から狙撃している。

名無しはそこから少し離れた場所で複数の蜘蛛を相手にして戦っている。

自分の足元に撃ち込む弾丸は空気砲、^{エアショット}体を吹き飛ばして敵との距離をとる、

とはいえどの方向に距離をとろうにも敵に囲まれている為、必然的に

回避先は空中となる、そこから敵に対して火炎弾を連続発射し、^{ファイアバレット}

小規模爆破、炎上を繰り返している。

重力に引かれて自らの体が地面に落ち始める。

その瞬間にリボルバーに装填された弾丸を変化させ、ファイアバレット火炎弾から

エアショット空気砲にし、着地の準備をす――

名無し 「あれ？」

とそこで不意に違和感を覚える、というより今までの一連の動作に違和感を覚えた。

自分はチームから無断で離れ、少年と少女を助けようとしている、

チームメンバーと一緒に行ったら間に合わなかったかもしれないが、

自分一人で飛び出してきた時は緊張していたはずだ、

それなのに今の自分は的確に戦場の状況を把握して、

少年と少女の戦闘能力を測って的確な指示を出して、

自分自身は敵に臆する事もなく平然と戦っている今の現状に違和感を覚えたのだ。

流石にこれはおかしい・・・と、少しだ――

――少しだけ戦闘に対しての集中が解けた――

パンツ・・・ブスリッ・・・

少女 「うぐうつ・・・」

少年 「スマレ！」

と少女の苦しげな声と少年の焦った声が聞こえた・・・

咄嗟に少年と少女の居る場所を確認すると、少女が蜘蛛によって攻撃されていた。

少女の腹の辺り・・・そこに蜘蛛の鋭く尖った鎌のような前足が突き刺さり貫通していた・・・

突き刺している側の蜘蛛は既に力尽きていたのかゆっくりと音を立って倒れる、

その時に少女に突き刺さっていた前足がズブリッと音を立てぬけた。

少女は左腕で穴の開いた腹の辺りを押さえ、右手で硝煙の立ち上がる長銃を握っていた。

少女 「ごふっ・・・けはあっ・・・」

体をくの字に折り曲げ、口から血と胃液と何かの混じったものを吐き、

そのまま地面に倒れた・・・最後まで銃を握り締めていて、その銃

で近付こうとしている

蜘蛛に狙いをつけようとしていた・・・

少年が必死になって少女の元に近付こうとするが、他の蜘蛛がそれを妨害している。

名無し 「しまっ!？」

咄嗟にエアースhotsの着弾地点を少しずらし、自分の体が真上ではなく、

少年と少女の居る方面に吹き飛ぶように計算して射撃。

予測通り自らの体は少し離れていた少女の付近に吹き飛ばされる。

リボルバーの中の弾丸を変化させ、ファイアバレット火炎弾にして、

周りから少女を狙い近付こうとしていた蜘蛛を片っ端から焼き払う。

それをしつつ、傍らに倒れている少女の状態を確認する・・・

状態は簡単に言つと間に合わない・・・

専門的な道具や治癒能力に特化した医者などが居れば余裕なレベルだが

生憎と名無しは治癒能力に特化した医者ではないらしい・・・

頭の中に浮かぶのは簡易な応急処置ばかり・・・

それに医者であつたとしても今この場で出来る訳がない。あたりにはまだ相当数の敵が居る。

敵を全て撃破する前に、この少女は力尽きるか間に合わない状態になるだろう・・・

辺りの敵を倒しながらそんな事を考える・・・助けるつもりが・・・助けられなくなってしまった・・・

そんな風にまた考え事をしてしまった瞬間に、

ジャアキンツと、背筋を凍らせるような、鳥肌が立つ様な不快音が響く、

音の方向を咄嗟に向く。

そこには少年がこちらに背を向けて立っていた。

少年の前には血塗れの大鎌を振り切った体勢で力尽きている蜘蛛が居た。

大型犬程の大きさの蜘蛛が倒れる。そして、その少年の頭が――

――ズルリツと音を立ててズレていく――

名無し 「っ!？」

ボトリツと少年の頭が地面に落ちて転がり、その目がこちらを見た。

その瞳は何も映していなかった・・・

そして一瞬遅れて少年の残った体から血が一瞬だけ噴水の様に吹き上がった。

だが、その勢いも一瞬で消え、体が倒れる。

その間に、他の蜘蛛はこちらに対して攻撃してこなかった。

死した少年の体を食ろうとすべての蜘蛛がその骸へと群がっていく・・・

第十六話 本気、合流

骸に群がる蜘蛛を一瞬だけ呆然と眺めたが、すぐにリボルバーを握り締め、

骸に有りつけず、こちらを狙おうとしていた蜘蛛を撃つ・・・

ブシュッと蜘蛛の頭に穴が空き、一瞬だけ内側からボグッと膨張し、

次の瞬間には中身を撒き散らして破裂する。

リボルバーでは連射性能が無い為此のままいくと手数が足りない。

敵を捌き切れない、だからといって抵抗をやめれば一瞬で刻まれてしまうだろう。

グチャッバギツと言う肉と骨を引き裂く音を出来る限り無視して、少女を庇う様に立ち回る。

あれから何時間経っただろうか？

もう2時間近く戦い続けている気がする、実際はほんの数分の出来事だと思う。

辺りは蜘蛛の肉片のこびりつく甲殻と蜘蛛の手足、その他色々な物が散らばっている。

悪臭が酷い、これが切裂蜘蛛ではなく

ボインズンスパイダー
猛毒蜘蛛だったら、切り刻んだ蜘蛛の死骸から放たれる、

猛毒を含んだ体液にも注意しないといけないが、今は関係無い。

飛び散った肉片や蜘蛛の体液で足元がドロドロになって体勢が

いつ体勢を崩してもおかしくない状態である。

蜘蛛は一気に数百から数千の子を産む。

目算で大体200匹は息の根を止めたが、辺りを埋め尽くすような数の蜘蛛は一向に減らない、

しかし、名無しの体力と魔力は見るからに減っていつている。

このままでは体力が尽きて行動不能になるか、魔力が尽きて攻撃不能になるかのどちらかである。

と、ここでスイレンの声が聞こえた、幻聴かとも思った。

スイレン サウザンドナイフ
「千本短剣」

ヒュンッヒュンッヒュンッ・・・ブスッブスッブスッと何かが飛翔する音と突き刺さる音が、

蜘蛛の波の向こう側から聞こえ始める。そこにクルシスの声も聞こえた。

クルシス 「スラッシュウインド
切裂風」

ズババババーと名無しの丁度背を向けている方向に居た蜘蛛が、魔法によって引き起こされたカマイタチで切り刻まれる。

クルシスは自分に切裂風を纏わせて突撃している。
スラッシュウインド

蜘蛛の波が途切れた事によって向こう側が確認できた。

スイレンは長杖を地面に突き立てて魔方陣に囲まれて何かを呟いている。

周りには数百の在り来たりな短剣が高速で回転しながら漂っている。

時々、そのナイフが近付いてきた蜘蛛に高速で飛び、突き刺さる。

ミラーズ 「ああもう、勝手に単独突入は禁止っ！って、その子怪我してるじゃない」

気が付けばミラーズが名無しの背後に立っていた。

少し名無しに注意した後ミラーズはすぐに倒れている少女の治療にあたる。

クルシス 「あらかた片付けたぞー・・・疲れるなあ・・・」

片手で大剣を持ち、周辺を警戒しながらクルシスが近付いてくる。

スイレ
ン 「はう・・・」

スイレ
ン が周りに短剣を浮遊させたまま近付いてきた。

ミラーズ 「治癒は完了・・・じきに目を覚ますわ」

ミラーズ が少女の治癒を終えて立ち上がる。

クルシ
ス 「さて・・・面倒事に巻き込まれた訳だが・・・

報告にあつた巨大な魔物つてのはあのスラッ

シ ユスパイダーの母体

じゃないか？一応見つけたら報告するってなっ

ちやいるが・・・」

クルシ
ス が遠くの方にあるスラッ シュスパイダーの母体の亡骸を見ながら言う。

ミラーズ 「倒しちゃってあるわね・・・報酬出るのかしら？」

ミラーズ もその亡骸を眺めて溜息をついた。

ミラーズ 「とりあえずもう戻りましょう。スイレ
ン は大丈夫？」

スイレ
ン 「ふあい・・・」

とてもふらふらしていて大丈夫そうには見えない・・・と浮遊して
いる短剣が、

いきなり地面に落ちる・・・が、その短剣は地面に着く前に消滅した。

クルシス 「とりあえず名無し、良くやった。」

いきなり頭を撫でられる・・・

名無し 「え？」

注意を受ける事ならした覚えがあるが、褒められる様な覚えは無い・・・

ミラーズ 「まあ、貴方がいち早くここに辿り着いたから少女は助けられた訳だけだね・・・

少年の方は・・・まあ・・・」

最後の方の言葉を濁した後に、少女を見る。

ミラーズ 「とりあえずこの子は保護しましょ、長銃を回収しなさいよ」

と、ここでミラーズに言われるまで少女が握り締めている長銃が自分の物だと

言っつのをすっかり忘れていた・・・

ミラーズ 「さて・・・気を取り直して戻りましょう」

ちなみに、名無しが廃墟から突っ走ったあの森にはゲート転移装置が設置
されていて、

ゲート転移装置を使えばすぐに街と行き来できたのである。

第十七話 帰還、魔物化の情報

転移装置を使い、^{ゲート}転移装置管理施設に飛び、

そこから蝙蝠獣人の少女を医療施設に運んだ後に、

報告書類を纏めてクエストカウンターまで向かった、

その時に名無しの単独行動に関してと、

その時の状況と結果を記載した書類を提出後に、

無許可の単独行動に対する嚴重注意を受けた後に、

やっとの事で開放されたのであった。

現在は嚴重注意の際に指摘された物資の補給である。

クエスト出発前に準備しておくのだが、ミラーズがまとめて用意したので、

名無しやスイレン、クルシスは所持していなかったのだ、

そこの辺りもついでに注意されたのである。

名無し 「疲れた」

バックの中にリボルバーと護身用に手渡された魔力弾を使用しない

通常種の拳銃を入れ、

ついでに発信機と予備の通信機、携帯食料、応急処置キット等を詰め込みながら、溜息をついた。

ミラーズ 「貴方のせいでしょうが」

ミラーズは手元にある携帯食料レーションの使用期限を確認している。

クルシス 「報告は終わったし、保護した女の子の様子でも見に行くか？」

クルシスは既に準備を終えていて、大剣に砥石をかけている。

スイレン 「あの子は大丈夫でしょうか？」

スイレンは一番最初に準備が終っていて、手持ちの杖で地面を突いたりしていた。

ミラーズ 「大丈夫よ、傷に関してはちゃんと治癒はしたから」

クルシス 「こう見えてもこいつは医療技術は高いんだぞ」

ミラーズ 「こう見えてもは余計よ」

スイレン 「様子を見に行くんですか？」

ミラーズ 「準備が終ったらね」

手元においてあった予備弾倉を掴み、中に弾薬が詰まっているのを確認して、

バックの中の取り出しやすい位置に入れる。

それと、渡された弾倉を入れる為の飛び出し防止の止め金具付きのポケットのついた

ジャケットのポケット部分に弾倉を数分入れて、止め金具をしつかりとつけて確認する。

ついでに通信機を入れる部分に通信機を入れて、長銃用の光学標準^{スコープ}器を取り付けて、

暗視ゴーグルと赤外線ゴーグルを確認してバックに入れて―完了。

バックの重量が40kg前後、ジャケットだけで重さが10kg程という重装備の完成である。

ここに、行く場所によっては酸素マスクや簡易テント等の機材も必要になるらしい。

とりあえず用意した物資に関しては自分の自室に置いておく。

用意された部屋は、そんなに広くは無く、クルシスとの相部屋であった。

以外にもクルシスは整理整頓ができていて、部屋はそんなに汚れていなかった。

準備が終ったので医療施設に向かった・・・

医療施設は住居区画から結構な距離がある。

と言っても都市自体がそんなに大きくないので、

離れている＝1駅分あるか無いか程である。

都市内は常に一定温度に保たれていて、酸素濃度も常に一定、

唯一足りない物は天然の太陽光のみである。

それ以外は完璧に整備された人間にとっての楽園のはずであったのだ。

地下都市というのは元々、地上での生活がだんだんとしにくくなってしまったので、

仕方が無く地下に生活に必要な環境を整えた空間を作成し、

そこに移住する計画が立てられたらしいのだが、

その計画は地下都市が各国に建設されて、いざ地下空間での生活を
くと言う段階になって

問題点が発覚した為、中止となったのである。、

都市一つあれば中で数千年は人類は生きる事ができると言われている。

だが一つの都市に居住可能な人数が人口よりも余りにも少なかったため、

その問題点に関してをどうにかするまでは地下都市は使用禁止になっていたのだが、

その矢先に魔物発生の事件が起きたのである。

魔物化は海から始まったと言われている。

海中に居る生物の殆どが肉食になったり、異常な巨大成長や突然変異等が起きた。

次に鳥、昆虫が変異を初め、動物の変異が始まる頃には、

人間にも変異の兆候が見られ始めた。

多量の変異化物質（当時の呼び名）を摂取すると、

異常が起こり始める。

第一段階が精神汚染、ここまで進化した人の事を「狂人」マッドマンと言い、

第二段階では精神不安に駆られ、疑心暗鬼に陥り、

辺りの者を形振り構わず危害を加えると言う異常行動が見られるようになる。

第二段階が肉体汚染、ここまで汚染された人の事を「死体人^{ゾンビ}」と言う。

第二段階では肉体的変化と知能低下が訪れる。

例えば腕部の肥大化、脳内組織の死滅、筋肉組織の異常発達、内臓器官の退化等が上げられる。

第二段階まで進行した時点で、元々の生物は、生物学的に「死」と断定される。

第三段階が完全汚染、完全な魔物化した個体として識別される。

第三段階では完全な肉体的な変化と、知能の完全な消滅が起きる。

肉体的には二足歩行ではなく四足歩行になり、皮膚組織の硬質化、視野感覚の退化

聴覚・嗅覚の異常発達等が上げられる。

第一段階までなら薬品等の投与により治癒が可能であるが

第二段階以上まで進行してしまった場合は、治癒は不可能である。

ちなみに、死体人^{ゾンビ}は、人間を襲い喰らう事がある。

襲われた人間が死亡した場合、死体人^{ゾンビ}の仲間になるが、

生き残った場合は、狂人になる。
マッドヒューマン

その為、ゾンビに襲われても生き残って直にワクチンを投与すれば平気なのだが、

稀に突然変異を起こして一気に魔物に進化する場合がある。

その場合、突然変異型魔物として、自我を保持した状態で魔物化する可能性があるが、

極稀なケースの為、基本的にこの事はあまり知られていない。

第十八話 記録処理

自動的な肉体状態の検査と保管記録の整理を行います・・・

・第一注目事項 現在の肉体情報に関して
体温、血圧に異常は認められず。

肋骨の耐久度の減少を確認、

治癒完了までにかかる予測期間は

平常生活を継続した場合

時間表記にて48時間28分28秒後に完了

日付表記にて3日後の午後6時13分4秒に完了

睡眠や肉体組織の一時的停止による早急な治癒の場合

時間表記にて0時間0分23秒後に完了

日付表記にて同日の午後5時44分36秒に完了

体内に侵入した病原体による損傷、及びに体内組織の異常は発見できず。

侵入した病原体により発生した体内異常は無し。

筋肉組織に体積した疲労度合い

脚力組織：約38%

腹部組織：約27%

腕力組織：約43%

その他組織：約52%

全体組織疲労率：約45%

早急に疲労の除去に当たる必要性有り

以後脳内組織に関して

一部脳内組織の破損を確認

記憶の保有メモリー部分に通ずる回線の破損により

過去のデータの参照に問題が発生している模様

現在記憶中の脳内のデータ処理に関してのデータライブラリを

閲覧する為の回線に異常が発生している為、

データライブラリの参照及び保管に関する情報の提示が不可能とな
っている。

前回記憶からの情報を参照として必要事項の記載は自動筆記にて行
われております。

・第二注意事項 データ保管用メモリの破損について

破損箇所は過去の記憶保管用メモリ全てに通ずる回線の破損

修復：可能 完了までの時間：1800時間と推定 早急な修復
が必要と判断

データライブラリ参照の為の回路の破損について

修復：不可能 不可能な場合のマニュアルを参考に行動を指示

・第一記載事項 人物

第一人物 スイレン（仮名） 性別：女 身長：158・2cm

体重：48・3kg 戦闘力：A

記載事項：空間に対する固体情報および時間概念のズレを確認 今
後も注意する必要有り

第二人物 クルシス（仮名） 性別：男 身長：174・3cm

体重：62・8kg 戦闘力：S

記載事項：近距離戦闘時に協力的な火力を誇る、敵対した場合は超接近戦に持ち込む事により対処可

第三人物 ミラーズ（仮名） 性別：女 身長：163.2cm
体重：53.2kg 戦闘力：S

記載事項：治療術に長けている、敵対した場合は最優先で排除しなければならぬ

第三人物 老人（名称不明） 性別：男 身長：163.4cm
体重：53.2kg 戦闘力：？

記載事項：主な情報は不明 情報の所持者であるが不鮮明な情報である

第四人物 女の子（名称不明） 性別：女 身長：124.3cm
体重：33.8kg 戦闘力：SS

記載事項：妹を名乗る女の子、普通の人間ではない。 固体情報にズレを確認

第五人物 少年（名称不明） 性別：男 身長：152.8cm
体重：52.3kg 戦闘力：B

記載事項：既に生命活動の停止を確認

第六人物 スミレ（仮名） 性別：女 身長：118.5cm 体重：34.2kg 戦闘力：A

記載事項：蝙蝠獣人の少女 推定年齢10歳前後

その他記載不要候補者 23名
記載身長および体重は視野確認による推定数値 誤差±3.5

・第二記載事項 視野感覚デバイスに起きた異常に関してフラッシュバック
再燃現象等の異常を確認

原因は記憶保管用メモリに通ずる回線の破損が原因と見られる。

一部データを送信時に回線の破損箇所を通過する際にデータが破損し、映し出される映像や音声がボケていたりずれていたりする場合が確認されている。

・第三記載事項 記憶データのバックアップデータに関して

今日までの記録のバックアップデータの保存の際に

記憶データおよびにデータライブラリ参照の回線の破損によって、思考、感情に関するプログラムデータは前回のバックアップデータとの

差異が大多数検知されたため、バックアップデータ保管マニュアルを

参考に別のフォルダ及びにメモリーに保管。

過去のバックアップデータ呼び出しの際に思考、感情のプログラムデータが

多重する事になるため重大なバグや不具合が発生するものと思われる。

上記記載事項から過去の思考、感情に関するプログラムデータをバックアップデータからサルベージ及びに現在プログラムに上書きする場合は厳重な忠告の表記を致します。

・その他記載事項

38%以上の肉体組織（脳を除く）を損失した場合

現在状態表記を行動不能

緊急治癒状態の発動

以上の情報の以下の情報に書き換えます

25%以上の肉体組織（脳を除く）を損失した場合

現在状態表記を戦闘不能

緊急治癒状態の停止

記録の整理と設定の変更が完了致しました。

第十九話 蝙蝠獣人へフルークフリーデ

医療施設—と言うか医療施設の集まった医療区画に到着はしたのだが、道中の記憶が曖昧なのだ。

クルシスとミラーズの後を、スイレンと並んで歩いていて、

二、三言スイレンと言葉を交わしたはずなのだが、

その内容が全く思い出せないし、なんて返答したかも思い出せないのである。

そして、なぜかスイレンは少し俯き気味で、落ち込んでいる。

準備をしていた住居区画から出発した時は、普通だったので、

落ち込んでいる原因は明らかに道中の自分との会話の筈なのだが、

なぜか会話の内容をまったく思い出せないのである。

そんな事をグダグダと考えながらクルシスとミラーズの後を着いて行く。

カウンターで保護した少女が与えられた病室の場所を教えてもらい、そこに向かう。

医療施設と言うだけあって、中は清潔に保たれていて、

真つ白で薬品の匂いが漂っている——そんな場所の一室の扉の前・

クルシスがネームプレートの部分を確認して扉の前に立ち、扉をノックする。

???

「はい？」

中から少女の返答——名は確かスミレ——である。

クルシス

「入るぞ」

???

「どうぞ」

中から聞こえてくる少女の声は何故か淡々としている。 扉を開けて中に入る。

何処の病室も作りは同じなので、

名無しがこの都市で目覚めて最初に見た病室とまったく同じ内装であつた。

少女は部屋におかれたベッドの上で体を起こしてこちらを見ていた。

???

「貴方は誰？」

淡々とした言葉で、クルシスを指差して聞いてくる。

クルシス

「おう・・・？俺はクルシスだ・・・が？」

戸惑い気味にクルシスが返答する。

???

「貴方は？」

今度はミラーズを指差して質問してきた。

ミラーズ

「私はミラーズよ」

慌ても戸惑いもせずにミラーズが返答する。

???

「貴方は？」

今度はスイレンを指差して質問してきた、人を指差すのは癖の様な物なのだろうか？

スイレン

「えとっ・・・スイレンです」

クルシスと同様に戸惑い気味にスイレンが返答をする。

???

「貴方は・・・助けてくれた、恩人、名前は知らない」

最後に名無しを指差して——その時になって気がついた——少女の瞳は機能していない。

名無し

「えと・・・名無しだ、それよりも・・・眼は——

スマレ

「私はスマレ、今は視力が無い」

こちらの言葉を遮って少女が自己紹介をした・・・ スミレの台詞に違和感を感じた・・・

今は視力が無い...と言う事は過去には視力があつたのだろう・・・

視力を失ったのは切裂蜘蛛との
スラッシュスバイダー

戦闘時であろう...確か、顔に対しては攻撃を喰らっていない筈であるが・・・

普通の人間なら一番の情報源の視力を失ったら慌てるなりなんなりするはずである。

それなのに慌てていない・・・それに見えていない筈なのにこちらの人数と立ち位置を把握している・・・

ミラーズ 「視力が無いってどういうこと？」

スミレ 「それよりも、シーライは命を落としましたか？」

スミレは質問に答えずに逆に質問をしてきた。

クルシス 「シーライ？」

名無し 「一緒に居た奴か？」

スミレ 「はい、私と一緒に居た男です、十中八九命を落としてますよね？」

あの戦闘の時に守りきれなかった少年の名が出されて、名無しは少し俯いてしまう。

名無し 「すまん……」

スマレ 「何故謝罪するのですか？貴方は命の恩人なのですよ？」

スマレは不思議そうにこちらを向いて首を傾げている。

名無し 「いや、守りきれなくて」

スマレ 「別に良いのです、あの人はあの時命を落とさなくてもいずれは命を落としたので」

クルシス 「どういうことだ？」

スマレ 「あの人は私と契約を結んでいたのです」
「「コンタクト

ミラーズ 「契約？とりあえず、視力が無いって言うのも含めて説明してくれない？」

スマレ 「良いですよ、少し長くなりますが」

そう言うときスマレは自分の種族と特性に関してと、

あの少年との関係に関してを話し始めた。

第一に少女に関して

フルークフーデ
蝙蝠獣人であり、年齢は普通の人間に換算すると11歳らしい。

フルークフーデ
蝙蝠獣人の特徴は背に生えた皮膜の張った蝙蝠のような翼と、

特殊な器官を使用した音波による位置や空間情報の把握である。

視力が無いというのは少女自身の生まれつきの病気で、フルークフーデ
蝙蝠獣人と
は無関係らしい、

病室に入ってきた人の人数を把握できた理由と、大体の位置を把握
できた理由はそれらしい。

少女は蝙蝠獣人の中では相当な地位を築いている血筋の物らしい事、

少年は少女の付き人である事、そして契約を結んでいた相手らしい。
コタクト

第二十話 吸血鬼ヘヴァンパイア

フルークフーデ
蝙蝠獣人の中でも、スミレは地位の高い位置を陣取っている血筋の娘らしい、

シーライという少年はスミレにつけられた世話人及びに護衛だったらしい、

そして、スミレはいわゆる遺伝的な病気によって視力が無いのである。

しかし、蝙蝠獣人の中でも、地位が高い血筋なのに、欠点もしくは欠陥がある事に

対して、スミレの叔父が大いに嘆き、数多くの方法を試して、欠点を補おうとした結果が

コシタクト
“契約” と言うものが完成した。

コシタクト
“契約” とは、ロード契約者に対して、スレイヴ契約側が生命力を削って

ロード契約者に対して特定の効力を発揮する魔法を常に使い続けている状態の事である。

今回の場合のロード契約者はスミレ、スレイヴ契約側がシーライにあたる。

契約の効力はスミレの視力の回復だという。

スレイヴ契約側である、シーライが命を落としたため、コシタクト契約が強制解除され、

スマレの一時的な視力回復の契約コソタクトが解け、視力を失ったという訳らしい。

この契約は契約側コソタクトの寿命を物凄い勢いで削っていく、

そのため、スマレが言っていた「あの時命を落とさなくても」というのは、

シーライに残された生命力が残り少なく、もうすぐ事尽きるという事だったらしい。

スマレ 「他に説明は必要かしら？」

見えていない筈の眼でこちらの眼を射抜きながら、淡々と語っている少女は

まるで機械人形オートマタ、そんなイメージを受けた。

クルシス 「あん？何でそんな地位の高い血筋のお嬢様なんだろう？何であんな所に居たんだ？」

ミラーズ 「確かに、護衛がその契約者スレイヴの少年一人つてのは可笑しいわよね？」

クルシスとミラーズの言う通りで、それだけの地位を持っている血筋の娘ならば、

あんな危険な場所に居るのは可笑しいはずである。

スマレ 「単純に逃げ出してきただけ」

またしても単調で、まるで原稿用紙に書かれた事をそのまま言っている様な感じの言い方。

スイレ 「逃げ出してきた？」

スマレ 「そう、逃げ出してきた。」

今度はスマレがスイレの方を向く、その際に首だけを動かしてスイレの方を向いた、

そして淡々と口が語りだす、本当に機械人形オートマタにしか見えないのだが、

簡単な治療をミラーズが行っているし、ここに来てからもちよつとした検査を行ったので、

機械人形オートマタではないのは確かなのだが、やはり印象は機械人形オートマタっぽい印象を受ける。

スマレ 「今の血筋を残す為にと、やりたくない事を強制されたので逃げ出してきた」

スマレの淡々とした説明を纏めると スマレは叔父上の強制的な命令に嫌気が差し、

世話人兼護衛をかねていた契約側スレイヴの少年のシーライを引き連れて、

フルークフーデ
蝙蝠獣人達が暮らす小型都市から逃げ出してきたらしい。

都市の外は危険なのは理解していたが、あの都市に居る方が危険だと判断したらしい。

都市名は「ブラッド」と言う名称の、小規模地下都市らしい。

その都市の位置はこの都市から徒歩で半日、車両を使って2時間程の場所らしいのだが、

スミレの言う地域座標には何も無い、

外部との連絡手段の無線システムが機能していないのか、機能させていないのかのどちらかである。

スミレの説明だと、その都市の蝙蝠獣人フルークフーデの大半はあまり友好的ではないらしい。

基本的に好戦的でもないが、排他的であり同種族間での仲間意識が強い、

そのため、外部の人間等を歓迎したりはしない、むしろ追い返されるのが関の山だろうと言っていた。

そして、スミレは今後の行く当てが全くないので当分の間はこの都市に住むという事になった、

視力が無いとは言え、人間には無い超音波を発し、感じ取る器官があるので、

視力が無くても日常生活に支障はないので、今の所“コンタクト契約”に関しては

スレイヴ契約側の人間を探す気は無いらしい。

スレイヴ契約側になる為の条件と言うのは特にある訳ではなく、

ロード契約者がスレイヴ契約側に誓いをさせればいいのである。

誓いと言うのはスレイヴ契約側の体液をロード契約者が飲んで、

その後、ロード契約者の体液をスレイヴ契約側に飲ませれば完了と言う事らしい。

体液と言うのは基本的に血液で行う。

そのため、フルークフリーデスミレの血筋の人間はヴァンパイア蝙蝠獣人の中でも ヴァンパイア吸血鬼と呼ばれていたらしい。

だが、基本的に伝承に出てくるヴァンパイア吸血鬼と違って、犬歯が尖っているわけでも、

太陽の光、クロス十字架、水が苦手な訳ではないし、杭で心臓を貫かなければ死なない訳でもない。

生命力自体は通常の人間と変わりはない。

ただ、ニンニクだけはスミレ自身が苦手らしい。

第二十話 吸血鬼ヘヴァンパイア（後書き）

作者様がログインしました。

名無し様がログインしました。

名 「……よし、弁解を聞いてやらん事も無いぞ？」

作 「やほー、始めましてー」

名 「無視か？そんなに脳漿撒き散らしたいのか？期待に答えんぞ」

作 「まずは弁解だ、ちょっとまって名無しくん、そのおっそろしい銃口を

今すぐ下ろして貰えないだろうか？」

名 「さっさとええ」

作 「もうっ、人使いが荒いんだ…ごめんなさい冗談です。

えとー気がついた人は多いと思うけれど、3週間ぐらいぶりに更新です

更新が大幅に遅れた理由は聞かないでお願いします。

単純に忘れてただけですので…」

名 「ほお？忘れてたと？んで？もう一つ、後書きが二十話に来て初とか

どういう事よ？ええ？」

作 「いやぁ…後書き何を書けば良いのかわかんなくてさデヘッ」

名 「他の作者のを参考にして書けよ…何してんだよ」

作 「…他の作者の作品を参考にする為に読み漁ってた？」

名 「それってミイラ取りがミイラになる…じゃねえか？」

作 「違うんじゃない？」

名 「……まあいいか、んで？主人公の紹介は？」

作 「しねえよ？」

名 「は？」

作 「いやだって面倒だし面倒くさいしめんどえし」

名 「ああ…ああー…こんな作者で悪いな、うん、ほんとごめんな」

作 「誰に謝ってんの？」

名 「読者の皆様だよっ！！何考えてんの！あんたの作品だろっ！」

作 「え？こんな物見てくれる人居んの？その人頭大丈夫なんだろうか」

名 「お前え…少なくとも作者のが駄目だ」

作 「褒めても能力アップしないぞ？」

名 「褒めてねえよっ！お前マジで大丈夫なのかつ！」

作 「褒めて無いのか…まあ、ここいらで終わりにしね？」

名 「おい、読者の皆様に言う事あんだろっ！

更新遅れてスイマセンとか後書き二十話に来てスイマセンとか」

作 「え？面倒くさい、んじゃ、俺さナナドラ2020やんないのだし

もっいくねー」

名 「おおいつ！お前っ！ふざけんなよ！」

作者様がログアウトしました。

名 「……ああ、えと、色々遅れて申し訳御座いませんでした

いや、本当に読んでくれる人居ないと思うけど、

あんなんでも頑張って更新する…させるんで、

生暖かい目で射殺して…見ていてあげてください。

とりあえず、今回の後書きはこれ…後書き？最初がログインて…

作者え…ゲームのやりすぎだろ…

とりあえず、読んでくださってる皆様ありがとです…」

名無し様がログアウトしました。

第二十一話 忠実〈Faithful〉

スミレに一通りの都市の規律と概要を説明した後に、スミレが「眠い」と一言発した為、

スミレの病室を後にした。

その後は、居住区画にある与えられたクルシスとの二人部屋に戻って来たのだが、

クルシスが真つ先にベッドにダイブしていびきを掻き始めていた。

名無しはとりあえずシャワーを浴びて、

用意されていた簡素なパジャマを着て、机の上に銃を並べていた。

目の前の机の上に並べられたFog-10と老人に渡された長銃を眺めている。

眺めていると、少しだけ違和感を感じた。

Fog-10のトリガーガードが長銃の方と比べると分厚く、何かを固定する為の金具が取り付けられている。

バレルの下の部分にも同じ様な金具が取り付けられている。

Fog-10を手にとって、自分のベッドに置かれている枕に向かって構えてみるが、

その金具にどんなパーツを取り付けるのかは想像できない…

クルシス 「何してんだ？」

名無し 「うおっ!？」

先ほどまで寝息を立てていたはずのクルシスがいつの間にか名無しの背後に接近していた…

クルシス 「ん? 所謂いえばその銃・・・銃剣装着可能じゃないか？」

名無し 「銃剣？」

銃剣とは、銃口下部に取り付けるナイフの事を指す。

基本的に白兵戦の時に使われる刺突用の刃物である。 今回の場合の銃剣は、回転式拳銃の銃剣は、

銃の下部、トリガーガードからバレルにかけてに対して短剣の機能を持たせるための部品の事である。

一般的な銃剣は銃に取り付ける剣だが、クルシスが言う銃剣は銃+剣の様な感じのものである。

元から、剣と言う枠組みに、銃と言う機構を取り込んだものではなく、

銃と言う枠組みに、剣の性能を取り入れた感じの物である。

クルシス 「んー・・・ちょっと待ってる」

そう言うところクルシスは机の引き出しを開けて、その中を入念に調べ始めた。

そこで先程の自分の考えが少しばかり固定概念に囚われていた事を自覚した。

F o g - 1 0 は^{リボルバー}回転式拳銃で、射撃が基本的な攻撃となる。

その為、銃と言う機構の特性を注目して、

金具に固定するのは命中精度を上げたりするパーツをつけるのだと思ひ込んでいた…

F o g - 1 0 を机の上に置いて、クルシスの方を見ると、丁度棚から何かを取り出している所であった。

クルシス 「ああ、あつたぞ」

クルシスを取り出したのは、名無しの持っているF o g - 1 0 と同じ会社が作成した

同形式の^{リボルバー}回転式拳銃である。 F o g - 1 0 に比べて軽量で、扱いやすい型で、

^{トップブレイク}こちらは中折式で通常の弾丸が使用可能なタイプである。

しかし、今クルシスを取り出した^{リボルバー}回転式拳銃はF o g - 1 0 と同等

の重量がある。

理由はそのリボルバーの下部にはバレルからトリガーガードを覆う様に

ナイフが取り付けられていた・・・

クルシス 「こいつはFaithful-02だ、その回転式^{リボル}拳銃と形状は同じだが、

こちらは主に強化プラスチックと軽量合金で出来ているから

後付の銃剣を取り付けるとそのFog-10と同じぐらいの重量になるんだ」

名無し 「えと・・・？」

クルシス 「刃の部分自体は軽量合金を使っているから、

刃が欠ける事は無い、それに切れ味も相当あるぞ？」

名無し 「・・・・・・・・・・？」

クルシスの言いたい事が良くわからないので、返答に困り、言葉を詰まらせる。

クルシス 「ほら、このFaithful-02やるよ、こいつは通常弾丸と魔弾、両方とも

使えるから護身用にもなるし、銃剣が着いてるから接近戦にも使えるぞ」

そう言うところクルシスは銃剣付きの Faithful-02 を銃剣を装着したまま収納可能な

レッグホルスターに突っ込んで 投げて渡したので、とりあえずそれを受け止める。

名無し 「えと・・・ありがとう」

とりあえずお礼を言うところクルシスがこちらを見て、何かをボソボソと呟きだす。

名無し 「どうし・・・」

何を呟いているのかを聞こうと思い、口を開くも、急激な眠気に苛まれ、バランスを崩し――

そこで名無しは完全な眠りに落ちた・・・

手からは Faithful-02 が入ったレッグホルスターが滑り落ちた・・・

倒れきる直前にクルシスが名無しを抱きとめた・・・

クルシス 「お休み・・・ふふっ・・・」

抱きとめた名無しをクルシスが、空いているベッドに名無しを寝かせる。

名無しに布団をしっかりとかけると、クルシスはもう一つのベッドに視線を移す。

”そこには、アホ面で寝息を立てるクルシスが寝ていた。”

クルシス（？） 「問題点は多数か・・・まあ、大丈夫かな？」

クルシス（？）はその背格好に見合わない無邪気な笑顔を見せて、

床に落ちていたホルスターに突っ込んである Faithful - 02 を拾って、

ホルスターから Faithful - 02 を引き抜いて名無しに銃口を向ける。

??? 「あはは、簡単な睡眠スリーピングの魔法にかっちゃってさばかみたいだねー」

銃口を名無しに向けた人物はいつの間にかクルシスではなく旧魔王城で出会った女の子になっていた。

女の子 「くすくす・・・まあ、お母様には怒られちゃうかなあ・・・じゃあね、お兄ちゃん

また運が良ければ会おうね？」

Faithful - 02 をホルスターに素早く収納し、それを名無しの銃が並べてある

机に投げる… Faithful - 02 が放物線を描き、机の上に落ちる頃には

女の子の姿は掻き消えていた。

第二十二話 悪夢

赤黒い人の血肉と、醜く歪み姿を変えた魔物の血肉の混ざり合った液体が大地を染め上げている。

その大地の上を走り剣を振るい銃を発砲し、魔物を倒すのは人間。

爪や牙、時には翼を振るい、人の命を刈り取るは魔物。

戦力は五分と五分。

人間は協力な魔導兵器を持ち出し、魔物を粉碎していく。

魔物はその強靱な肉体と、魔法を使い、命を刈り取っていく。

一瞬だけそんな映像が目の前に広がり、霧散していく。

次の瞬間には別の映像が目の前に広がっていく。

銃を握り、真っ紅に染まった視界の中、白衣を着た女性を捉える。

瞬間に銃を相手に向け、魔弾を連続射出する。

小規模な魔法が複数同時に発動し、その女性を粉微塵にせんと襲い掛かるも、

腕の一振りでその魔法は霧散し、次の瞬間には

鼻が触れ合いそんなほどの至近距離に女性の顔があり、何かを呟いている。

コ…ロ…シ…テ…ア…ゲ…ル……口の動きからそう言っているらしい事は判った…

女性が顔を離し、右腕を振り上げ——それが振り下ろされ、自分の頭にめり込んでくる——

その瞬間で目の前の映像は霧散し、別の映像が目の前に広がっていく。

自らの手に握っているのは独特の反りを持つ刀に似た緋色の剣。

目の前に広がるのは無機質な感じの濁った白色をした壁の通路である。

その通路を自分は高速で走りぬけようとしている。

通路の進んでいる方向の天井の壁から何かが迫り出してくる。

四角い箱状の物体がせり出してきた、その箱状の物体に取り付けられた

レンズがこちらを捉えた瞬間に左右の壁から自動迎撃用火器がせり出してきて、

こちらに照準を合わせ、瞬間で射撃を開始した。

速度を全く落とさずに刀で飛翔してくる弾丸や砲弾、果てはミサイルを

弾き、刻み、真っ二つにつつも、奥に進む。

やがて、迎撃装置の攻撃も止み、通路の先に両開きの扉が見えてくる。

その扉に向かって走り、扉を叩ききり中に突入――

その瞬間で目の前の映像は霧散し、別の映像が目の前に広がって――

変な夢を見た、朝起きた感想はそれだった。端的に言えばまさに字面通りの感想である。

細部まで思い出せないどころの話ではない、

薄っすらと「こういう様な感じの夢」と言う事は言えても、

具体的な質問には絶対に答える事ができない。

例えば、真っ赤な戦場で戦っていたと言う夢を覚えている。

しかし、真っ赤な理由は詳細には答えられない。

血飛沫で紅く染まっているのか、夕暮れで紅く染まっているのか、それとも眼球に血液が溜まって視界が紅くなっていたのか・・・そして、至近距離で少女の顔を見たと言う事は覚えていても、その少女がどんな表情をしていたのか、どんな造形の顔だったのかすらも思い出せない。

そんな説明をクルシスにすると、クルシスは

「何だお前・・・もしかして血が好きとかそういう奴か？」

と少々酷い感想を述べていた。

朝起きた時にはクルシスは既に目覚めていて、

クルシスがこちらの顔色が悪いのに気がついて声をかけてきたので

変な夢を見たことに関してを話したのである。

このことをミラーズとスイレンにも話したのだが・・・

名無しの過去に関して何か判るかもしれないという事でミラーズが詳細な質問をしてきたのだが、

所詮夢なので詳細までは思い出せる訳も無く、ミラーズの質問に関しては殆ど答えられなかった。

朝食を食べる為にギルドの大食堂で名無しの夢に関してを話のネタに

ソリッドトリエント 固形栄養剤、リキッドトリエント 液体栄養剤と言う簡素な物だった・・・

味は期待しちや駄目だとミラーズに言われていたが、

ソリッドトリエント 固形栄養剤は、簡単に言うとカロリーメイトの様な感じのクッキーっぽい物で、

リキッドトリエント 液体栄養剤は、チューブ型の容器に入ったゼリーの様な飲み物である。

どちらも、味は色々な栄養薬を凝縮した物なので、最悪である。

ミラーズ 「吐かないでね、食料は貴重だから」

スイレ 「うう・・・」

ミラーズは普通に食べているが、スイレは明らかに我慢しながら食べている。

クルシスは美味しい美味しいと言って食べている。味覚が狂っているんだと思う。

名無し 「うう・・・それで、今日は何をするんだ？」

とりあえず今後の予定を聞いておこうと思った。口の中にまだ味が残っている。

ミラーズ 「貴方の手掛かりが見つかると思ったんだけどね、足りないみたいだったんだけどー

そして、次の当てがないから、居からはクエストをやってもらって、その中で記憶探しも
やっていくーって感じがしらね？」

クルシス 「だな、基本的にスイレンと行動を共にしてもらう事になるな」

スイレン 「判りました」

ミラーズ 「そうね、名無しとスイレンは知り合いだったっぽいしね」

クルシス 「んでー、今日からクエスト受けてクリアするーってのを繰り返してくれ」

名無し 「はい」

ミラーズ 「私とクルシスは別のクエストに行くけど、貴方達二人でも大丈夫・・・よね？」

名無し 「問題ないと思う」

第二十三話 二つ名

マジックキャバル
「魔術結社」ギルドでは、基本的に地下都市の主要出入り口付近に現れる魔物の討伐や

都市内部で不足している物資の調達が基本的なクエストである。

難易度は基本的に討伐の方が高いが、物資の調達も時には最高難易度クエストになる時がある。

クエストは種類に応じて「討伐」、「調達」、「護衛」、「輸送」、「調査」の五種類にわけられる。

主に「討伐」のクエストを行う生業の者達を「ハンター狩人」と呼び、

主に「護衛」のクエストを行う生業の者達を「ディフェンダー守者」と呼ぶ。

この様にそれぞれのクエストを主に行う者達には簡単な二つ名の様な物がつけられる。

「輸送」は「キャリヤ運屋」、「調査」は「スポッター観測手」、「調達」が「シーフ盗賊」である。

そして、職業に関しての二つ名以外にももう一つ別の呼び名がつけられる時がある。

クルシスの場合、その大剣で敵を叩ききる様子から「ヒットスラッシャー叩斬者」のクルシスと呼ばれる。

ミラーズの二つ名は「月下鋼刃」ブレイドサーベルである。

名無しは相当高い実力を持っているので、二つ名があっても可笑しくないんじゃないか？

と言うことで、過去のリュウと言う名無しと同じ訓練成績を持っていた者と同じ二つ名がつけられた。

その為、現在は「高速射撃」クイックショットの名無しと呼ばれている。

スイレンは「多重魔導士」デュアルソーサリーのスイレンといわれているらしい。

「魔術結社」マジックキャバルギルドには他にも色々な二つ名を持つ人たちが居る。

ちなみに、このギルドで最強と言われているのが、

コールと言う名の男で、二つ名は「殲滅嵐」ジェノサイドハリケーンである。

基本的につけられた二つ名は、身体的特徴もしくは戦闘時の特徴を現したものであるが多い。

名無しは「狩人」ハンターの「高速射撃」クイックショットの名無しと言う長ったらしい名前前で

ギルドのギルド員リストに登録されている。

名無しに二つ名で「狩人」ハンターとついている時点かもしれないが、

名無しは「討伐」クエストを基本的に生業としてギルドの中では既に有名人である。

練習の時点で相当な実力を発揮していて、実戦でも相当な戦績を残しているのである。

当たり前と言っえば当たり前なのだが・・・

これだけ有名になれば名無しに関して何か知っている人が現れてもおかしくはない、

しかし、これまで全然情報が入ってこない・・・

理由は不明——ではない。

大体予測はついているのだが・・・

・予測

名無しⅡリュウ

スイレⅡルイ

老人が言っていたリュウとルイは名無しとスイレンの事で、レポートの事故によって現在に飛ばされ、事故によって記憶を失った。

だが、この予測だと結局の所、名無しが何者なのかわからないのである。

再度老人の話を聞いてみたところ、

名無しはフラリと都市に現れ、ギルドに登録する事無く、

ギルドの手伝いをしていて、魔王討伐戦に加わったとの事であった。すると、都市に現れる前、名無しとスイレンは何をしていたのか？
と言う疑問が残る。

疑問は増えるばかりである。

今日もクエストカウンターでクエストを受けて、討伐をしている最中である。

討伐対象は「大鼠^{ビュクラット}」と言う、その名の通り唯の大きな鼠の討伐である。

名無しは「F o g - 1 0」はホルスターの中にしまいっぱなしで

通常弾丸と魔弾の高速切り替え可能な銃剣付き「F a i t h f u l - 0 2」を右手に持って、

接近戦時の斬撃と射撃を行い、通常弾丸のみ使用する自動式拳銃の「F N ブローウィン・ハイパワー」

で眼や口を狙って射撃する。

通常弾丸の場合、相手の皮膚を貫く事が出来ない場合があるので比較的軟い目や口を狙うのである。

後方からスイレンが「短剣^{ナイフカーニバル}舞踏」と言う

魔力の短剣を作り出し、自らの周りに浮遊させ、ガードしたり攻撃したりする魔法である。

それで自らの体を守りつつ、短剣を飛ばして攻撃したりして援護している。

普段の戦闘もこのような感じで進めている。

と言うより、二人で戦うといつの間にかこういう陣形で戦っているのである。

記憶を忘れても、行動では覚えていると言う感じだろうか？

この戦い方は安定していて戦いやすい。

名無しは背後からの攻撃は気にしなくて良い、スイレンが援護してくれるのが判るから、

スイレンは接近してくる敵は気にしなくて良い、名無しが射撃してくれるのが判るから。

互いが互いを無意識のうちに庇いあって、それで居て全然危なっかしくないのである。

過去にこの戦闘方法で長期間戦闘を繰り返していたのはわかる。

その為、記憶探しは基本的にスイレンと共に行う様にしてる。

第二十四話 盲目の少女

フルークフィーデ
蝙蝠獣人にとっては、辺りが明るかろうが暗かろうが関係無い。

音波による地形情報及びに付近に居る生命体の把握は簡単にできる。

だからといえ、視力が無いのは少し不便である。

音波による地形情報の獲とくは、対外の場合、

目の前に何かあるか何も無いか、目の前の物質は何なのか、

音波の反射によって獲る情報は、曖昧すぎるのである。

しかし、それは普通の蝙蝠獣人フルークフィーデの場合である。

元々生まれつきで視力を失っていた自分は、

音波による地形情報獲とくの技術が他の蝙蝠獣人フルークフィーデに比べて異常に高く、

辺りの情報を的確に得る事が出来る程である。

普通の蝙蝠獣人フルークフィーデなら、人間を音波のみで把握しようとする、

人型の水を多量に含んだ物としか判らない。

しかし、自分の場合はもっと細かく、どんな体型で、大体の性別も

何となく判る。

そんな感じで普通の蝙蝠獣人^{フルークフリーデ}よりは優れているのであるが、

やはり音波で獲る情報には限界があるし、

その限界の所為で色々大変なのである。

例えば――

ミラーズ 「ほら、あぁーん」

今現在の現在の地形を把握すると、

自分の前にプラスチック製の机があり、机を挟んだ反対側にミラーズと言う女性が座っている。

そして、机の上には食べ物が入った金属製の食器が置かれていて、

目の前のミラーズと言う女性がスプーンで料理をすくい、こちらに食べさせようとしているのである。

ミラーズ 「ほら、どうしたの？食べたくない？」

この女性は、別に嫌がらせをしている訳ではなく、悪気があるわけでもない。

唯、スマイレー人だと料理をともに食べられないからである。

スミレ 「いえ、ありがとうございます」

とりあえず、口を開けて、その料理を食べさせてもらう。

病室に設けられた机と椅子を出してきて、

料理を食べさせてもらっている理由は、

先刻も述べたとおり、スミレ一人で料理を食べる事が出来なかったからである。

一人で食べようと思えば食べられなくも無いが、

一人で食べていた時は、とても危なっかしかったらしく、

偶然やってきたミラーズが食べさせてくれる事になったのである。

まあ、視力が無い状態での食事と言うのは結構難しいという事を学習したのだが、

今後、食事の時は誰か人を呼んで食べさせてもらうようにと、

食器類を持って出て行くミラーズの一言を聞き流し、

ベッドに戻ろうとして——ガゴンツと音がして、足に痛みを感じたときには遅く、

机を巻き込んで盛大に転倒してしまっていた。

ミラーズ 「ちよっ大丈夫？」

音を聞きつけて直にミラーズが戻ってきたらしい。

スミレ 「大丈夫です」

膝が痛い、気にする程でもない、大丈夫と返答しつつも、立ち上がるうとして…

ミラーズ 「怪我してるじゃない」

接近していたミラーズに抱きかかえられ…続に言うお姫様抱っこみたいな感じで…

驚いて、硬直していると、ベッドに下ろされ、右足を掴まれた。

ミラーズ 「消毒するから大人しくしてね。」

ミラーズが何かを取り出している音を聞きつつもやはり視力が無いと不便と言うことを噛み締め、

スレイザ 契約側探ししないといけないかな？と心の中で思った。

スミレ 「いつ…」

膝に消毒液をつけられたらしく、結構しみたので声を上げてしまった。

ミラーズ 「ごめん、痛かった？」

スマイレ 「いえ、ちょっとしみただけです」

ミラーズ 「そう、じゃ絆創膏貼っておくわね」

ミラーズが絆創膏をスマイレの膝に貼り付ける。

眼が見えないので多分だが、膝を覆う程の大きさの絆創膏を貼られたのだと思う。

ミラーズ 「うんうん、これで大丈夫ね、次からは気をつけてね」

スマイレ 「はい」

ミラーズ 「じゃ、私は医務室に行ってくるわね」

そう言うミラーズは応急処置に使った救急箱を何処かに収納してから、

倒れていた机と椅子をなおして出て行った。

先ほどの事から、視力が無いのは不味いと言うのは良くわかった。

出来るだけ早急に契約側を見繕わなくてはならない。^{スレイヴ}

だが、契約側^{スレイヴ}には圧倒的な悪条件がつくので、

自らなりたいたいと申し出るものは殆ど居ない。

強引に契約^{コンタクト}するという手もあるが、派手な行動をとるのは不味いだろう。

このギルドに話を通してみて、契約者スレイヴを探してもらうと言うのは、

多分無理だ、自分一人のために人一人を犠牲にするのは良くない。

と言うより、自分自身で他人を犠牲にしてまで視力を欲した訳ではないと否定しつつも、

視力があつた方が良くというので契約をどうしようと考えていた事に、コンタクト

自己嫌悪を抱いてしまう。

これでは祖父となんら変わらないではないか…

普段は顔の筋肉は口以外まったく動かさずに会話し、相手に心内を見せない様にしている。

なので、心の中の醜い部分是谁にも見られていない自信はある。

伊達に陰謀に塗れた祖父の様子を見ていた訳ではない…

笑顔の裏で常に相手を利用し、蹴落し、己がの上る事を考えている人物ばかりだったのだ…

俗に言う“貴族の娘”と言う私の看板を欲しがる者は沢山居た…

祖父はそんな私を政略結婚とやらの道具にしようとしたのだ…

自分が得をする為に他人を利用する等はしたくない…

けれども、誰でも良いから契約を結んでくれる人物が居ないかと、

卑しい自分が心の中で囁きかけてくる。

その囁きを無視して、とある詩を口ずさむ。

もしもキミに視力があつたら この景色を見せてあげられるのに
もしもキミに心があつたら この好きで癒してあげられるのに
ボクの命なんていらぬ キミが唯 笑顔で居てくれれば
ボクの命なんかよりも キミの笑顔が大切だから……

コタクト
契約を行う前日。

スレイヴ
契約側選ばれてしまった少年が閉じ込められていた部屋に、

両親に内緒で尋ねていった。

スレイヴ
その時にスミレは契約側の少年に問うた。

「貴方は、死ぬのが怖く無いの？今なら脱走の手助けをしてあげる」
そんな風に、

今と同じで無機質な声で問うた。

ロード
少年は契約者である私を見ると、こう答えた。

「僕は君の笑顔の為ならこの命を捨ててあげられるよ」と…

そして、先程の詩を歌ってくれた。

少年は世話人として私の付人をしていた。

その頃はまだ、祖父の薄汚れた陰謀を知らず、無邪気に笑っていたのだ。

その時の契約側は私の両親である。

両親が死んで、スミレが祖父に引き取られるまでは、

無邪気に笑って過ごしていた…両親が死んだ。目の前が真っ暗になった。

契約の効力が切れて、視力を失った。そして、祖父に引き取られた。

祖父は視力がない私を見て、即座に契約側を探した…

白羽の矢が立ったのは、世話人として私と一緒に居た少年…シーライだった。

私は反対をした、けれども祖父は私の意見など聞いていなかった。

祖父はシーライを部屋に閉じ込めて強制的に契約を結ばせようとした。

だから、私はシーライを逃がす為にシーライの閉じ込められた部屋
に向かった…

答えは 否定 だったのだけれど…

第二十五話 襲撃

部隊に指示を出し、都市に侵入した化け物共を倒そうとする、

しかし、都市に侵入してきた化け物共は迎え撃つこちらを易々と噛み砕き、引き千切り・・・

都市自身の持つ自動防衛機構すらも全て突破し、この場にやって来ようとしている。

ここは重要拠点、都市の中央管理を一括に担っているコンピュータと

最高峰の防衛機構が集中されている建物・・・通称”城”

四方に対して自動迎撃機関砲がそれぞれ45門ずつ設置されていて、

自動迎撃レーザーやガードロボットによって守られている。

その建物の内部の通信統括室の中では大混乱が起きていた

「南地区担当第一中隊、応答が途絶えました」

「北地区にて第二中隊、接敵致しました！」

「南地区の第一中隊搜索に第四中隊を向かわせます！」

「西地区担当第三中隊より援軍の要請！」

「援軍として北地区より第六中隊を移動させます！」

「第五中隊より連絡！東地区の第二ゲート突破！繰り返す東地区の第二ゲートが突破された！」

「南地区の第一中隊の捜索に向かった第四中隊より連絡！第一中隊全滅を確認！」

この都市は”城”を中心に、西から南地区にかけてが居住区画、北地区に食料生産プラント区画、

東地区に武装・衣料品の生産プラント区画である。

そして”城”を中心に円形に都市は広がっていて、大円、中円、小円と言うように、

円形に襲撃対策の迎撃設備を設えたゲートが三重に形成されていて、

”城”には都市内部の人間が非難するように作成されたシェルターが存在する。

地下都市自体がシェルターの役割をしているが、もしもの時用にと作られたものである。

「第二中隊、負傷者多数！LEVEL2と接触した模様！」

「第五中隊、第三ゲートまで撤退完了。第三ゲートにて迎撃戦を開始します」

第一、第二、第三と外側から順にゲートを数えていく。

・地区状況

北地区：第一ゲート突破

西地区：未突破

南地区：第一ゲート突破

東地区：第二ゲート突破

ゲート一つには自動迎撃機関銃20門、自動迎撃光線砲台が5門、

四速歩行型ガードマシンが4機、二足歩行型ガードロボットが50機、

その他に迎撃用の武装やシステムが多数設置されていた

しかし、それがいとも容易く突破されている。

・部隊状況

第一中隊：南地区 全滅

第二中隊：北地区 負傷者多数 LEBEL2接触

第三中隊：西地区 負傷者多数 援軍要請

第四中隊：南地区 第一中隊全滅を確認 第一中隊に変わり南地区
防衛

第五中隊：東地区 負傷者多数

第六中隊：西地区

通信統括室では、巨大なモニターと複数の個人コンピューターが存在する巨大な通信室である。

通信員が個人コンピューターにて部隊の様子を纏めて、

情報統括者の個人コンピュータに送信し、

情報統括者がその情報を元に素早くメインモニターに情報を表示すると云ったものである。

そのメインモニターは1秒毎に凄い勢いで表示数値や状況の変化が起きていた。

「第二中隊との通信が途絶えました!!」

「第五中隊との通信も途絶えました!!」

「第四中隊より連絡、南地区の第二ゲートが突破、繰り返す第二ゲートが突破されました!」

メインモニター中央に表示された都市の地図が段々と赤く染まっていく、

こちらの支配圏が緑色に表示され、敵の支配圏が赤色で表示されている。

ドォーンドォーンツと遠くの方で何かが爆発する音が響いているのが、

段々とこの建物に近付いているのが判る。

メインモニターをひと睨みした跡に、直に通信統括室から出る。

エレベーターに乗り、最上階に向かう。

エレベーターに載っている間ずっと爪を噛み、

階数表示の光を睨み付けていた。

エレベーターが最上階に到達して、扉が開くと同時に足を動かし目的地向かう。

?? 「市長」

部屋に入ると同時に部屋の中に居る誰かに声をかける。

部屋は適度な明るさに保たれて、

部屋の隅々に至るまでアンティーク品の様な風格の家具が並べられている。

だが、それはそれぞれがとても高価なのは人目で判るが、

雰囲気にあっていない物ばかりが置いてある。

壁には高価そうな額縁に飾られた絵が飾られていて、いわゆる成金の部屋と言う状態である。

入り口からまっすぐ進んだところにある木製のデスクには

頭を抱えて震えている初老の男性の姿があった。

?? 「市長、もう限界です」

第二十六話 緊急事態へエマージェンシー

今日の討伐のクエストは完了。

クエストカウンターで報酬を受け取って、次のクエストの準備を始めようとした時であった。

スピーカー エマージェンシー エマージェンシー
「緊急事態、緊急事態」

ギルド員の皆さんは直ちに集会場に集合してください、繰り返します……」

クエストカウンターに取り付けられていたスピーカーが大音量で警告音を発し始めた。

名無し 「なんだ？」

辺りを見回すと、他のギルド員達が慌てた様子で集会場へと向かっていくのが見えた。

スイレン 「集会場に集合って言ってる、行くよね？」

名無し 「ああ、何があったんだろうな」

名無しとスイレンも集会場へと向かった。

集会場には都市内に残っていたり、クエストが丁度終わり帰って来た者達が集まっていた。

舞台の上には、髭を蓄えた老人が立っており、その手にはマイクが握られている。

と、横から双剣使いの男があれば市長だと教えてくれた。

市長 「えー、緊急事態宣言です。この都市から12km先にて、魔物と都市防衛システムの

激しい戦闘が確認された、そして都市防衛システムが敗北した事も確認できた、

次に魔物が襲うとすればここの都市かもしれぬ。」

市長の演説が前置き無しに始まり、あたりの者達はざわめき始めた。

市長 「静粛に、これはこの都市の存続に関わるかもしれん問題じや

攻撃された都市の名称は「ブラッド」じゃ、この都市に関しての情報は殆ど無い。

つい最近保護した蝙蝠獣人フルークフリーデのもたらせてくれた情報のおかげで、

そこに都市が有る事が判明したのじゃ、そして、その都市が魔物の大群に襲撃され、

殲滅されたいのじゃ、そして次の獲物がこの都市になるかもしれん

お主等には直に防衛線の準備をしてほしい。

「ブラッド」の調査じゃが、それはこちらで選別した人物にやってもらつて。

調査は調査者スポッターに任せる。そして魔物達の殲滅は狩人ハンターに任せる。

魔物の襲撃は十分あり得る、皆気を引き締めてかかるように」

そう言うと、市長は一度言葉を区切ってから、再度言葉を続けた

市長 「なお、以下名前を呼ぶ者はここに残ってくれ。

ハイスピードショット

デュアルソーサリー

高速射撃の名無しと多重魔導士のスイレン、

ブレイドサーベル

ヒットスラッシュャー

月下鋼刃のミラーズと叩斬者のクルシス、

シャドウドールズ

ふうりん

ダークサイドアロー

はくえい

無影戦機の風鈴、闇黒尖弓の白影

ナバームインフェルノ

あきはる

ショットガンカーニバル

永久煉獄の秋春、絶滅絶望の燐

以上の8名じゃ、では己のやる事に全て責任を持て、生きていれば明日は来る。」

何故か名前を呼ばれてしまった。

ミラーズとクルシスは、スイレン、名無しともに知り合いだが、後の4名の事は、二つ名と、特徴は教えてもらったが、実際に顔を合わせたことは無い。

シャドウドールズ

無影戦機の風鈴

性別は女、年齢は14、年齢は低いが、相当な実力を持つ。

耳着き帽子に、手にはめた実用性の無い肉球の手袋、鼠の尻尾と言
う変わった服装をしている。

特徴的なのは武器である。戦機……いわゆる戦闘機械がその少女

ドールズ

バトルドールズ

の武器となる。

バトルドールズ
戦闘機械は魔力によりその場で量産されるタイプで、何処から転送、転移している訳ではない。

口癖が「チュー」と言う鼠の鳴き声の様なので、皆から「ネズ公」と呼ばれている。

ダークサイドアロー
闇黒鋭弓の白影

性別は男、年齢は20代後半、忍者の様な格好をしている。

武器は二つ名にある通り弓で、月影げつえいと言う名の漆黒の弓を使っている。

魔物だろうが人間だろうが何者にも悟られずに相手の命を刈り取ると言う、暗殺が得意。

寡黙的であり言葉を喋らないが、意思疎通は普通に出来る。

この4人の中では結構な常識人。

ナバームインフェルノ
永久煉獄の秋春

性別は男、年齢は20、真っ赤な頭髮の目付きの悪い人物である。

二つ名の通り、炎を使い戦うのが得意。　その炎はシェルターの壁をも焼き尽すので、

都市内では絶対に魔法を使うなと厳重に注意されている人物。

ショットガンカーニバル
殲滅絶望の焔は、

性別は女、年齢は22、西洋の女ガンマンの様な服を着ている。

二つ名の読み名にショットガンとある通り、散弾銃を使った敵の殲滅が得意である。

使う武器は自分で改良した、機関散弾銃（機関銃の弾丸を散弾に変えた物）を使っている。

武器に「ダーリン」と言う愛称を付けており、少々変わった人物らしい。

第二十七話 調査準備

集会場にある舞台横の所に呼び出された8名と、市長代理の秘書の女性、

そして何故か蝙蝠獣人^{フルークフリーデ}スミレが居た。

秘書 「ここに集まってもらったのは実力があるので適任だと判断されたからです。」

秘書の女性が話を切り出す。

風鈴 「チュツ？ 私達が実力者なのは判るよ？ そのお兄さんとお姉さんに蝙蝠獣人^{フルークフリーデ}の子は？」

リュウの横で、耳着き帽子の耳と、腰の辺りにつけられている尻尾をひよこひよこことせわしなく

動かしている少女が、名無しとスイレンとスミレを指差して質問をした。

秘書 「その男性は高速射撃の名無しさん、^{クイックショット}
女性^{デュアルソーサリー}は多重魔導士のスイレンさん、

^{フルークフリーデ}この人は情報提供者である蝙蝠獣人のスミレさんです。」

秘書は淡々と説明だけをする。

秋春 「けつ、ひ弱そうな野郎じゃねえか」

真っ赤な頭髮をした、目付きの悪い男がこちらをジロジロと見てくる。

燐 「スイレンちゃんかしら？私の好みだわあ」

背中に機関銃を背負ったガンマン風の衣服の女性がスイレンをうっとりと眺めている。

白影 「話が進まん」

忍者の様な格好をした鋭い目つきの男性が話を進めると遠まわしに発言する。

秘書 「とりあえず、自己紹介は後ほどやってもらいます。
今回の緊急招集の内容について今から説明致します。
質問等御座いましたら遠慮無くお申し付けください。」

そう秘書の女性が切り出し、今回のクエストの説明を始めた。

ここに呼び出した人達はハンター狩人、ディフインダー守者、スポッター観測手

の三通りの職種の者を集めた。

ミラーズと風鈴がディフインダー守者、白影がスポッター観測手で、

それ以外が全員がハンター狩人である。

ここに集めた者にやってもらおう事は、

フルークフリーデ
蝙蝠獣人の小規模地下都市「ブラッド」の記録調査データである。

防衛線を張るに張るにあたって、襲撃を行った魔物の情報を保管した記録データが、

ブラットの都市管理用機構に保存されている可能性が高い。

その記録の回収と都市内部の様子^{データ}の調査が主な任務である。

今回の調査には、都市の内部を詳しく知っており、都市内部へと続く秘密の通路の

ありかを知っているスマイレも同行する事になった。

そのため、スマイレの守者として、ミラーズと風鈴を、

都市の調査の為に白影を、魔物討伐の為に名無し、スイレン、クルシス、燐、秋春を、

そういった具合で集められたのがここに居るメンバーである。

今回の緊急招集での異存がある者は直ちに申し上げるとい事になったが、

名無し、スイレンは今の所手がかりが何も無く、何をしたら良いのかも判らないので断る理由はない。

ミラーズ、クルシスは特に何も言わなかった。

風鈴はニコニコ笑顔でチューチュー言いながらスマイレに抱きついて
いた。

燐はそんな風鈴とスマイレの様子を見ながら「異存は無いわよ?」と
言い、

白影は「己も異存は無い」と燐に続いて肯定していた。

秋春だけが「めんでえ」とぐちぐちと言っていたが、

最後は結局参加する事になった。

全員の承諾が取れた事を確認すると、秘書の女性は

「行きの移動は徒歩で行い、帰還は調査先の都市で使えそうな
輸送車や軽戦車もしくは装甲車等を探してそれで帰還してください。
薬品や弾薬、それから武装等で欲しい物があれば、取引所に申し出
ておいて下さい。

出立の際にお渡し致します。では、私はこれで失礼します。」
と事務的な言葉を投げかけてから、去っていった。

その後に残された白影とスイレン、クルシスとミラーズは、

今回のクエストに必要な物を話し合い初め、

風鈴はスマイレに抱きついてうつとりとした顔で「チューチュー」と
鼠の鳴き声の様な声を上げながら

頬ずりを続けていて、燐がそれを恍惚とした目で見ています。

秋春は何故かこちらを物凄い眼力で睨み付けてきていた。

と、秋春がこちらに歩み寄ってきた。

秋春 「雑魚が調子に乗ってんじゃねえぞ」

そついい残すと、秋春は去っていった。

風鈴 「おにーさん、あの人の言う事は気にしなくて良いチューー」

その様子を頬ずりしながら見ていた風鈴が声をかけてきた。

というかずつと頬擦りをされていて、スマレは鬱陶しくないのでだろうか？

表情にまったく変化が無いのでその心中を察する事は難しそうだが

：

名無し 「ああ、大丈夫だが・・・嫌われているのか？」

燐 「違うわよー、妬んでるだけよー」

そこに横から燐が声をかけてきた。

燐 「あの子ねえ、自分以外にちやほやされてる子を見るのが嫌いなよね」

名無し 「ちやほや？」

燐 「二つ名を持つてる他の男の子を皆敵視してるのよ」

名無し 「？」

燐 「不思議そうな顔、可愛いわぁ、惚れてしまいそう」

行き成り燐がこちらにぐつと寄ってきたので、つい二、三步下がってしまった。

燐 「やぁね、冗談よ」 冗談」それよりも荷物の準備しなくちゃね」

そう言うと、燐はさつと身を引いて、怪しい笑みを浮かべていた。

その様子を見ていたスイレンは、燐という女性が名無しに近づいた時に感じた、

チクリとした胸の痛みに疑問を覚えた…

この痛みは何なんだろう？

第二十八話 防衛機構

センサーに反応あり・・・・・・・・

都市内に侵入者発見・・・・・・・・

侵入者の情報の収集を開始・・・・・・・・

戦闘員・・・・・・7名・・・・

魔力の付加が確認される通常種の人間

魔力値：4000～8000

武装：剣2名 弓矢1名 機械人形1名 魔法2名 銃1名

全員が防御魔法の掛かった衣服を着衣 進行中の部隊展開状態から
非戦闘員を守護する事を

最優先目的として活動していると見られる。

非戦闘員一名・・・・都市内の住人リストに登録された少女・・・・

住民番号120030番、名称：スミレ 年齢：11

情報不一致者一名・・・

人型をしているが種族が特定不可能・・・

人間と仮定した場合の情報・・・

魔力の付加が確認される通常種または獣人種の人間

武装から戦闘員であると予測

魔力値：測定不能

武装：銃 防御魔法のかかった衣服を着衣

魔物と仮定した場合の情報

LEVEL：3 タイプ：ヒューマノイド 許容魔力：測定不能

人間と行動を共にしている。魔力により人間を騙し行動している可能性有り。

侵入者の進入経路確認中・・・・・・・・・・

確認完了

進入経路第二緊急避難通路として利用されていた通路から進入

現在位置は南地区住居区画の都市外円部避難通路進入路

侵入者の迎撃モードに移行します

ガードシステムの起動を起動

起動不可

エラー

エラーの修復

エラー原因の判別――

エラー原因の判別が完了

原因：ガードシステムの機構の一部または全ての破損

自己修復システムの確認

自己修復システムの異常を確認

修復システムの異常によりガードシステムの修復が不可能

ガードシステムの起動を中断

中断の完了

南側地区第一ゲートの確認

稼動可能な二足歩行型ガードロボットの確認

完全状態で存在する個体無し

武装のみの破損にて稼動可能個体が1機

下半身を消失した個体が1機

破損個体の修復

修復システムの異常を確認

個体の修復は不可能

武装のみ破損個体

個体のシステムを稼動

稼動を確認

感覚情報デバイスの接続

接続の完了

メインカメラの稼動を確認

視界が点滅する――

目の前に表示されていたモニターと重なって別の映像が情報としてメモリに流れ込んでくる。

??? 「個体型のデバイスとの接続に一時的にプロテクトをかけます」

つい口から漏れたその言葉も次の瞬間には聞こえなくなる。

感覚デバイスの接続を確認 接続の完了

動作デバイスの接続を確認 接続の完了

ピピピピッと電子音が頭の中で響き渡る。機械の眼を動かしてあたりの確認をする。

ガードロボットの格納庫の中であるが、照明のシステム系統に異常が発生している為真つ暗である。

メインカメラのモードの変更

通常状態から暗視モードに変更

変更が完了

ウィーンツとカメラのオートフォーカスの稼動音がすると同時に、真っ暗な視界がやや不鮮明だが辺りの様子が見えるようになった。

再度辺りを見回してみる。

整備用の台に固定された腕を動かしてみる・・・

ブチブチツとケーブルの千切れる音が響き、視界の中に自らの腕が現れた。

肘の辺りから引き千切れ、ケーブルがだらりと垂れている腕が――腕の先に稼動情報を送ろうとすると、垂れているケーブルがビクツビクツと痙攣する。

あまり見ていて気持ちの良いものではない。

今度は足を動かしてみる。

またしてもブチブチツとケーブルの千切れる音――

足の状態は普通である。

稼動状態から、両腕が引き千切られているだけで足の稼動には問題が無い事が確認できた。

整備用の台から立ち上がり、格納庫の扉へと向かう。

扉は堅く閉ざされていた――

南側区画第一ゲートの防衛機械人形格納庫

扉のロックを解除・・・・・・・・失敗

下半身の消失した個体

個体のシステムの起動・・・・・・・・起動を確認

武装システムの起動・・・・・・・・起動を確認

装備中の機関砲の標準の設定・・・・・・・・設定の完了

下半身の消失した機械人形が右腕につけた機関砲を扉の方へ向ける。

ドガガガガガンツと機関砲が火を噴いた。

扉が吹き飛ぶ。

その扉から両腕を欠落した機械人形が外に出た。

その動きはまるで人間の様に滑らかで…

第二十九話 機械人形へオートマタ

足音がカツンカツンと響く合金で作られた通路を、周囲を警戒しながら進んでいく。

足音は5人分。

通路を歩いている人数は9人である。

足音が4人分足りない理由はちゃんとある。

白影はスニッキング隠密行動を基本としているので、足音をたてないのは当たり前である。

衣擦れの音や武具の接触音も全くせず、存在感も感じない、まるで影の样についてきている。

ミラーズもどちらかと言えば隠密系の行動を得意とするので足音をたてない歩き方をしている。

そして意外なのだが、燐もまったく足音をたてていなかった、

背中に機関銃を背負っていて、衣擦れや武具の接触するカチャカチャと言う音すら立てていない。

最初の印象がアレなために、この女性は少し特殊だと思ってはいたが、

音を立てずに行動する事が出来る程の実力者だとは思わなかった。

そして、もう一人音を全く立てずに歩いている人物が居る。

履いている靴は金属とゴムの織り交ぜられた靴底のマーチングブーツである。

金属部分が床に接触する時の音がしそうなものだが、それも全くしていない。

そして腰のポーチと背中の中のバッグ、腰のホルスターの接触音や、衣擦れの音もまったくしていない。

ただ、白影と違い、存在感は完全に消すのではなく、辺りに紛れ込むと言った感じである。

そんな不思議な歩き方をしているのが自分なのである――

そのことに関して戸惑いはすれど、さして驚いてはいない。

戦闘技術に関してアレだけの技術があるのだ、

他にいろいろな技術を持っていたとしてもさして驚くほどの事ではないという判断だ。

通路は非常灯によってぼんやりと照らされているが、

所々の非常灯は破損していたりするので、所々が完全な暗闇に包まれている。

その闇に包まれた空間に何者かが潜んでいる可能性と、

その闇に隠れる能力を持っている魔物のリストが頭の中に浮かんで消えを繰り返している。

先ほどから無意識に横を歩いているスイレンに話しかけてしまっている。

その度に、何故か自分は顔を背けてしまっし、ぶっきらぼうな感じになってしまっ。

薄暗い通路に動く影といえば自分達の影だけで、他には何もない。

まるでお化け屋敷の様だなぁと場違いな感想を頭の中で浮かべてから、

横を歩いているはずの名無しの様子をちらりと確認してみる。

横を見れば確かに名無しは自分と並んで歩いている。

だが、ひとたび視線を前に戻すと、横に居るはずの名無しの気配は感じられなくなる。

名無しは忙しく視線をちらちらと色々な場所に移しつつも、時折私に声をかけてくる。

「大丈夫か？」等の事務的なやり取りで、顔を背けていて、ぶっきらぼうな声だが、声をかけられると、

心がほつとするのである。見ず知らずの男の筈だが、どうしてだろう？

と名無しの横顔を眺めつつも、その横を歩く。

名無し 「誰か居るぞ、え？」

いきなり自分の口から出た言葉に驚いて、ポカーンと口を開けて立ち止まってしまった。

秋春 「おいてめえ、冗談言つてるとぶち抜くぞ」

先頭を歩いていた秋春が振り向いて、銃の形にした手の人差し指をこちらにむけてきた。

指先から炎がチロチロと蛇の舌の様に出ている。

風鈴 「チュツ？笑えない冗談はやめてほしいチュ」

耳と尻尾をせわしなくピコピコと動かしながら、振り返って名無しを見た。

燐 「んゝ冗談じゃないっばいわねえ」

燐は背負っていたはずの機関散弾銃を腰溜めで構えている。

白影も月影に矢をつがえ、弦を引いて通路の先の影に狙いを向けている。

クルシス 「短い付き合いだが名無しは冗談言う奴じゃないぞ」

ミラーズ 「確かに・・・」

クルシスとミラーズが名無しをフォローしてくれる。

名無しの横ではスイレんがいつの間にか短剣舞踏ナイフカーニバルを発動させて名無しに寄り添っていた。

名無しと目が合うと、疑問符を浮かべて首をかしげた。

スイレん 「何で私短剣舞踏ナイフカーニバルを？」

名無し 「俺に聞かれても・・・」

ウィーーンツと機械の駆動音が、白影が狙いを定めた闇の中から聞こえてきた。

スマレ 「防御機構、あの形状は南地区のガードロボット」

淡々と敵の情報をスマレが呟いているが、名無しの頭の中には、

そのロボットの駆動音から導き出された防御機構の形状、武装、性能が表示されていた。

影からゆっくりとその機械人形が出てくる。

顔から徐々に灯りに照らされ、その機械人形の様子が判る様になる。

影から歩み出てきたのは、機械の駆動音を響かせる、執事服を着た青年であった。

??? 「問、貴方方…この……に何…に來た…ですか？」

その声は女性の声に聞こえたが、

壊れたスピーカーを使っているのか、音が所々割れていて聞き取り辛い。

影から全身が現れて、その全容を見て、皆が驚いて息を止めた。

その機械人形は両腕が肘の辺りから引き千切られていた………

第三十話 人工知能

両腕の肘から先が無いその機械人形^{オートマタ}……見た目は執事服を着た青年だが……

??? 「再度問います。貴方方は何をしにこの都市に来たのですよう」

その瞳の部分だけが微弱な光を放っているのか、まるで魅入られるかのような感覚に囚われる。

クルシス 「この都市の調査だが、お前は何者だ？」

背後に皆を庇うような立ち位置に移動したクルシスが大剣の柄に手を添えつつも、

質問に答え、こちらからも質問を切り出した。

スマレ 「小規模地下都市の管理用のマザーコンピューター、アリス」

風鈴に抱き付かれながらも、何も言わずについて来ていたスマレが話し出した。

スマレ 「この都市の防衛システムから生産システム、空調に天候の全てのシステムを」

全部管理している人工知能を搭載したコンピューター、それがアリス」

燐 「あら？と言う事は、この子がこの都市を守護してる訳ね？」

腰溜めの姿勢を崩さずに、油断無く銃口をアリスに向けながら言葉を発した。

アリス 「都市の調査、判りましたメインサーバーへのアクセスを許可します。

この機械人形オートマタについてきてください。都市内にはもう魔物は居ませんので」

と、アリスと言つらしい機械人形オートマタは、それ以後何も言わずに通路を歩いていった。

ミラース 「ついていつて平気かしら？」

「
秋春 「大丈夫なんじゃねえのか？」

風鈴 「んゝ罨って可能性もなきにしにあらずだよー？」

燐 「風鈴ちゃん、なきにしもあらず、が正しいわよ」

白影 「どうする？」

スミレ 「あのコンピューターなら信用して平気よ」

後方で、秋春達が相談を始めたが、機械人形オートマタはどんどん先に進んでいるので、

仕方なくついて行く事になった。

人工知能を搭載したコンピューターのと言うのは今となってはそれ程珍しいものではない。

基本的な判断は勿論の事、感情表現も可能の人工知能が開発されたのは八十年ほど前の事である。

今となつては、一部の人工知能を搭載したコンピューターが暴走しているが、

基本的に都市の管理をしているコンピューターは、人間の種族の者に対しては攻撃は行わない。

人工知能搭載の条件として第一に人間に危害を加えてはならない。

第二に人工知能搭載型の機械は攻撃目的の兵器として存在してはならない

第三に人工知能は自分自身のプログラムの書き換えをしてはならない。

人工知能には以上の三ヶ条がかせられているので、

人間の種族の者に対しては攻撃してこないはずである。

魔物は都市内には居ない。

その言葉は本当のようで、都市内部の居住区画に建設された建築物の大半が

半壊、もしくは全壊しており、完全な状態に残っている物は殆ど無
く

通路は瓦礫と魔物の骸で埋め尽くされており、

濃密な魔物の血独特な匂いが居住区画全域を覆っていた。

防衛機構の一部である第一から第三のゲートの所は特に魔物の血の
匂いと、

火薬の匂い、魔法によって引き起こされた炎の独特の匂い、が漂っ
ている。

そして、微かにだが人間の血の匂いも漂っている。

ゲートの所には四足歩行型ガードマシンが力尽きて大地に横たわっ
ていた。

四足歩行型ガードマシンの見た目は背中に多数の重火器を付属した
四足歩行の獣である。

勿論二足歩行型ガードロボットも多数が腕を引き千切られたり、

腰の辺りで切断されたり、首を千切られたりした物も多数転がっていた。

見た目が執事服の青年を模している為、千切れた腕や足の部分からコードが延びていたりするが、

それを踏まえても相当な地獄絵図である。

第一から第三のゲートを通ると、中心部分には大規模な防衛戦闘が行われた痕があった。

これまでのゲートの部分の魔物の骸の数とは比較にならない程の骸が山積みになっている。

そして、これまで以上に魔物の血に混じって人間の血の匂いが濃い。

アリスと名乗った擬似機体を操る都市管理人工知能は、

道端に転がっている魔物の骸の横を何も言わずに通り過ぎていく。

今の所感知出来る範囲内に魔物は存在しない。

そこで行き成り目の前に現れた巨大な建造物に少し驚いた。

防衛戦闘の痕ばかりに気を取られていたが、この建造物の防衛機構は相当な物だと判断できる。

だが、その防衛機構を全て破壊しつくした魔物はいったいどんな化け物なのだろう？

転がっている魔物の死体を見る限り、この防衛機構を破壊し尽す事が出来る魔物はいないはずだ。

そんな事を思っていると、アリスが歪んだ扉の前で立ち止まり、振り返った。

アリス 「電源回路自体は生きていますが階段を使って登って来て下さい。

五階層に存在するメインサーバールームに居ます。」

ブウンツと電子音がたった後、アリスの操っていた機体が動かなくなっ

皆で顔を見合わせた後、白影が先行して中に入っていた。

その後を名無し達が続いて入って行く。

第三十話 人工知能（後書き）

作者様がログインしました。

名無し様がログインしました。

作 「やほほーい」

名 「……え？第三十話であとがき2回目？」

作 「はい、そうなんです。記念すべき2回目のあとがきですよ？」

名 「作者、おい作者」

作 「何ですか？名無しくん」

名 「そういえば前回突っ込まなかったがな、俺の名前、名無しって
どいう事だ、おい」

作 「主人公、記憶喪失、名前以外なにも覚えてない、これ、ありがち。」

名 「まさか、ありがちだから名前も忘れさせてしまえと？」

作 「Yes!!」

名 「……んで、俺の持つてるFog-10って回転式拳銃は何だ？
主人公の武器が剣つてのがありがちだから遠距離武器にしたのか？

つか、よりもよって魔導銃って設定かよ、それこそありがち過ぎんだろ」

作 「えー、私ですね。銃が好きなんですよ。

まあ、詳しい構造とか知らないですが、

こう、何か好きなんですよねえ」

名 「作者が銃系が好きだから主人公の武器は銃になったと？」

作 「良いでしょ？回転式拳銃だよ？実は回転式ライフルとか

懂れたりしてるんだよね。こう、弾装部分がリボルバーと同じ方式

のライフルね、懂れね？格好良いよね？

ちなみに主人公の持つてる長銃は見た目がSIG SG550で、

Fog-10がトラスレイジングブルのModel480レイジング・ブル

のトリガーガードが分厚く、頑丈に作られていて、

トリガーガード部分と銃口の下の部分と銃身の中程に

金具が取り付けられていて銃剣が装着可能です」

ちなみにFogの意味は霧、濃霧って意味です。

銃の取り扱いの難しさから、五里霧中をイメージしたんだが…
良く思ったら、意味全然違うじゃんね？気にしてないけど」

名 「銃の名称え…気にしてないなら良いか…良いのか？

とりま、銃剣ってイメージはあれか？ガンブレードか？」

作 「は？ガンブレード？あれって弾でねえじゃん、ツマンネ」

名 「え？いや、あれみたいな見た目になるのか？」

作 「微妙に違うな、刺貫には向かないぞ？

だって、剣先は銃口になっとるし。

ガンブレードで斬撃の威力を、弾丸発射の振動を利用して飛躍的に上げた物だろ？

正直、高周波ブレードと何が違うのか理解できん。

むしろ、射撃のタイミングに気を使わないといけない分ガンブレードのが使いにくいんじゃない？」

名 「あー、俺が悪かった。話が逸れてる。

それで、もう一つの回転式拳銃だが…名前なんだった？」

作 「Faithful-02だな、こっちは通常弾丸も使える仕様だ。

う、Faithfulの意味は、忠実とかそういう意味だったと思う、

見た目は、コルトアナコンダとまったく同じ。

但し、初期状態から銃剣装備してるので、

見た目は銃下部に短剣の刃の部分が取り付けられてる感じ。

トリガーガードから銃口にかけての刃だな。

銃口から5〜10cm程だが先に飛び出してる。

勿論着脱可能。完全固定式とは違うのだよ」

名 「あー…えらく饒舌だなおい」

作 「んー…まあね、武器の紹介は懂れてるしね

ちなみに、機関散弾銃に関してだが、

やっちまった感があるが、後悔はしていない。

唯、物凄く反省してますorz」

名 「何故だ？」

作 「だって、機関散弾銃だぜ？作者の俺ですら想像できねえよ。どうしてもU・S・AS12しかでてこねえって、あれってM4カービンに似た構造だろ？機関銃じゃねえーじゃん。」

名 「あー、俺にはわからん。

とりあえず、散弾は近距離用の弾だから銃自体を出来るだけ軽量化して接近して使う物だと思っただが？それを重たい機関銃の弾丸ってそこらへんはどうなんだ？」

作 「俺の考えてる脳汁ダダ漏れ妄想では、

散弾の一粒一粒に魔法的効力が封入可能で、同時に複数の魔法が使える最強の弾丸だと言う事になってる。」

名 「ああ…一粒一粒にねえ…あれ？主人公の武器より目立たね？」

作 「え？主人公の武器が目立たないの駄目なの？そんなの初耳」

名 「普通主人公が目立つだろっ！

何で他の登場人物目立つ武器持つてんの！逆にこっちが聞きたいっつの！」

作 「ええ…だって、主人公が回転式拳銃もって、自動式拳銃まで持ったんだぜ？

そこに、ライフルまでプラスしちゃって、出血大サービスじゃね？

その上で他に武器持たせたら

一つ一つの武器の描写少なくなるじゃんっ！

そんなのいやだいやだあー」

名 「OK、把握。俺なんか疲れたからログオフするわ」

名無し様がログアウトしました。

作 「おろ？今回も名無しくんがお別れの挨拶してくれるんじゃないのか？

まあいいか、読者の皆様、グダグダドロドロですが、最後まで更新するので楽しみにしててねえー」

作者がログアウトしました

第三十一話 一方的虐殺ヘワンサイドゲーム

メインサーバールームには、大規模型のサーバーが多量に設置されている。

サーバーの放つ熱を、冷房設備が冷やし続けている。

アリス 「では、提示を希望する情報を指定してください。」

サーバールームの中央部分にばかりと空いた空間。

そこには何らかの液体に満たされた生命維持装置の様な筒状の装置が設置されていて、

その溶液の中には女性が入っており、その女性が先ほどのアリスと名乗った

都市管理人工知能の本体のデバイスであるらしい。

クルシスが視線を漂わせて頬をかき、秋春も困った様にそっぽを向いている。

白影は特に気にせず物珍しそうに円筒形の装置を眺めている。

名無し自身は急に目の前が真っ暗になったので少し戸惑ったが、

スイレんが背後から眼を塞いで「見ちゃだめ」と言ったので大人しくしている。

そんな男性陣の様子を女性陣の大半は冷めた目で見ていた。

そんな客人の様子を擬似デバイスの瞳で見ている。

アリス 「再度問います提示を希望する情報を指定してください」

無機質な瞳に皆を映しつつ淡々とした言葉を再度続けた。

ミラーズ「はあ、男共が役に立たないわねえ、とりあえず都市が襲われた時の状況は？」

呆れたようにミラーズが男性人を睨み付けた後に、アリスに指示をだした。

アリス 「畏まりました。

襲撃された時間は18:23、全滅した時間は19:28

襲撃時の魔物の種類別のおおよその個体数は、

ブラックハウンド、ダイクウルフ、ビーストファンゲ
黒猫犬、闇黒狼、牙獣等の

動物の変異種である魔物が3000匹程

骨格兵、ゾンビ死体人等の人間の変異種である魔物が200匹程

一部にLevel2らしい個体を確認。 都市内部の防衛

線の映像を御覧になりますか？」

ミラーズ 「重要拠点の防衛戦闘だけを表示して」

アリス 「了解いたしました。」

表示された映像は城の防衛戦闘の様子であった。

多数のガードロボット、執事服を着た青年の姿をした機械人形が、

マシンガン アサルトライフル スナイパーライフル ショットガン
機関銃や突撃銃、狙撃銃や散弾銃等で迎撃を開始した。

防御壁にわらわらと寄ってくる魔物に攻撃開始した。

だが、魔物に命中した弾丸は弾かれ、あらぬ方向に飛んでいく。

フルメタルジャケット
被覆鋼弾やソフトポイント弾ばかりを使っている防衛機構では、

硬質化した魔物の皮膚を貫く事は出来ず、弾かれてしまうのは当然の事である。

その所為で魔物の大多数に対してまともにダメージを与える事は無く、

防衛戦闘でありながら、まるで^{ワンサイドゲーム}一方的虐殺の様に見えてしまう。

…… 防御壁に寄り付いた魔物が液体を吐きつけた。

液体が防御壁に付着した瞬間に多量の煙が発生して、次の瞬間には壁が溶け始めた。

防衛隊に配属された^{フルークフリーデ}蝙蝠獣人が慌てて機械人形に命じて弾幕を激しくする。

しかし、それは兆弾による自滅を招く結果になっただけである。

その間にも壁が溶かされ、壁に穴が空いた。

その穴から小型の魔物が進入を開始した。

フルークフーデ
蝙蝠獣人が慌てて進入した魔物を迎撃するが、

倒しても倒しても魔物は殺到するばかりで数は一向に減らない。

……使っていた銃器の弾薬の補充行動をとろうとした^{フルークフーデ}蝙蝠獣人を魔物の一匹が押し倒す。

そこに数匹の魔物が群がる。服や鎧、装甲を切り刻み、肉や内臓を貪る。

^{フルークフーデ}その蝙蝠獣人は瞬間で骨だけになる。それを見た他の部隊員は逃げ出そうとする。

背を向けた背後から飛び掛られ、同じ様に肉を貪られ、骨だけにされる。

魔物にかかれば軽装甲鎧等紙切れに等しい…

判ってはいたがここまで酷いとは思っても見なかった…

城の防衛戦闘開始から23分53秒：配置されていた防衛隊員の生命反応の消滅を確認

城の防衛戦闘開始から43分34秒：防御機構の破損率が70%を突破を確認

城の防衛戦闘開始から53分24秒：シエルトアの防壁の破壊を確認

城の防衛戦闘開始から60分00秒：都市内部に存在する人間種
生命反応の消滅を確認

都市防衛機構の敗北を確認・・・重要拠点の半数が使用不可
能・・・

以上が都市管理人工知能が保管していたデータであった。

部屋の中は静寂に包まれていた。響くのはサーバーの稼動音と空
調管理装置の音のみである。

先ほどの映像が余りにも残酷で、余りにも嘔染みでいて、そして自
分達の未来の様で…

皆が言葉を失う。

ミラーズ 「襲撃を受けた理由は？」

その静寂をミラーズが思い切ってやぶった。

アリス 「襲撃の理由で御座いますか？

確実な理由かは不明ですが、スミレお嬢様の搜索の為に

頻繁に都市外部へと調査隊を送っていたのが一番可能性が
高いです」

ミラーズの問いにアリスが答える。

スミレ 「やっぱり……馬鹿な叔父様」

突然背後から聞こえた声に振り返ると、スミレは嘲笑を含んだ笑いを上げていた。

そして、笑いながらも明りを捉える事の出来ぬ瞳からは……涙があふれ出ていた……

第三十二話 人工知能へアリス

都市管理用マザーコンピューター”アリス”

見た目は桃色の長髪、すらりとした手足、バランスのとれたボディの、

擬似デバイスを基本的なボディとして使用している。

その擬似デバイスは現在、目の前の調整用の容器に入れられている。

その様子を詳しく見ようとすると、スイレんが後ろから眼を塞いでくるので

詳細は判らないが、一糸纏わぬ姿であるらしい。

擬似デバイス自体は相当細かい所まで作りこまれていて、

重量と質感以外は人間とそうたいして変わらない見た目をしている。

まあ、簡単に言えば人間の女性が裸の状態で、

液体の詰まったガラスの筒状の容器の中に浮かんでいると言う状況だ。

かなり艶かしいが、相手は人間ではなく機械である。

そんなものを見ても欲情する訳が無いのだが、スイレンは後ろから眼を塞いできている。

と言つか眼を塞ぐ以前にこの部屋の情報は全て頭の中に保管されたので、

眼を瞑っていてもこの部屋を歩き回れるくらいであるのだが――

そんな事を言つと色々と言われそうなので黙っている事にした。

背後から眼を塞がれているので辺りからの情報は基本的に音と空気の振動で感じ取っている状態だ。

気がつけば眼を瞑っているのに辺りの様子がうつすらとばやけた感じで判る。

細かい材質はわからないし、光の濃淡も判らない。

例えて言うなら赤外線サーモグラフィの様な感じである。

背後からスミレの嗚咽が聞こえてくるが、スイレンに背後から目を塞がれている今の自分に出来る事は

何もないので、この事に関してはミラーズに任せる。

涙をポロポロと流しているスミレの頭を胸にかき抱く様にして、

ミラーズが頭を撫でている。そんな様子を空気の動きで感じつつも、アリスに指示を出す。

名無し 「この都市に残された物資は使い物になるか？」

アリス 「大型銃器や兵器類は魔物襲撃の際に破壊されてしまいましたが、

小型銃器やステルス型の輸送用車両等はまだ使用可能です。

食料や衣料品等の物資は大多数が腐敗及びに変異物質が付着している物ばかりです」

淡々と説明を受ける。

燐 「だったら私達はその輸送用車両に使える銃器等で武装をして、それで都市に帰還、

それが最善の策だと思うのだけれど？どう思う？」

機関銃を撫でていた燐が立案をした。

風鈴 「私もそれでおっけーチュー、そっちの方が守り易いチュ」

暇そうにポーチの中を漁っていた風鈴がそれを承認。

秋春 「都市に通信するのが先じゃねーか？」

出来るだけアリスの方を見ないようにしながら、秋春が発言する。

クルシス 「俺は先に通信をしたほうが良いと思うが…後、転移装置^ト使えば早いと思うが？」

秋春と同じ様に視線をそらしつつクルシスが発言した。

ミラーズ 「あのねここは非登録の都市なのよ？その通信装置が登録済みの都市と同じ波長領域を

使っている訳ないでしょ、合わせるのに時間かかるだろうし、

転移装置^{ゲート}も同様の理由から、だから通信と転移装置^{ゲート}は無理ね」

秋春とクルシスの意見を、スマレを優しく撫でながらミラーズが切り捨てた。

燐 「だったらアリス、武装を輸送車両に移動速度を低下させない程度に積み込んで、

応急で良いから武装車両にできるかしら？」

アリス 「所要時間20分ほどで完了致します。車両の用意はどちらにすればよろしいですか？」

燐 「どこの門が使えるかしら？」

アリス 「西側の住居区画の門が破損状態が一番少なく、車両の通行可能な門です。」

燐 「だったら、その使える門から出る為のナビゲート情報を車両に入力、それから

この中央の建物の入り口に車両を止めて頂戴」

アリス 「畏まりました、車両の武装化を含め、ここに到着するまでにかかる予想時間は

30分となっております、時間までは六階層に存在する仮眠室で休憩をしていてください。」

そう言うと燐とアリスが話を終える。すると、アリスは目を閉じ、動かなくなる。

サーバールームに存在する一部のサーバーの稼動音が大きく響き、虚空にモニターが映し出される。

モニターに表示されるのは、輸送用車両の図面と、その図面を元に武装化後の図面が表示されている。

ミラーズ 「皆、仮眠室で休憩しましょうか、スミレちゃんも調子が悪いみたいだし」

ミラーズの一言に皆が賛成して、最初に居心地が悪そうにしていた、

クルシスと秋春が仮眠室へと向かい、次に白影が燐と風鈴に付き添うようにして仮眠室へと向かい、

ミラーズがスミレに何か言葉をかけながら、手を貸してメインサーバールームから出て行った。

残されたのは名無しとスイレンと目を瞑って動かないカプセルに収まったアリスだけである。

スイレ 「私達も行こ」

そう言うと、スイレは強引に名無しの腕を引っ張ってメインサーバルームを後にした。

第三十三話 自動火器

仮眠室は仮眠用のベッドが8個と大きな机が置いてある部屋で、

その隣の部屋には、トイレやシャワー、簡単な調理が出来る台所の様な場所がある。

台所に置いてあった冷蔵庫内の食材の大多数は電力供給の停止によって

十分な冷却が成されておらず、独特の腐臭を漂わせていた。

冷蔵庫に保管しなくても良い一部のインスタント飲料等がまだ使用可能だったため、

それを用意して、机に人数分並べた。

机の上に並べられているのは、コーヒーと紅茶が人数分と砂糖とミルクが置かれている。

最初に風鈴が紅茶に砂糖をたっぷりと入れて飲み始め、

クルシスと秋春が何もいれずにコーヒーを飲み始めた。

ミラーズは紅茶に砂糖を入れてスミレに渡している。

隣と白影は紅茶とコーヒーにそれぞれミルクを入れて飲んでいる。

スイレンは紅茶に砂糖を少量入れて飲んでいた。

自分はコーヒーに砂糖を少量入れて口に含む。

独特の苦味と酸味が口の中に広がる…まあ、美味しい。

風鈴 「んー所で帰りに足が出来たのは良いチュ、あのアリスはどうするチュ？」

皆が仮眠室でゆったりしていると、風鈴が口を開いた。

この都市は既に人が住む事が出来ないまでに破壊されてしまっている。

そのため、この都市の管理システムであるアリスはもう不要な存在である。

破壊された都市の人工知能を持つ管理システムは長い時間が過ぎると自ら狂いだして、

破壊活動を開始する可能性があるのです、この場合は破壊するのが一番良いのであるが…

まだ知能が存在する為、破壊されとなれば必ず迎撃をするだろう。

そうなればこちらの被害も少なくはない、そのためこの件に関して

はどういう対処が良いのかに

については、都市に帰還後に話し合うものだと思っていた。

ミラーズ 「んとね、私の考えを聞いてね？」

自分の分のコーヒーにミルクと砂糖を入れてかき混ぜながらミラーズが前置きを言う。

ミラーズ 「あの都市管理プログラムであるアリスを私達の都市に持ち帰るの」

燐 「そんな事出来るのかしら？」

秋春 「何でそんな面倒な事するんだ？」

燐と秋春が口を挟む。

ミラーズ 「まず第一に、これは可能でしょ？そうよね？アリス？」

と、ミラーズが背後に設置されていた監視カメラに向かって話しかけた。

アリス 「はい、可能です。必要最低限のデータをメモリに保管後、

デバイスに搭載して輸送する事ができます。」

その返答は監視カメラの横に設置されたスピーカーから放たれた。

ミラーズ 「だそうよ、それで第二にこの都市から安全に私達の都市まで辿り着く為に、

武装した輸送車両を使用するわね？その輸送車両に設置された武装の大半は、

自動火器モジュールなのよ、そうよね？」

再度ミラーズが監視カメラに向かって話しかけた。

アリス 「はい、主な武装は自動火器モジュールで車体上部に

乗り込み式の機関砲ユニットを設置しています。」

ミラーズ 「ね、それでその自動火器モジュールを遠隔操作や自動操作に任せるよりも

直接車両の内部から入力操作した方が確実でしょ？それをやってもらうの」

クルシス 「確かに、そちらの方が安全だな」

ミラーズ 「そして、私達の都市についてからアリスの処遇を考えれば良い、ね？」

ミラーズの提案は確かに一番良い行動提案である。

そのため、誰も文句を言う事なくその事に関しては決定した。

準備された車両はB M社製の輸送車両である。

武装改造がなされているので輸送容量が低下している。

B M社製の車両の大半は武装改造をしたり武装解除して輸送容量を増やしたり等が

しやすいように設計されている為、輸送容量自体の低下量も少なめである。

車両が城の破壊された全門部に横付けされ、車両の乗り込み口が開けられたので、

そこから全員が車両に乗り込んだ。

車両の内装は人が乗り込む部分は5人乗りとなっている。

運転席に座るのがクルシス、助手席には口にコードを咥えたアリスが座っている。

残りの座席にはスミレとスイレンとミラーズが座っている。

そして、車両上部は、櫓のようになっており、そこから射撃武器や魔法で

近づいてくる敵を攻撃できるようにしてあった。

固定型の重機関銃銃座も設置されており、

銃座には燐が座り、白影、秋春が手摺りにもたれて辺りを眺めている。

名無しは車両内部へと通ずる入り口の部分に風鈴と共に座っている。

バッグの中から通常弾の装填されたマガジンを3個とりだし、

服のマガジン収納用ポケットに入れて金具で固定する。

念のためにFog-10には予め火炎弾を4発と空気砲2発を装填
しておき

Faithful-02に通常弾を装填した。

第三十四話 夜間走行

武装車両が動き出す。

都市内部に残っている魔物の反応は皆無であるという調査結果が出ているが、

それでも注意していないと危ない。

レーダーに表示されない魔物も確認されているからである。

魔物は独特の魔力場（磁場や赤外線のような物）を発してる。

魔力場自体は魔力を持つ物全てが発している微弱な魔力の反応効果による力場である。

もちろん人間も魔力場を発している。

個人個人で微弱に魔力の性質が変化するので、一人ひとりの魔力場は多少の変化が出てくるが、

一定領域以上（高周波／低周波の様な感じ）の濃度の魔力は 人間からは検知されないの、

その一定領域内の反応は人間、もしくは獣人。

そして一定領域を外れた反応は、対外の場合が魔物である。

一部例外として魔法使用中の人間が一定領域以上の魔力場を発生させる場合があるが、

これは極一部であり、そういった人は都市公認もしくは都市に登録された住人であるので問題ない。

問題は魔力場を発生させない魔物や人間に限りなく近い魔力場を発生させる魔物である。

そういった魔物は基本的に上位種の固体とされる。

限りなく人間に近い魔力場だけでなく、姿形まで人間に近いのである。

そして、その上位種の魔物一匹で大型都市を壊滅させる事が出来る程の魔力を保持している。

そんな化け物としか言いよつた無き魔物は本当に珍しいので、

生きている人間の半数が出会う事無く一生を閉じると言われている。

珍しいからとはいえ、安心して良い訳ではない。

今年に入ってから通信が途絶えた都市の数は3個である。

その内の1つで上位種の魔物がいた事が確認されている。

姿形は「赤髪の眼つきの鋭い青年」という情報のみで、他に情報はなかった。

ゴンツと車両が揺れる

その揺れによって意識が内側から外側へと向けられた。

風鈴 「おにーさんどーしたチュ？」

急に辺りを伺い始めたこちらの様子に気がついて風鈴が声をかけてきた。

名無し 「いや、なんでもない」

風鈴 「チュ？」

一瞬首を傾げた後、興味を失ったのか立ち上がって流れて行く景色を見始めた。

名無しも立ち上がって流れ行く景色を眺める。

崩れ落ちた住居、下敷きになった魔物や蜂の巣になっている魔物。

手榴弾や榴弾砲を使用したのか、合成樹脂で固められた道路の所々に

大きな窪みや爆発の痕跡が多数見られる。

そんな中、一際目を引いたのは、この都市の防衛機構の一部のガードロボットである。

見た目は執事服を着た青年のその武装は突撃銃や散弾銃等さまざまだが、

一部の固体がまだ稼動しているらしく、時折稼動音を響かせて蠢いている個体がいる。

そんな風景を眺めているといつの間にか都市の出入り口であるゲートに到着した。

地下都市のゲートは地上に向かって行く緩やかな坂が続いており、

出口部分には防衛機構と魔物を感知するレーダー設備が備え付けられていて、

巧妙に周りの風景に溶け込む様に作られている。

だが、そんな防衛機構もレーダー設備も全てが破壊されていた。

出口部分から出るとどんよりとした暗黒色の空が広がった。

車両内部の照明が灯り、燐の座っている機関砲台の銃口部分に付属されたライトが点灯する。

燐 「夜ね・・・ちょっとやばいんじゃない？」

空を見上げ、燐が焦ったように言葉を漏らす。

秋春 「確かにやばいな、早いとこ夜が開けるか都市に帰還しないとあぶねーぞ・・・」

燐の言葉を聞いて秋春もぼやき始める。

魔物の大半が視力を殆ど失っている場合が多い。

だが、完全に視力がない訳ではなく薄らとしか認知できないだけである。

そのため、暗闇の中で灯りがあると、魔物はそこに群がるという習性があるのだ。

他にも大きな音のした場所に群がったり、血の匂いが漂う場所に群がる習性がある。

灯りを消せば良いと思う人も居るだろうが、灯りを消した状態での

車両の運行は

ほぼ不可能と言ってよく、暗視ゴーグル等を装備して運転するのも危険が多く無理なのである。

しかも昼間と違い夜間だと魔力の回復が遅いのである。

詳しい理由は不明だが、夜間の魔力の回復量は昼間に比べて半分以下になってしまう。

そのため、夜間に都市外をうろつくのは頭の悪い奴だけだと言われる。

クエストの時間帯の殆どが昼間なのはこういった理由からである。

車両前方の照明設備によって映し出される切り取られたかのような風景以外は、

全てが闇に閉ざされている。

今の所魔物らしい反応は感じられないから良いが、

多分都市に到着する前に魔物がこちらと接触するのは確定だろう。

魔物と接触したとしても負けるとは思わないが危険な事に変わりには

無い。

第三十四話 夜間走行（後書き）

作者様がログインしました。

名無し様がログインしました。

作者 「やほー」

名無し 「あー、あとがき全然書いてねえのな」

作者 「そこにつつこんだらだめ」

名無し 「んで何だ？珍しくあとがきを書くみたいだが？」

作者 「んと、感想くれくれ」

名無し 「は？」

作者 「いや、この小説の感想とか欲しいなあー」

名無し 「えとー、作者の頭が沸いたのか、俺の耳が壊れたのか…
間違いない、作者の頭が沸いたな。良い奴だったのに…」

作者 「ねえ、死んでないよ？生きてるよ？」

名無し 「こんな糞つまらない文章に感想だあ？

甘ったれるなよ？他の作者見てみる、めっちゃあとがきで
頑張ってるじゃねえか！

稀にしかあとがき書かないお前に感想を求める権利はねえ

後、俺もう寝る。」

名無し様がログアウトしました。

作者 「そんな…ぼろ糞に言わなくても…

と言う訳で感想を求め…暇ならで良いんで感想とかくだ
さい。

えとー、頑張って更新しますのでお楽しみにしてくださいねー」

作者様がログアウトしました。

第三十五話 接敵へエンカウト

真つ暗な森の中、車両が通れる様にと整備された道を走る。

上空から見ても判らぬ様に、頭上は木々が生い茂り、夜空を隠していた。

とはいえ、例え夜空が見えたとしても、月明かりという恩恵は受けられないのだが…

都市内部の投影装置によって天井に描かれる夜空は過去の物なのである。

今の夜空は、薄暗く淀んだ暗雲が立ち込め、昼間は薄暗く、夜間は完全な暗闇に世界を閉ざしている。

そんな夜空を思い浮かべながら、辺りの様子を伺っていると、いきなり警告音^{アラーム}が鳴り出す。

白影 「何事であるか」

燐 「どうしたの!？」

秋春 「敵かつ!？」

アラーム
警告音が鳴り出した瞬間に名無しは右手に自動式拳銃を、左手にF
og-10を持ち、

ハッチ部分から立ち上がって、車両右側——白影とは反対側——そ
こを睨み付ける様に見る。

だが、闇に包まれた視界の中には薄っすらと過ぎ去っていく木々し
か見えない。

スピーカーからアリスの声が聞こえる。

アリス 「全方位より魔物反応接近、距離1200、魔物個体
の識別不可能、注意してください」

その声が聞こえた途端、皆の雰囲気が変わる。

風鈴 ロングレンジ ドルズ サモン ドルズオープン
「遠距離攻撃人形召喚、人形展開」

風鈴はハッチに座ったまま眼を瞑り、言葉を発する。

すると、風鈴の周りに様々な様式の弓やボウガンを持った人型の影
が現れる。

アリス 「接敵までの予測時間およそ5分、誤差±3%」

秋春 「暗すぎて敵が確認できねえーぞ！」

秋春の零した言葉は最もである。2メートル先を闇に包む程の暗さ
なのだ、

この状態で戦闘が開始された場合、向こうは此方が見え、

こちらは向こうが見えないという最悪の状態だ、秋春が灯炎で辺りライトフレアを照らし出そうとするが、

それでも10メートル先は闇に包まれている。

アリス 「輸送中の荷物の中にM79擲弾発射器と照明弾、多目的グレネードランチャー高爆弾が御座います」

そのアリスの言葉を聴いて、素早く荷台の部分に秋春が向かい、

荷台のハッチをこじ開け、その中に入って行く。

秋春 「あつたぞっ！おいっ！名無し、手伝え！」

直に目的の物を見つけた秋春の声が聞こえたので、風鈴に目配せをした後、

素早く両手の銃をしまつて荷台のハッチの中を覗き込む。

秋春 「装填はまだだ、ほらよつと」

内部から秋春がM79擲弾発射器を投げてよこしたので、それを掴み取る。グレネードランチャー

肩紐があつたので、それを肩にかけ、今度は照明弾と多目的高爆弾の入ったボックスを受け取る。

ボックスは相当な重量があるが、秋春が強引に押し上げてくれたお

かげでなんとかできた、

アリス 「接敵まで後2分を切りました」

そこでアリスの声を聞き、慌てて照明弾を装填し、車両右側の方に
向け構え、引き金を引く。

ボシュツつと言う音と、軽い反動を腕で感じつつ、飛んで行く弾を
見ていたが、

それが闇に包まれた森の中に消えるのを見守っていると、秋春が反
対側に照明弾を撃ち込み始めた、

咄嗟にこちらも新たに照明弾を装填しようとする、右側で閃光が
迸った。

照明弾によって照らされる森は、アリスの予測通りなら魔物が居る
はずの地点、

しかしそこには何も居ない、咄嗟に再装填した照明弾を後方に放つ。

秋春 「おいつ、敵がいねえぞっ！」

反対側から秋春の怒声が聞こえる。 どうやら反対側も敵が確認で
きならしい。

後方に照明弾を放ち、眼を凝らす。

アリス 「距離250まで接近、接敵までおよそ1分を切りました」

どことなく焦ったようなアリスの声が聞こえる。

燐 「ちよつとっ！敵の姿が見えないわっ！魔物の反応は本物なんでしょうねっ！」

銃座に座り、ライトアップされる車両の前方を睨み付ける燐がアリスに怒鳴りつける。

白影 「敵は居る、だが姿が見えぬ」

秋春 「くそっ、敵が見えない」

照らし出された後方には敵の姿はない。魔物の反応は確かに接近してきている。

だが、その姿は見えない。考えられるとしたら…

咄嗟に照明弾ではなく、多目的高爆弾を装填し、アリスの予測距離と接敵時間から、

今の相手の距離を割り出し、着弾予測時間を考えてからそこに向かって攻撃を放つ。

照明弾の時よりも少し大きいボシュツツと言う音と反動を受け止め、己が放った物がどんな結末を迎えるのか、未だに照明弾によって照らされる森の中を、

弧を描いて飛んでいく高爆弾を見る。

その弾が己が狙った地点に吸い込まれる様に着弾する――

光が発生し、爆炎を巻き上げる様子を見て、一瞬遅れて

ドゴォーンツッと100メートルの距離をとっていてなおこちらに届く衝撃を感じ、

爆煙も消えぬ着弾地点を睨む様に見ると、

小さな点の様な物が着弾地点の周りでもがいている…

第三十六話 防衛戦闘

名無し 「皆っ！魔物は土の下だっ！」

はるか彼方で起きている光景を遠見の魔法で確認して皆に伝える。

秋春 「なるほど、土の下か…という事は地面毎吹き飛ばすのが良いか」

凜 「この機関砲じゃ意味無いわね、私にも擲弾発射機を」

秋春はM79に照明弾ではなく多目的高爆弾を装填して、攻撃を開始し

凜は二台のハッチの中へと消えていく。

アリス 「輸送中武装にMk19があります、その設置をお願いします」

白影 「俺に任せろ」

アリスの声を聞いて、白影が二台のハッチの中に消えていった。

風鈴 ウェポンチェンジグレネードランチャーインストリション
「武器変更擲弾発射器装着」

風鈴がそう言う人と人型の影の持っていた弓やボウガンが消えて、

同じく影で作られたM79 グレネードランチャー 擲弾発射器やダネルMGLが現れ、

それを持った影がそれぞれの方向に対して弾を発射し始めた。

ドオーンツドオーンツと連続的に爆発音が響き渡る。

アリス 「敵との距離が50を切りました、敵の個体数確認、
おおよそ120です」

秋春 「数が多い…なんてグチつてもしゃーなーか」

ガゴンツとハッチが開き、グレネードランチャー 擲弾発射器を背負った凜と、大きな箱を背負った白影が出てきた。

凜 「敵の個体数は減少した？」

アリス 「敵の個体数、おおよそ110まで低下」

白影 「オートグレネードランチャー 自動擲弾発射器はどこに設置すればいい」

凜はアリスの返事を聞くと同時に眼にも留まらぬ速さでM79に多目的高爆弾を装填し、

白影は背負っていた金属製の箱を下ろして箱を開ける。

箱の中には、銃身の太い重機関銃の様な物が入っており、

箱型弾倉には多目的高爆弾を金属製ベルトリングで固定した物が詰まっていた。

白影は、固定台を取り出し、アリスの指示した場所に設置し、

固定台にある何かのコードを、床の接続部分に接続して、その固定台に自動擲弾発射器を固定する。

固定が完了すると白影が触っても居ないのにMk19は動き出し、

その銃口を前方に向け、ボシュッボシュッボシュッと連続で弾を発射し始めた。

次の弾に手を伸ばした所でガゴンッと車体が揺れた。

アリス 「敵と接触しました！車体の損傷を確認しています」

焦ったような声、咄嗟にM79をMk19の入っていた箱に投げ込んで、

右手にFog-10、左手に自動式拳銃を握って、手摺りから身を乗り出して

魔物の突撃を喰らってなお走行を続ける輸送車の側面を確認する。

すると、側面部分に数匹の魔物が張り付きよじ登ろうとしていた。

名無し 「不味い！登ってきてる！」

風鈴 「チュッ！任せるチュ！」

風鈴が素早く反応し、何か詠唱を始める。

風鈴 ウエボンチェンジボールウエボン インストリション
「武器変更長柄武器、装着」

バード 風鈴の操る機構人形10人？の内4人が擲弾発射器が消え、手に鉾ハル槍を持ち、

よじ登ってくる魔物を突き落としていく。

凜は制御室（運転席の事）のハッチを空け、その中に入っていく

ダーリン 機関散弾銃を背負って出てきた。

凜 「私のダーリンが活躍するわよ」

秋春 「糞っ、俺の魔法じゃ威力が高すぎて無理じゃねーか」

そう毒づいてからM79を使って、まだ車体に取り付いていない魔物を攻撃する。

白影は先ほどから、無言で愛用している弓、月影で魔力矢をマジックアロー

眼にも留まらぬ速度で打ち出し車体に取り付いた魔物を打ち抜いていた。

名無しも負けじとFog-10に装填しておいた火炎弾でファイアバレット

車体に張り付いた魔物を焼き落として行く。

勿論、威力は抑えて車体に損傷を与えない様に注意している。

どれくらい時間が立っただろうか？都市まで後少しと言う所。

車両の上の櫓状になっている所には、グレネードランチャー擲弾発射器の薬莖が多量に転がっており、

側面には、多少の凹みや穴がある位で、それ程深刻な破損はしていない。

アリスの「付近の魔物反応は消滅しました、引き続き警戒をしてください」と言う言葉を聞き、

辺りを警戒するのを完全に説いた訳ではないが、一息ついた。

今回、自動機関砲は、相手が土に潜って接近して、射角外から車体に飛び付いて来ると言う、

サンドウルフ砂狼が敵だったため、使う機会がなく

仕方無しに輸送中の物資であるグレネードランチャー擲弾発射器と照明弾八発に多目的高爆弾三百発、

オートグレネードランチャー自動擲弾発射器1機、ベルトリングに固定された多目的高爆弾100発を消費してしまった。

名無しは魔力を結構消費した筈だが、魔力枯渇の感じはなく精神的にのみ疲れただけであった。

秋春と凜は魔力をまったく使用していらしく疲れていなかった。

不思議な事に魔力を多量に使用する筈の人形ドールズを使っていた風鈴と

マジックアロー
魔力矢を眼にも留まらぬ速さで発射していた白影もまったく疲れて
いる気配を見せなかった。

都市に到着した時に丁度太陽が姿を現した所であつたが、

空は暗雲に包まれていて薄らと明るくなつた毎ぐらいしか判らなかつた。

第三十七話 調査ヘサーチ

都市に到着した…が、厳密に言うところとちょっと違う。

地下都市上部に存在する廃都市に到着したのだ。

シャドウマジックシティ
影潜魔法都市の真上に位置するこの都市は、

コンクリート製の集合住宅やビルばかりだったため、

その外装が剥がれ落ち、植物がそれを覆っている状態の集合住宅があったり、

半ばからへし折れた鉄骨製の電波等等があったりなど、

ゴーストタウン等と言う生易しいものではなく、

ロストシティ
廃都市と言うのがふさわしいだろう…

シャドウマジックシティ
影潜魔法都市と言うのは元の名称が黒魔術研究所であった。

国が秘密裏に違法魔術実験を行っていた施設であったが、

それを魔物の発生初期段階から民間人収容可能に改造した物である。

結局は民間人の収容がかなり遅れた所為で地上に存在した都市の人口の

1万分の1程度しか助けられなかった訳だが…

今現在乗っている車両でシティに入るには大型転送装置を使う必要がある。

1個分隊（8～12人程度）なら、通常の転送装置で足りるのだが、それ以上…小隊（30～60人）であつたり、車両で移動する場合は、

大型転送装置を使わないといけない。

大型転送装置は固定されていて、移動させる事が不可能なので、

大型転送装置の出入り口付近は常に重武装した小隊が代わる代わる警備をしている。

廃都市の内部には複数の探知システムがあり、魔物の進入をいち早く察知できるようになっている。

その為この車両で廃都市内部に侵入しようとすれば、

こちらには認証用の携帯端末を所持している人が数人居たとしてもいらぬ誤解を与えてしまうだろう。

その誤解を発生させない為に小隊と連絡を取ろうと通信機をミラーズが弄っているが、

小隊からの応答が無く、廃都市の入り口で立ち往生しているのである。

ミラーズ 「ああもうっ、周波数はこれであつてる筈よ、なんで応答が無いのよ」

ミラーズが運搬用車両に取り付けられた通信機相手に文句を垂れている。

クルシス 「小隊に何かあつたのか…？」

クルシスが泣き疲れて眠ってしまったスマレを後部座席に寝かせ、通信機を弄っているミラーズの横にやってきた。

クルシス 「1班だけ偵察に行かせて見る？物資ならまだあるでしょ？」

ミラーズは助手席に座っているアリスを振り返って質問をする。

アリス 「はい、現在の消費量で行けば食料は半月、武装は1ヶ月はもちます」

淡々としたアリスの返答を聞いてミラーズが「どう？」と問う眼でクルシスの顔を見る。

クルシス 「構わないぞ班には誰を配属する？車両の運転は主に俺

「がやるから俺は除外だろ？」

ミラーズ 「ええ、後非戦闘員であるアリスとスミレも除外、防衛の為に風鈴も除外ね」

クルシス 「名無しとスイレ、後は白影と凜で良いんじゃないか？」

ミラーズ 「んゝ…そうね、そうしましょ、アリス、上に居る皆にその事を伝えて」

アリス 「了解しました」

ミラーズ 「後ついでに持たせる物資の指定もよろしく」

今度はアリスは返答はせずに眼を瞑った。

車両の上でアリスがスピーカーを使用して名無し達に今の事を伝えているらしい。

クルシス 「はあ…神のご加護があらん事を…」

溜息をついてボソリとクルシスが呟いている…

ミラーズ 「神なんて者が居たとしても、やる事は人間を地球上から消し去る事ぐらいでしょ？」

「こうなった原因作つたのは人間な訳だしね」

アリス 「―以上が今後の予定で御座います。質問等がありますか？」

車両上部の櫓状になった所に居た名無し、スイレ、ン、風鈴、凜、秋春、白影がその放送を聞いて

思い思いに所持品の確認をし始めた。

アリス 「無いようですね、では物資の補充後出立してください」

ブツンツという音がした後、スピーカーは停止した。

名無しとスイレ、ンも持ち物を確認していく。

名無しはサバイバルシ、ョルダーバッグの中を調べて、特に問題がない事を確認した。

名無し 「俺は問題ない、今すぐでも行ける」

スイレ、ン 「私も問題は無いわ」

名無しは自動式拳銃用の弾丸を数発と魔力を少し消費しただけで補充の必要はなく、

スイレ、ンは戦闘の際に車内で探知魔法の為に魔法を少量使用しただけなので同じく補充は必要ない。

白影 「問題ない」

白影は魔力を多量に消費していた様に思えるが、魔力の最大量が多いのか大丈夫らしい。

凜 「えつとぉ、^{スラッグ}単粒弾の特殊仕様の奴が切れちゃった」

凜は戦闘の際に機関^{ダーリン}散弾銃の^{スラッグ}単粒弾を多量にばら撒いていたので

^{スラッグ}単粒弾の凜仕様（機関^{ダーリン}散弾銃用に金属製分離式弾帯で弾帯にされた物）が切れたらしいが…

白 「^{スラッグ}廃都市内部は入り組んでいる、^{スラッグ}単粒弾はいらないだろう」

廃都市内部は崩れ落ちた建築物の所為で入り組んでいる。

^{スラッグ}単粒弾よりは、散弾の方が入り組んでいる場所で使う機会が多い。

そのため、今回は散弾で十分と言う意味だろう。

第三十八話 襲撃

名無し達の出立を見送ってから15分程立った時に唐突にアリスがアラーム警告音を鳴らした。

アリス 「生命反応を発見しました、種族は人間、数は12、武装をしているようです」

固定機関砲のレーダー機器を確認してから、秋春が声をかけた。

秋春 「何だ？警備隊の奴らじゃねえのか？」

風鈴 「ありえないチュ、警備隊の人数は一個小隊だから全員が転送装置から離れる事はないはずチュ」

見た目の割に落ち着いた意見を風鈴が述べる。

秋春 「……つつー事は？敵か？」

その言葉を聞いて秋春が眼を細めた。

風鈴 「それはまだわからな——ッ!？」

ブシュッと言う音がし、風鈴がふらついて手摺りを掴んだ。

秋春 「どうし——チッ!敵かつ!！」

秋春は風鈴を抱き寄せて獄炎円陣で飛来する弾丸を焼き尽す。
フレイムサークル

風鈴 「痛いチュ……」

抱き寄せた風鈴の脇腹の辺りに穴が開き、血が流れ出していた。
弾丸は貫通していったのか前と後ろの二箇所から血が出ている。

秋春 「チツつくしょう、治癒魔法なんて使えねえぞ」

咄嗟に服を捲くり傷口を確認し、威力を抑えた火炎ファイアで傷口を焼く。

風鈴 「チュツ……！！」

ジューツと肉の焼ける音がした瞬間に風鈴の体が跳ねたのでそれを押さえつける。

秋春 「我慢しろっ！」

とりあえず傷口を焼くと言う強引な止血を終えてから、風鈴を車両の中に運び込む。

車両に乗り込み、入り口を閉じた後に獄炎円陣フレイムサークルを解く。

秋春 「敵は12人か……俺を攻撃したのは突撃銃アサルトライフルじゃねえか？」

秋春 「スナイ……パーも……居るチュ」

止血はしたが傷が深いのだろう、風鈴が喋るのも辛そうだ。

秋春には治癒魔法は使えない。

確かミラーズは医者だった気がする、さっさと風鈴をミラーズに押し付けて

急襲をかけてきた奴らを焼き払わなくては。

クルシス 「秋春か、今さっきアリスが言った通り…風鈴！どうしたんだその怪我！」

車両内部で機器を操作していたクルシスがこちらを振り返ると同時に驚き声を上げた。

秋春 「狙撃された、よっぽど下手糞なのか腹あぶち抜きやがったがな」

風鈴 「お腹じゃ…なか——ッ！…ったら、私死んでるチュ」

クルシス 「無理に喋るな、おいミラーズ！風鈴が撃たれた！怪我の治癒を！」

クルシスが荷台へと続く扉へと声をかけると、ミラーズが慌てた様子で現れた。

ミラーズ 「怪我の治癒をするわ！そこの空いてる座席に座らせて！」

秋春 「わかった」

空いている座席に風鈴を寝かせる。

ミラーズが風鈴の服に手をかけ様として、クルシスと秋春を睨む。

クルシスと秋春は一瞬、疑問を浮べ顔を見合わせる。

ミラーズ 「風鈴は一応女の子なのよ？」

ミラーズのその一言で思い出したかの様に二人は慌てて荷台の方へと向かう。

秋春が一瞬足を止めてミラーズに声をかけた。

秋春 「ああ、傷口だが焼いて止血しといたぞ」

ミラーズ 「はあ？焼いた！？何で焼き止血してんのよ！あれは裂傷とか切り傷に使うものでしょ！」

秋春 「傷口見てみる、理由が判る」

秋春はそう言うのと荷台の中に入っただけだった。

それをしっかりと見届けた後、風鈴に声をかける。

ミラーズ 「風鈴、服脱がすわよ？」

風鈴 「チュ……」

苦しげに風鈴が声を返すが承諾か拒否か判別がつかない……

とりあえず承諾と受け取り帽子を外し、上着を脱がす。

ミラーズ 「はあ、秋春の選択は正解なのね…」

傷口を見てミラーズは溜息をついた。

弾丸は貫通していた、弾丸自体は鉛玉だったのだろう、だが魔力が付加された魔弾だったらしい。

へその3cm程右横の所を弾丸が貫いている。

それは良い、弾丸が体内に残っていなければ単なる治癒魔法で治癒が可能だから、

弾丸の当たった箇所から半径2cm余りの皮膚がまるで荒い鑢に削られたかの様になっていて、

その上で高温で短時間の間に焼いたかの様に火傷の後が残っていた。

弾丸自体の種類は削取弾シェイプバレットだろう。

魔弾のレベルが低かったのと、風鈴自信の魔力抵抗、それと、

着用していた護法結界ガードプロセスバリアの付加された衣服のおかげで、比較的傷は浅い。

削取弾シェイプバレットの効力は、着弾した場所、対象を内側から構築組織を抉ると

言う効力である。

単なる人間が喰らえば、着弾した部分から、貫通後の部分までが、挽肉^{ミンチ}になるのだ。

銃跡以上のダメージを与える事が出来、通常の医療では治療できない傷を与えるという事から、

基本的に使用が禁止されているはずなのだが：

先程脱がした風鈴の服を一瞬一瞥して、秋春の判断能力を評価した。

風鈴が被弾、被弾箇所はお腹の辺り、弾丸は貫通、血が流れるのは当たり前である。

だが、その出血量が異常に多い事を一瞬で秋春は見抜いて止血を行ったらしい。

鑢で削られたかのような部分は、もし焼き止血を行っていなければ

ミラーズが手当てを開始する頃には出血多量で命を落としていただろう…

そんな事を考えつつも、横から差し出された毛布を折りたたんで風鈴の胸の辺りに被せる。

ミラーズ 「ありがと、もう大丈夫なの？」

お礼を言いつつ、毛布を渡してくれた相手に尋ねる。

スマレ 「もう大丈夫」

一瞬だけスマレの顔を見る。

眼を泣き腫らして真っ赤にしている以外は表情も無く無理をしているのか否か判別はつかないが、

とりあえず大丈夫だろうと判断し、スマレに指示して風鈴の治療を開始した。

第三十九話 警備隊

ロストシティ
廃都市内部に侵入してから30分が経過した。

現在位置は廃都市の大通りに並ぶ様にして建っていたビルの、

四階のデスクワークの為の部屋だと思われる場所に居た。

この都市は廃都市であり、窓ガラス等は殆ど割れていたが、この部屋の窓は割れていなかった。

理由はここに寝泊りしていた人達が居たからであり、

その生活をしていた事を示す様々な物が落ちていた。

レーション
携帯食料の容器や寝袋、そして衣服や突撃銃や散弾銃等の武装。
アサルトライフル ショットガン

他にあった物は……焼き溶かされた通信機の残骸と、数人分の人骨である……

そして、部屋の中は多少の熱気と、人を焼いた臭気が籠っていた……

凜 「炎系の魔法ね、ガードプロセスバリア護法結界が施された衣服が残ってる……」

その人骨が纏っていたガードプロセスバリア護法結界？の施されていたらしい警備隊のコートを凜が漁っている。

白影 「人体だけを焼失させるとは……器用であるな」

白影が少し場違いな感想を述べるが、名無し自身もその意見には賛成である。

スイレン 「酷い…」

部屋の中には争った形跡は無い、そして人骨は一箇所に集められて居た。

集められたと言うより、そこで初めから焼いていたかの様である。

この部屋の中には結構な量の可燃物が存在するが、そのどれにも引火していないし、

床自体も焦げていない、あるのは肉が焼け落ち、白骨化した人の骨のみ。

周りに影響を与えず、特定の対象のみを焼く魔法…
ポイントフレア対象焼失…

凜 「あつたあつた、防火構造で助かったわあーちゃんとカードキー見つけたわよ」

コートを漁っていた凜が何かを見つけて掲げる。

それは黒い色の、厚さ1.5mmの80～90mm×50～60mm程度の大きさのカードであった。

白影 「防火構造でなくとも焼ける心配は無かったと思うが」

確かに白影の言う通りである。

対象焼失と言うのは、自分が選んだ対象のみを焼失させる炎系の難易度の高い魔法である。

対象物、例えば人間や動物等を指定すればそれ以外の物を焼かずに対象だけを焼ける。

実際は癌治療の為に作られた魔法だが、使い方次第では、

この部屋のように、他の物を一切焼かずに人の命を奪う事が出来る。

凜 「それで、この状況の報告をしたい訳だけど、

通信機は焼失してるわねえ…焼け残ってるけど」

表面の合成樹脂が融解して、中の基盤も焦げ付いている大型の通信機が窓際に鎮座している。

それを見ながら凜が今度は腰のポーチの中から小型通信機を取り出す。

凜 「と言う訳でこの小型通信機を使おうと思ったけど、繋がらないのよね」

凜の言う通りで、先程から通信機を使って通信を行っているが、応答は無い。

名無しやスイレン、白影が持っていた通信機も同じ様に応答が帰ってくる事は無い。

白影 「つまり、クルシス達に何かあったという事ではないか

「？」

スイレ 「だったら早く戻らないと！」

白影の言葉にスイレが過剰反応するが、凜がすぐさま宥める。

凜 「落ち着いて、まだ何かあったって決まった訳じゃ……ない……」

だが、言葉の途中で凜は耳を澄まして何かを聞き取ろうとし始めた。

体が勝手に動き、魔力で聴覚の強化を行った……

下の階層から4人分の足音が聞こえる……だが、足音を消している様な感じの歩き方だ……

名無し 「下から4人上がって来る」

カチャリカチャリと合成樹脂で出来た何かと金属の金具のぶつかり合う音が微かに聞こえる。

その音から相手の武装は主に銃……アサルトライフル突撃銃であると予測し、

直に自動式拳銃を引き抜きかけて、一瞬考えた後、Faithful 1-02を引き抜いた。

白影 「仲間では無い様だな……合図が無い」

白影が皆に注意を促す、下の階層から上がってきた足音はこの部屋

をまっすぐ目指している。

警備隊の仲間であれば、魔力の微弱に周りに発散し位置を仲間に伝ええると言つ事をするはずである。

しかし、今この部屋に向かつてきている人物達はそんな事はしていない。

むしろ、魔力を内に封じ込めて、居場所がばれない様にしようとしている。

だが、魔力の封じ込めに集中し過ぎて足音が微弱に漏れている、

一流ではなく、二流か三流であろう…

凜 「油断は禁物ね…」

聞き耳を立てていた凜はいつの間にか垂直二連散弾銃を持っていた。

普段使っている機関散弾銃^{ダーリン}は背負っている。

この狭い部屋の中で機関散弾銃^{ダーリン}を取り回すのが難しいからであろう。

白影は月影を取り出して矢を番えている。

スイレンは杖を取り出して強化詠唱をほんの些細な魔力も漏らさずに行っている。
チャージスベル

自分は Faithful - 02 に魔弾を精製していく。

第四十話 擬態蛙へミミクリイリツチ

足音が近づいて来る。

同じ階層に到着したようだ…だが、そこに来て異常な音を捉えた…

水音がする…ピチャリピチャリと…何だこの音は…水筒の水の音？

いや、唯の水にしては粘性が少し高い様な音だ…

そこに来てとある生物の情報が頭の中に浮かんだ…

名無し 「なっ！？凜！機関散弾銃を構えろ！…！」

咄嗟に凜の名を叫び、垂直二連散弾銃ではなく、機関散弾銃ダーリンを使うように指示する。

凜 「えっと…？何で？」

戸惑いを見せるのは当たり前だろう、だが戸惑っている暇は無い。

咄嗟に凜に近づいて、凜に銃を向ける。

白影 「おい！名無し！」

白影が驚いた表情をした。

凜は一瞬、戸惑った後、垂直二連散弾銃をしまつて、機関散弾銃を一瞬で構えて

その銃口を入り口に向ける……その瞬間に扉の前に人影が現れた。

「撃てっ！」

ギュガツガツガツガツガツガツガツと言つ音と共に凄^こい勢^せいで散弾がばら撒かれる。

スチール製の扉はまるで紙屑の様に千切れ飛び

その扉の向こう側に居た人物ごと、原型を留める事なくコンクリートの壁に叩きつけられた。

グシャリツ：そんな鈍い音が、機関散弾銃のたてる轟音の中に聞こえ、その瞬間に凜は射撃をやめた。

「いきなり銃口を向けないでよ、寿命が縮むじゃない」

凜がこちらに文句を言うてくるが、その間に Faithful - 02の銃口を

“青黒い色”の血溜りに沈む紙屑の様にぐちゃぐちゃになった元人型の何かと扉に向ける。

名無し
「リッチ
蛭だ……」

先ほど、頭に浮かんできた生物の名を言う。

名無し 「蛭だ！^{リッチ}こんな乾燥地帯に居る訳ないのに！」

叫びながら、マガジンの中に装填されていた電撃弾^{スタンバレット}LV3を遠慮なく発射する。

それは、紙屑のようになった扉に着弾した瞬間に激しい電撃をおこし、そして肉が焦げた臭いが漂い始めた…

凜 「え？^{リッチ}蛭？^{ミミクライリッチ}もしかして擬態蛭？でもここに居る訳ないわよね？」

白影 「待て、まだ後3人居たはずだ」

凜が疑問を発するが、白影が凜に注意を促す。

スイレンは先程の光景がショックなのか、動揺して、手足が震えている。

名無し 「来るぞ！」

他の3人（匹？）の様子を音で伺っていると、一気に入り口から入って来ようとする音が聞こえたので、

咄嗟にほかの奴に注意を呼びかける。

スイレンの手を引いて入り口から距離をとった後に、スイレンを背に庇う様に立つ。

白影も凜も名無しの行動に習う様に入り口から距離をとり、入り口に銃口と矢先を向けた。

ズルリツつとゴム底を擦る様にしながら、真つ黒な人物（？）が入ってくる。

真つ黒の軍用ブーツに、漆黒のズボンにベスト、そして顔を完全に覆うようなヘルメット…

武装は、ベストに固定された手榴弾3個に片紐で吊るしているM4カスタム…

その人物（？）達はゆっくりとこちらに近づいて来る。

白影が矢を放つ…ブスリツつとその矢は最初に入ってきた人物（？）の左足の太腿に突き刺さる…

だが、その人物（？）は一瞬だけビクリツつと体全体を揺らした…一瞬だけ人型を保っていた

腹部の部分がダラリツつと形を崩すが、それも直に元に戻る。

白影 ミミクリイリツチ
「確かに、擬態蛭だ、炎か電気で焼くしか無いぞ、こいつらは凍らせても死なない」

その様子を見届けた白影は魔力を弓に流し込んで、放つ矢に電気を纏わせる。

凜 「ここで炎を使うのは得策じゃないわね」

凜の言う通りだ、可燃物が散ばっており、通気性も悪いこの室内で炎を使えば、

己の放った炎で引火し自分達も危険だ。

このメンバーの中で電気を扱えるのが白影と名無し、それとスイレ
ンだ…

白影は勿論、矢に纏わせるので直接当てるよりも威力は落ちる。

それは弾丸も同じ事であり、名無しの電撃弾も威力は落ちる。
スタンバレット

そのため、止めを刺すのであればスイレ^{インデゲネーション}ンが適
切だが…

頼みの綱のスイレ^ンンはショックで固まってしまっている。

^{ダーリン}凜の機関散弾銃で擬態蛭^{ミミクリイリッチ}を足止めしつつ名無しと白影の二人が止め
を刺すという方法しかない…

^{ミミクリイリッチ} 擬態蛭について

・名称「擬態蛭」
^{ミミクリイリッチ}

・体長 5～10cm程

・説明

普段は水辺に生息しており、不用意に近づく動物や魔物を捕食している。

名称にもあるようにこのヒルは擬態を行う。

動物の体内に潜り込んで内部の筋肉組織や内臓等を貪った後の残った毛皮の内側で繁殖を繰り返し、

その擬態対象の生物と同等の体積まで繁殖が完了すると、

その毛皮の内側でヒルがそれぞれの部位の働きを補い始める。

擬態中は、内部で蛭同士が筋肉の役割をする為に、粘度の高い体液を発生させる。

その為、見た目は元の動物でも、独特の水音で見分ける事が出来る。粘度の高い体液は蛭自身の体液であり、水を元に作られている為、水場から離れた所での擬態は出来ない。

一匹でも擬態蛭^{ミミクリイリッチ}が残っていると、

その一匹から再度、大量に増殖する可能性があるため、

炎で焼き殺すか、電気で感電死させる必要がある。

注意点は擬態蛭^{ミミクリイリッチ}は、体液がとても氷結しやすいが、

擬態蛭^{ミミクリイリッチ}は体液が凍結し生命活動が停止したとしても、

再度、体液が常温に戻って液体に戻る事で再度生命活動を再開するのが確認されている。

その為、氷結等の魔法を使っても完全に殺す事は出来ない。

第四十一話

ミミクリイリッチ
擬態蛭を殲滅する事には何とか成功した。スイレンが途中でシヨツクから立ち直り、

直に「落雷」^{サンダーボルト}と「噴火」^{イラプション}を同時詠唱&発動し、

ミミクリイリッチ
擬態蛭を、纏っていた護法結界防弾防刃チョッキごと、焼き払った。
ガードプロセスハリア

室内で噴火^{イラプション}を使用するのは危険なのだが、そこまで気が回らなかったらしい。

咄嗟に名無しが吸魔弾^{デーパーマジック}で自分達の方まで流れ出てきた

魔力によって作り出された擬似的な溶岩と業火を消した為、怪我人は出なかったが…

一応、念の為に名無し自身も「着火」^{ファイアライター}で擬態蛭の亡骸^{ミミクリイリッチ}を焼いておいた。

そして、白影が言うには、ここに留まるのは得策ではないし、

ミミクリイリッチ
それに擬態蛭が居ると言う事は他の魔物も居る可能性があるという事でもある。

白影は隠密行動に優れているので、白影は一度クルシス達の所へ戻り、

名無し達3人はゲートを起動させて都市内部に侵入すると言う感じの行動をする事になった。

大型ゲートの管理の為の小隊が全滅させられた。

更には、ミニクリイリッチ擬態蛭が擬態していた人間の着用していた防弾防刃チョッキや

装備していたM4カスタムはこの都市で使用している物と違う型番の為別の都市の者であろうとの事だ。

どうしてこの都市のゲート管理室兼、ゲート守備隊の拠点にやってきたのかは不明だが

言える事は擬態蛭は水辺に生息する物で、生憎と廃都市は水辺等と言う物は存在しない

その為、誰かが意図的にここに放った可能性がある。理由は判らないが…

とにかく、大型ゲートの管理小隊が全滅しているのに都市内部から様子を見に来る気配がない。

それもおかしいのだ、小隊からの連絡が途絶えた場合、速やかに様子を見に来るのだ

それがないと言う事は都市内部で何かあった…

最悪の場合、ミニクリイリッチ擬態蛭が都市内部に侵入しており、中は地獄絵図になっている可能性も捨てきれない。

その話を聞いた時、スイレンはショックを受けた様だが直に希望に縋り付いている。

凜は息を呑んだ後、機関銃の様子を確かめ、白影は短刀を取り出して此方に差し出してきた。

白影 「名無し、お前が唯一白兵戦が得意だ、この短刀は炎系魔術の媒体に使える」

名無し 「えと…ありがとう」

その差し出してきた短刀を受け取る。長さは30センチ程、鞘には華やかな装飾は一切無く、

その刃は研ぎ澄まされており実用性のみを極めた短刀であるのが伺える…

名無し 「高価な物じゃないのか？」

白影 「俺が自作しただけだ、焼灼止血を行う時に使う為にな」

確かに、この刃なら焼灼止血を行うのに適しては居るだろうが…

そもそも魔物の攻撃を喰らった場合、魔物の毒が体を蝕む場合があるので、

すぐさま治療及びに治療薬の投与を行わなければ最悪、魔物になってしまうのだが…

白影 「応急処置用だ、安心しろ」

此方の表情から考えている事を読んだのか白影が声をかけてきた。

凜 「さて、そろそろ休憩も終わりにしましょうか、白影、連絡は任せたわよ」

機関銃を背負い、垂直二連装散弾銃をいつでも撃てる様に持ち、凜が立ち上がる。

スイレンもそれにつられて自分の身長程もある杖を両手で持ち立ち上がった。

名無しは短刀をサバイバルショルダーバッグに入れ、立ち上がる。

それを見た白影は一瞬名無しの顔を見たが

「武器として扱い慣れていないと思う」と伝えたと白影は何も言わずにいてくれた。

白影 「じゃあ、俺は行くがお前達も十分注意しろよ、人影を見つけても不用意に近づくなよ」

白影は対人恐怖症に陥りそうなありがたい忠告を言うと、一瞬でその場から居なくなった。

いや、実際には目の前に居るのだが、存在が感知できないのだ。

視界の中には入っているのだが、そこに誰か居ると意識できないの

で

白影は視界の中に居ながらも誰にも見つけられず誰にも邪魔されず
に行動ができるのだ。

そんな白影が歩き出すともうどこに居るのか判らなくなる

此方は白影姿は捉える事はできても、それが白影だとは思わないし
思えない

そもそも人間であるか以前にその姿を捉えても意識できないのだ。

一種の強制暗示を周りに振りまいて、自分の姿を捉えられなくする
物とは少し違う。

それだと、自我を持っていない魔物には通用しない。

白影の場合は文字通りで存在を“消す”。魔力を使って己の存在感
やそこに存在している証拠、

例えば体温や気配、果ては体内の電気信号に至るまで全てを

魔力を使って作り出した別空間に封じ込めるのだ。

しかし、白影自身の肉体と意識は此方に留めて置くのである。

その為、特殊な計測機器を使つたとしても白影の存在は感知できな
いのである。

魔力漏れも全く起こさないので、魔力を頼りに探す事も出来ない。

勿論、弱点もあるが、その弱点を突かれる程、白影は甘くない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2189y/>

消失した記録～ロストメモリー～

2011年12月13日14時54分発行